

紀要愛媛

第 20 号

松山平野の大型器台と弥生時代後期遺跡	松村さを里	1 ~ 22
別名端谷 I 遺跡 2 次で確認された古代の製塩炉と製塩土器をめぐって	青木聡志・福本佳織・松葉竜司	23 ~ 42
別名端谷 I 遺跡の古代の評価をめぐり基礎的整理 — 緑釉陶器と土師質土器三足盤 —	青木聡志	43 ~ 80
湯築城跡出土の水晶製五輪塔形舍利容器について	柴田圭子	81 ~ 90

2024

公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター

松山平野の大型器台と弥生時代後期遺跡

松村さを里

1 はじめに

弥生時代後期には西日本各地で器台を用いた祭祀が発展する。瀬戸内地域では弥生時代後期後半に特殊器台と特殊壺を発展させた器台祭祀の中心地域といえるのが吉備地方で、一方、瀬戸内地域の西側では大型器台をもちいたもう一つの器台文化が伊予地方を中心に展開している。

筆者はかつて伊予地方における器台の分類を行い、西部瀬戸内地域に広がる弥生時代大型器台の発展と展開について述べたことがある(松村2008a)。伊予では後期中葉以降に大型器台が独自に展開するようになり、後期後半には発展を遂げ大型器台が加飾性を高め最大の法量となり、伊予の大型器台が豊後・周防地方など西部瀬戸内地域にも広がりを見せる。伊予から西部瀬戸内地域に広がる大型器台を「西部瀬戸内系大型器台」と呼称し(谷若1996・松村2008a)、西部瀬戸内系大型器台の集成を行った(下條・松村2008)。

この西部瀬戸内系大型器台の中心的な分布を示すのが松山平野である。本稿で述べようとする松山平野での大型器台出土遺跡の分布と遺跡群についても検討したことがあり(松村2008b)、大型器台の出現について松山平野東部の来住台地上に位置する久米遺跡群に注目し、平野内の遺跡・遺跡群のなかで器台の分布に遍在傾向がある可能性を示したが、当時は各遺跡や遺跡群について十分な検討まで至らなかった。その後、北井門遺跡2次調査など弥生時代後期の集落遺跡調査が増え、大型器台の出土事例も増えていることから、あらためて時期ごとの大型器台の集計と出土遺跡の分布を整理し、松山平野の大型器台の出現と弥生時代後期遺跡の展開について考えてみることにしたい。

2 松山平野の弥生時代後期の土器編年と遺跡群

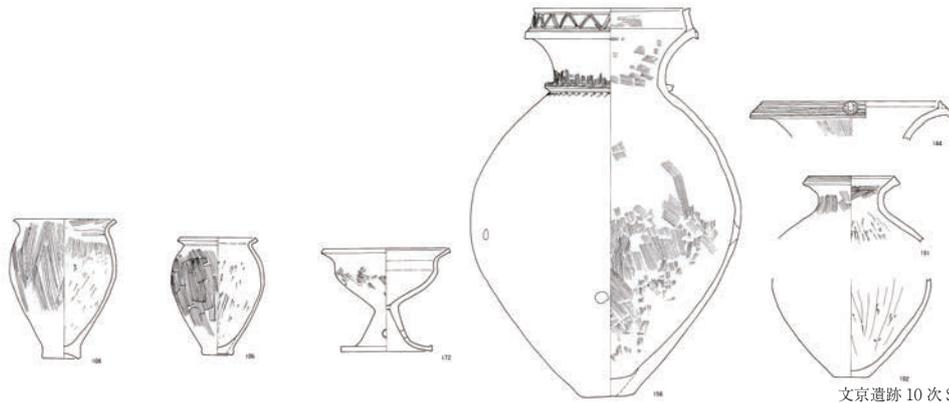
(1) 松山平野の弥生時代後期土器編年と器台の変遷

はじめに松山平野の弥生時代後期土器編年のなかで器台の分類と変遷について確認しておく。

松山平野の器台の変遷は、梅木謙一氏による弥生時代後期土器編年を基にしている。梅木編年では、弥生時代後期土器を初頭(後期 I-1 [梅木1991・1996・2001・2015] /様式と編年V-1 [梅木2000] (以下略す))・前葉(後期 I-2/V-1)・中葉(後期 II-1 /V-2)・後葉(後期 II-2/V-3)・終末期古相(後期 III-1/V-4)・終末期新相(後期 III-2/V-4)・古墳初頭(後期 III-3/記載なし)と区分する。

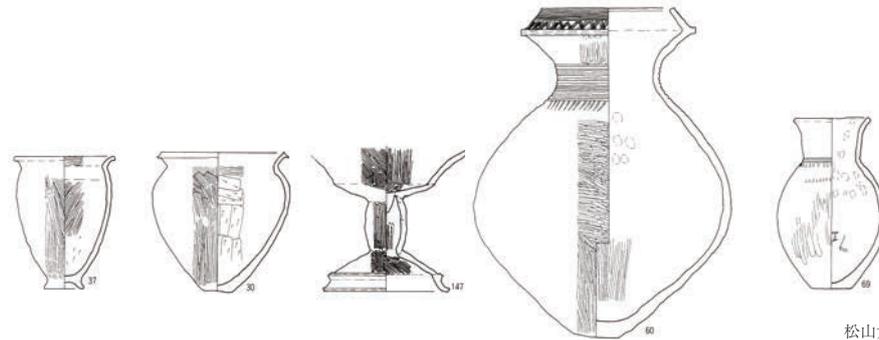
以下、梅木編年を基準にして、松山平野の器台の分類と変遷をみていこう(図1・2)。大型器台はD1型式・D2型式・E型式が該当し、大型器台の画期は、後期中葉～後期後葉の古段階が出現期、後期後葉～終末期古相が盛行期、終末期新相～古墳初頭が衰退期と捉えられる。図2は変遷図(松村2008a)に、その後調査された北井門遺跡2次調査資料を追加して再掲したものである。

前葉 (I-2)



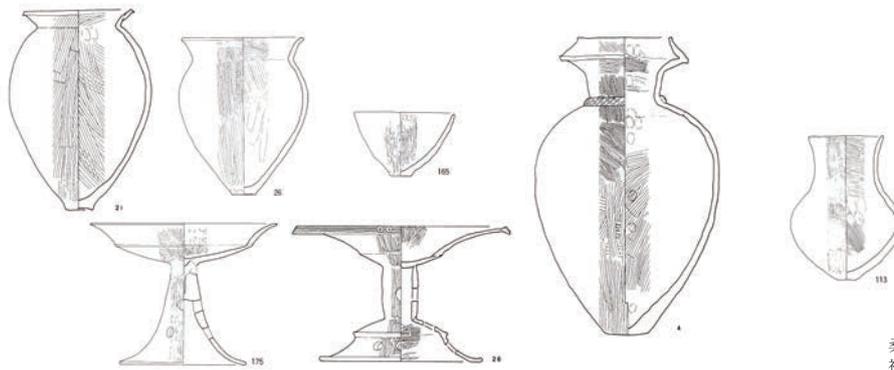
文京遺跡 10次 SK15・SX14

中葉 (II-1)



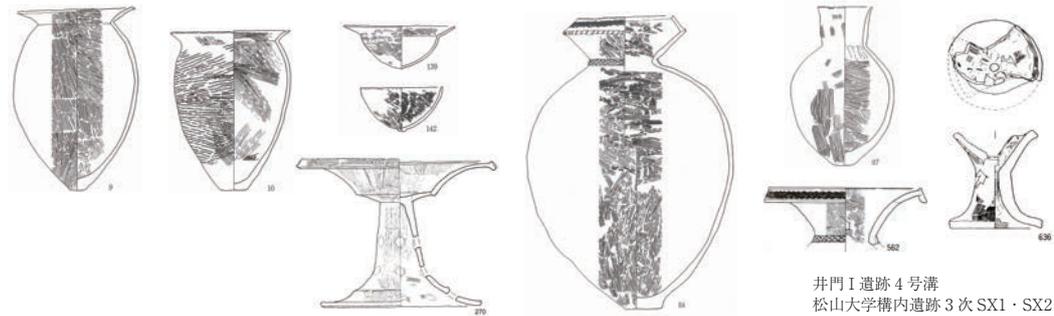
松山大学構内遺跡 2次 SB7

後葉 (II-2)



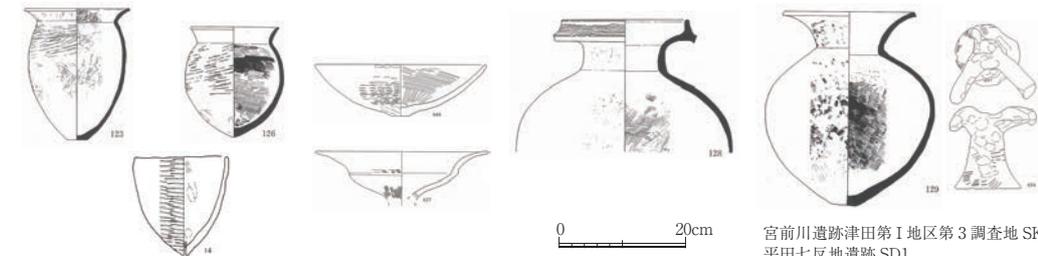
桑原田中遺跡 SK1
福音寺筋違 F 遺跡 SB5

終末期
古相 (III-1)



井門 I 遺跡 4号溝
松山大学構内遺跡 3次 SX1・SX2
東本遺跡 4次 SB302

終末期
新相 (III-2)



0 20cm

宮前川遺跡津田第 I 地区第 3 調査地 SK7
平田七反地遺跡 SD1
樽味立添遺跡 SB13

図1 松山平野の弥生時代後期土器 (S=1/12)

後期前葉

後期初頭(後期 I-1)は中期の凹線文土器の器形や施文の特徴が甕や壺の一部に残され、凹線文が沈線文へと移行する時期とされる。くの字状の口縁となる甕には口縁端部に擬凹線文(沈線文)をもつものがある。後期前葉(後期 I-2)には後期的な器種と形態が主体を占めるようになる。複合口縁壺、高杯、器台や支脚といった後期土器が成立するが、複合口縁壺、器台や支脚はまだ少ない。甕は比較的肩部の張りが強く、底部は上げ底のものと平底のものがみられる。口縁端部は面を持ち小さく上方に拡張して擬凹線文(沈線文)を施すものがある。外面はハケ調整、内面はケズリがみられる。

器台は胴部がくびれて口縁部と裾部が上下に大きく開く器形のものがある。相対的に大型のものは、双曲線状に長い胴部に凹線文を施す弥生時代中期(凹線期)の器台Aの系譜を引くもので、中部瀬戸内地域に由来する器台と考えている。松山平野では後期前葉にA3型式として現れる。凹線期の器台に比べて器高が低く口縁部と裾部の開きが横に大きく開き、口径30数cm以上、器高20数cmとなる。小型のものは、法量が口径10数cm~20数cm、器高10数cm~20cm弱で胴部が双曲線状にくびれるいわゆる普通器台で、これをB型式とする。小型で、B型式よりも胴部の直線化がみられ器高が伸びたC型式も存在する。後期前葉には大型器台は出現していない。

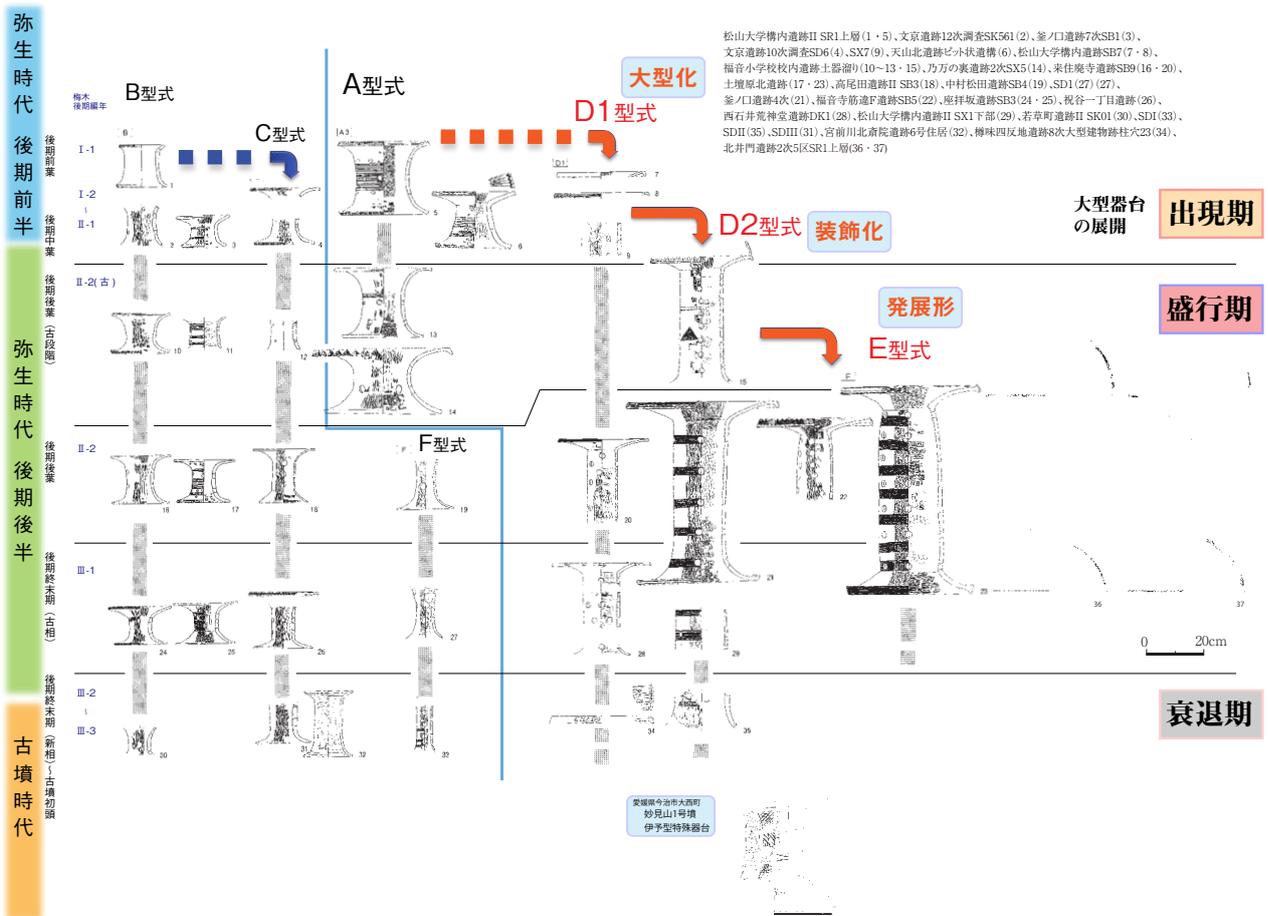


図2 伊予(松山平野)の器台の変遷 (S=1/24)

後期中葉

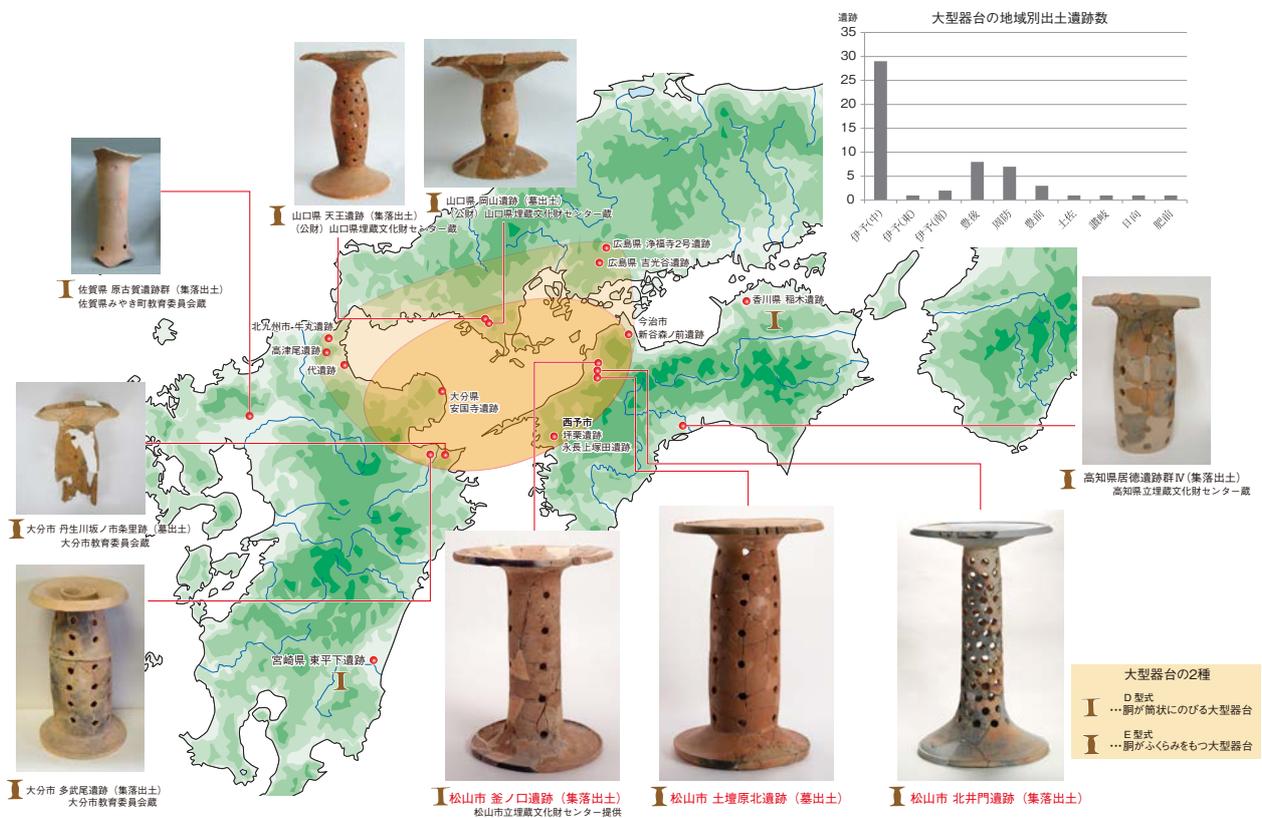
後期中葉(Ⅱ-1)には複合口縁壺が一定量出土するようになり、長頸壺、外反口縁の高杯、多様な鉢、器台や支脚が定着し、中葉～後葉(Ⅱ-2)にかけては複合口縁壺や長頸壺が隆盛する。中葉(Ⅱ-1)の甕は口縁がくの字状に伸び、胴部は肩部よりやや下位で張り出し底部は平底となる。胴部外面はハケ調整で、内面にケズリもみられる。高杯では、脚部が筒状もしくはエンタシス状で、杯部と裾部が二段に開く装飾高杯が出現している。

器台は、普通器台B型式が一定量出土するようになり、この時期に、A3型式から胴部が筒状に長く伸長した西部瀬戸内系大型器台D1型式が出現している。

後期後葉

後葉(Ⅱ-2)には複合口縁壺と長頸壺や直口壺などの中型壺、鉢のほか大型器台、普通器台が増加する。甕口縁部は、くの字状に屈曲し上方に伸び、胴部は長胴気味の倒卵形を呈すものが増え底部は平底を呈す。壺や高杯・器台は全般にミガキを施すなど土器の作りが丁寧で、加飾傾向にある。

器台は、D1型式にやや遅れて後期中葉～後葉古段階に、D1型式より大型で加飾性の高いD2型式も出現する。D1型式は口径30cm以上、器高30cm以上、D2型式は口径35～50cm、器高50cm以上となる。大型器台は下垂した口縁部が多様な文様で装飾され、胴部には多段の円形透かしをもつ。とくにD2型式は口縁部の文様が多样で浮文が付加されるものも多く、胴部文様には多条沈線文と円形透かしが段を成して施されるなど装飾性が高い。後期後葉には、大型器台D1型式と



D2型式にくわえE型式が出現する。E型式は胴部上部がすぼまり、中位をエンタシス状に膨らませたもので、D型式の発展形ととらえられる。D2・E型式の法量は出現期以降最大になり、釜ノ口遺跡4次や土壇原北遺跡、北井門遺跡2次調査などで器高が60～70cmを超えるものが出現している。また北井門遺跡2次のE型式の大型器台は細身で大型の円形透かしを多段斜め列状に施した独特のものであるが、同形態・同法量のものが同一遺跡内で多数出土しており、ある一定の規格が存在した可能性をうかがわせる。そして、この時期の大型器台D・E型式が西部瀬戸内地域へと広がりを見せている。F型式は普通器台で、胴部径は6～7cmと細身で独特の形状をもち高杯の脚部に類似する。

松山平野では弥生時代後期中葉～後葉にかけて、集落内で多量の土器が廃棄された土器溜まりが多く検出されるようになる。土器祭祀に用いられる器種は壺を中心として高杯・鉢・甕など多種類の土器に普通器台と大型器台が加わる事例が多い。土器祭祀の規模拡大と発展のなかで、松山平野では急速に大型器台の必要性が高まり発展を遂げたと考えられる(松村2018)。

後期終末期～古墳初頭

終末期以降、外面に平行タタキ痕を残す甕と鉢、支脚が急増し、高杯と器台は減少する。甕は、終末期古相(Ⅲ-1)には胴部中位が膨らみ、胴部上半にタタキが残される。終末期新相(Ⅲ-2)には胴部全面にタタキが残されるようになり、下膨れの胴部で底部が尖底気味となる。古墳初頭(Ⅲ-3)になると、畿内をはじめ山陰・吉備地域の外来系土器の流入がみられる。在地甕は外面にタタキを残し胴部下半が膨らみ、底部は尖底から丸底気味となる。

器台は終末期古相(Ⅲ-1)まで普通器台B・C・F型式と大型器台D1・D2型式が一定量認められ、大型器台の盛行が続くが、終末期新相(Ⅲ-2)以降は大型器台の確実な出土事例は減少し衰退傾向となる。このあと西部瀬戸内系大型器台はみられなくなるが、今治市妙見山1号墳で伊予型特殊器台が突如出現しており、古墳時代前期まで伊予の器台文化が継続していると考えられる。

(2) 松山平野の遺跡群

松山平野は四国西部を流れる石手川と重信川によって形成された沖積平野で、東西20km、南北17kmの西部瀬戸内地域最大の平野である。

松山平野の弥生時代遺跡群にかんする先行研究を振り返っておこう。弥生時代遺跡の分布と遺跡群の研究は、1980年代後半から1990年代初頭に道後城北遺跡群の調査を中心に進展した。文京遺跡のほか祝谷六丁場遺跡、松山大学構内遺跡などが所在する道後城北遺跡群のまとまりが明確になり、松山平野内の遺跡分布と立地環境が整理された(谷若1988・梅木1991)。また下條信行氏によって「道後城北遺跡群」をはじめ、「和気遺跡群」・「三津遺跡群」・「久米遺跡群」・「砥部遺跡群」・「伊予遺跡群」の6つが設定された(下條1991)。下條氏が西瀬戸内のなかの松山平野の位置づけを明確にし、弥生時代前期から後期までの松山平野の遺跡群の動向や各遺跡群の評価を示したことは、以降の松山平野内の遺跡および個別遺物研究を大きく進展させることになった。その後1990年代には松山平野内の調査遺跡は急増し個別遺跡の報告書は多く刊行されたが、遺跡群にかんする研究が大きく進展することはなかった。2000年代に入り調査によって急増

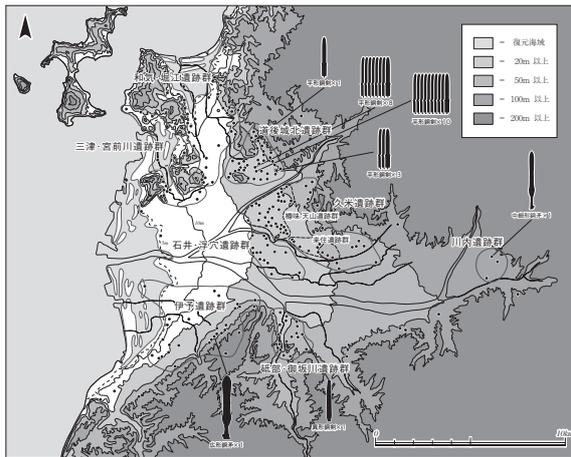


図4 松山平野の弥生時代遺跡群 (柴田2009より引用)

した弥生遺跡220遺跡を対象に、柴田昌兎氏は「道後城北遺跡群」・「和気・堀江遺跡群」・「三津・宮前川遺跡群」・「久米遺跡群」・「石井・浮穴遺跡群」・「砥部・御坂川遺跡群」・「伊予遺跡群」・「河内遺跡群」の8つの遺跡群を設定した(図4・柴田2009)。柴田氏は、下條氏の設定した6つの遺跡群のまともは踏襲しながら遺跡分布を示して範囲を括り、新たに「石井・浮穴遺跡群」・「川内遺跡群」を設定した。ま

た松山平野の弥生集落の分布と動態について、縄文時代晩期後半から古墳時代前期まで8段階に分けて説明し、「道後城北遺跡群」の文京遺跡の出現と解体について評価を行った。

松山平野内の弥生時代遺跡群の動向をみるうえで、下條氏と柴田氏の設定した遺跡群は、調査遺跡が増加した今日まで大きく変更される点は見当たらない。本稿では、下條氏と柴田氏の設定した遺跡群に依拠しながら、名称については柴田氏の8つの遺跡群を引用して論を進めたい。

道後城北遺跡群

松山平野北東部に位置し、石手川によって形成された扇状地の北側の道後・祝谷地区から松山城の城山付近まで広がる。弥生時代中期後半から後期では文京遺跡・松山大学構内遺跡・若草町遺跡などがある。

和気・堀江遺跡群

松山平野北部の海岸部に位置する南北6～7km、東西2km弱の低地で、和気・堀江地区に広がる。弥生時代には、平野北部の海岸線は現在より南側に入り込み、入り江状の地形を呈していたと考えられている(柴田2009)。縄文時代晩期の船ヶ谷遺跡・大淵遺跡、弥生時代後期では座拝坂遺跡がある。

三津・宮前川遺跡群

松山平野北西部の海岸部からわずかに内陸の大峰ヶ台丘陵周辺と宮前川流域に広がる低地で、三津・北斎院地区付近に広がる。弥生時代には、平野北西部の海岸線は現在より東側に入り込み、浜堤列や入り江状の地形が広がり周辺に汽水域が展開していたと考えられている(柴田2009)。古墳時代前期の宮前川北斎院遺跡などがある。

久米遺跡群

松山平野東部に位置し、石手川によって形成された扇状地の南側と小野川の北側から来住台地上まで広範囲に広がる。柴田氏は、「久米遺跡群」のなかを「樽味・天山遺跡群」と「来住遺跡群」に分けている。石手川の南側に樽味・桑原・中村地区、小野川の北岸に天山・福音寺地区、来住台地上に久米地区があり、これらの地区に「樽味・天山遺跡群」、来住台地上東部に「来住遺跡群」が広がる。弥生時代後期から古墳時代には「樽味・天山遺跡群」で樽味四反地遺跡・釜

ノ口遺跡・東本遺跡・福音小学校構内遺跡などの遺跡が密集しており、「来住遺跡群」では来住町遺跡・来住廃寺などが認められる。

石井・浮穴遺跡群

松山平野中央部に位置し、久米遺跡群の南側に流れる小野川と重信川に挟まれた沖積低地に遺跡群が形成されている。北井門・石井・浮穴地区に広がり、弥生時代後期後半には北井門遺跡・西石井遺跡・東石井遺跡などがある。

砥部・御坂川遺跡群

松山平野南東部の砥部町に位置し、重信川の支流である砥部川・御坂川によって形成された河岸段丘上に遺跡群が形成される。弥生時代後期には土壇原北遺跡・土壇原IV遺跡・水満田遺跡などがある。

伊予遺跡群

松山平野南部の伊予市・松前町に位置し、砥部・御坂川遺跡群の西側から重信川下流域左岸に遺跡群が形成される。弥生時代の遺跡は調査事例が少ないが、行道山遺跡・向山遺跡・横田遺跡・下三谷篠田・鶴吉遺跡などがある。

川内遺跡群

松山平野東側奥部の東温市に位置し、重信川上流域に遺跡が散在的に分布している。弥生時代の遺跡は宝泉遺跡・揚り畑遺跡などがある。

(3) 松山平野の弥生時代後期遺跡の変遷

次章で松山平野の大型器台出土遺跡群を取り上げるが、その前に弥生時代後期遺跡の消長と変遷を概観しておく。

弥生時代中期後葉には道後城北遺跡群で文京遺跡を核とした大規模拠点集落が形成されるが、後期前半には文京遺跡が解体し、集落は各所に小規模な単位で拡散するようである(柴田2009)。また久米遺跡群では、中期後葉から後期前半にかけて来住遺跡群が衰退し、樽味・天山遺跡群で集落経営が始まる。

弥生時代後期後半には久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)で遺跡数が増加し、規模の大きな集落が密集して確認されるようになる。福音小学校構内遺跡・釜ノ口遺跡・東本遺跡・樽味高木遺跡など後期中葉から終末期まで継続する集落が多くみられる。このころに平野中央部の石井・浮穴遺跡群でも遺跡数の増加が顕著で、西石井遺跡や北井門遺跡など大規模集落遺跡が出現している。砥部・御坂川遺跡群では後期後半から終末期にかけて土壇原IV遺跡・土壇原北遺跡で土壙墓を主体とした集団墓が形成され、同時期の集落である土壇原XII遺跡も存在する。

弥生時代終末期から古墳時代初頭になると、樽味四反地遺跡では溝によって区画された大型総柱建物が検出されており、久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)において首長居館の出現が認められる。このほか、城北遺跡群の若草町遺跡や石井・浮穴遺跡群の北井門遺跡など後期後半から古墳時代まで継続する集落がある。一方で、三津・宮前川遺跡群の宮前川北斎院遺跡では古墳時代前期の外來系土器を多く含む港湾性集落(柴田2009)が出現している。

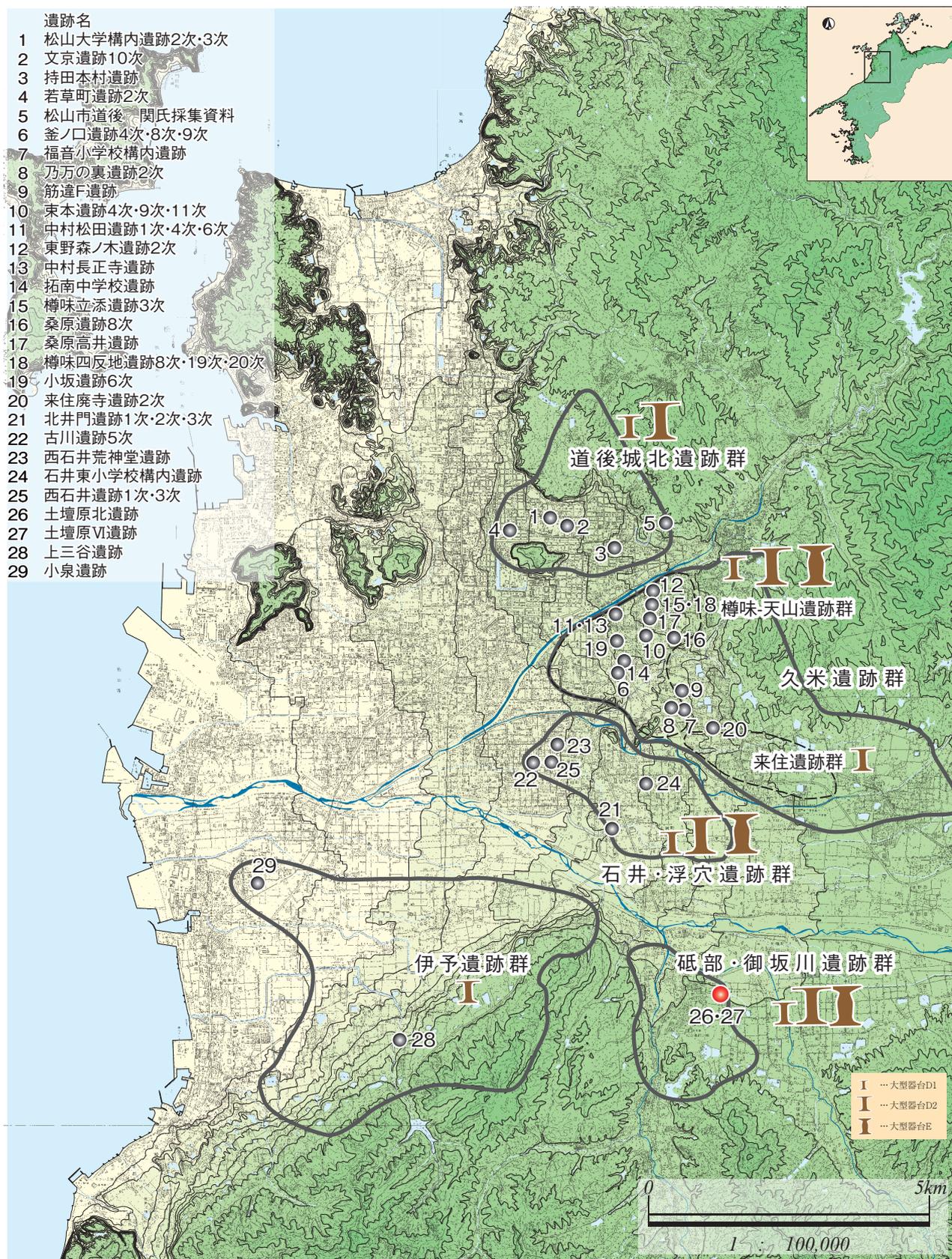


図5 松山平野の大型器台出土遺跡

3 松山平野の遺跡群と大型器台の出現と画期

(1) 大型器台出土の遺跡群

現在までに確認されている松山平野の大型器台出土遺跡は29遺跡、出土点数は138点を数える(図5・表1・2)*¹・²。大型器台出土数を遺跡群ごとにまとめ出土数の偏りや傾向をとらえておきたい。

遺跡群ごとの出土点数に注目すると、和気・堀江遺跡群で0、三津・宮前川遺跡群で0、道後城北遺跡群で5遺跡19点、久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)で14遺跡62点、久米遺跡群(来住遺跡群)で1遺跡1点、石井・浮穴遺跡群で5遺跡48点、砥部・御坂川遺跡群で2遺跡6点、伊予遺跡群で2遺跡2点、川内遺跡群で0を確認している。久米地区や石井・浮穴地区は松山市内でも宅地や道路など都市開発に伴う調査遺跡が集中している地区であるが、それを考慮しても、久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)と石井・浮穴遺跡群の出土点数の多さは際立っている。確認されている弥生時代後期遺跡29のうち24は集落遺跡であるのに対し、砥部・御坂川遺跡群の土壇原VI遺跡・土壇原北遺跡の2遺跡6点は墓域にともなう出土、関氏採集資料と伊予遺跡群の2遺跡は採集資料である。

続いて大型器台の形状の違いに着目し、遺跡群ごとの出土傾向をみておこう。大型器台の形状は胴部が筒状のD1型式、D1型式よりも大型のD2型式、胴部がエンタシス傾向を示すE型式と順に発展する。道後城北遺跡群ではD型式のみ確認され、D2型式よりもD1型式が主体となる。久米遺跡群(来住遺跡群)は1点でD1型式のみ確認される。これに対して、出土遺跡および出土数が多くD2型式とE型式ともに出土しているのは、久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)と石井・浮穴遺跡群の2つである。久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)ではD型式が主体でD2型式の比率が高く、E型式がともなう。石井・浮

穴遺跡群ではD1・D2型式とE型式が同数程度で、E型式の比率が他の遺跡群よりも高いことが注目される。砥部・御坂川遺跡群は墓域にともなう出土で数が6点と限られるが、D2型式とE型式が出土し、久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)と石井・浮穴遺跡群に同調しているようにみえる。伊予遺跡群ではD型式か判断が難しい小片であるが、採集資料が2点ある。

表1 松山平野の大型器台出土遺跡と数量

遺跡群	番号	遺跡名	遺跡の性格	D1・D2 / (D2の数)	E	その他	大型器台の点数	点数計
道後城北遺跡群	1	松山大学構内遺跡②・3次調査	集落	11 / (5)		A3	11	19
	2	文京遺跡10次	集落	1			1	
	3	持田本村遺跡	集落	1			1	
	4	若草町遺跡II(2次調査)	集落	2 / (1)			2	
	5	関氏採集資料		4 / (1)			4	
久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)	6	釜ノ口遺跡4次・8次・9次	集落	7 / (6)		A3	7	62
	7	福音小学校構内遺跡	集落	14 / (6)		A3	14	
	8	乃万の裏遺跡2次	集落	2 / (1)		A3	2	
	9	筋違F遺跡	集落	4 / (2)	2		6	
	10	東本遺跡4・9・11次調査	集落	12 / (8)			12	
	11	中村松田遺跡1・4・6次調査	集落	7 / (1)			7	
	12	東野森ノ木遺跡2次	集落	1 / (1)			1	
	13	中村長正寺遺跡	集落	1			1	
	14	拓南中学校構内遺跡	集落	2	1		3	
	15	樽味立添遺跡3次	集落	1 / (1)			1	
	16	桑原遺跡8次	集落	2 / (2)		妙見山類似	2	
	17	桑原高井遺跡1次	集落	1 / (1)			1	
	18	樽味四反地遺跡8・19・20次	集落	4			4	
	19	小坂遺跡6次調査	集落	1			1	
久米遺跡群(来住遺跡群)	20	来住庵寺2次	集落	1			1	1
石井・浮穴遺跡群	21	北井門遺跡1次・2次・3次調査	集落	5	21		26	48
	22	古川遺跡5次調査	集落	1			1	
	23	西石井荒神堂遺跡	集落	3			3	
	24	石井東小学校構内遺跡	集落	2			2	
	25	西石井遺跡1次・3次	集落	16 / (4)			16	
砥部・御坂川遺跡群	26	土壇原北遺跡	墓域	1	1		2	6
	27	土壇原VI遺跡	墓域	4 / (2)			4	
伊予遺跡群	28	上三谷遺跡(伊予市)		1 / (1)			1	2
	29	小泉遺跡		1			1	
								(D?を含む) (E?を含む)
								138

大型器台出土遺跡が集中し、なおかつ発展した大型器台D2型式とE型式が多数使用されているのが弥生時代後期後半から終末期にかけて比較的規模の大きな集落が継続する久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)と石井・浮穴遺跡群、くわえて墓域が確認されている砥部・御坂川遺跡群である。対して、道後城北遺跡群では大型器台の盛行期といえる後期後葉の遺跡が少なく、出土数は多くない。平野の北部や西部、東奥部に目を向けると、和気・堀江遺跡群や三津・宮前川遺跡群、川内遺跡群では、後期集落はあるが現在までのところ大型器台出土遺跡が確認されていない。

これらのことから、松山平野内の弥生時代後期遺跡群のなかで、大型器台の集中する遺跡群と遺跡が存在していることは明らかで、大型器台の出土数と型式には偏在傾向が認められる。次節では大型器台の出現期と盛行期の遺跡、なかでも器台の展開において特徴的な大型器台をもつ遺跡についてふれたい。

(2) 大型器台の出現期

松山平野での大型器台の出現時期は後期中葉から後期後葉の古段階と考えられ、大型器台は道後城北遺跡群と久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)ではほぼ同時期に確認されている。

①道後城北遺跡群

道後城北遺跡群では、松山大学構内遺跡2次調査でD1型式の口縁部が2点と文京遺跡10次でD1型式の胴部が1点認められるが、いずれも小片で全形のわかるものが出土していない。これまでのところ、道後城北遺跡群では後期中葉にD2型式の出土は確認されていない。後期中葉以降文京遺跡が衰退傾向に入り、後期後葉には大型器台の出土が目立たなくなる。

②久米遺跡群

D1型式の出現は道後城北遺跡群と久米遺跡群のどちらが早いのか明らかではないが、後期中葉から後期後葉の古段階にかけてD1型式からD2型式へ急速に大型器台が発展したとみられるのが久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)である。

久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)では、福音小学校構内遺跡でD2型式が6点、D1またはD2型式が8点、乃万の裏遺跡2次でD2型式が1点、D1またはD2型式が1点、釜ノ口遺跡9次調査でD2型式が3点、D1またはD2型式が1点と大型器台出土遺跡が顕著に増加している。

大型器台D型式とA3型式は、普通器台よりも大型で口径と裾部径だけみると大差なく、加飾性が高い特徴が共通する。A3型式は福音小学校構内遺跡で7点、乃万の裏遺跡2次で2点、釜ノ口遺跡9次調査で3点、天山北遺跡で1点が確認され、大型器台の出現期に集中して多く、大型器台が盛行する後期後葉には減少する。つまり、大型器台D型式の出現時にA3型式がピークを迎えており、A3型式が大型器台D型式に置き換わっていく状況を示している。そして、A3型式がこの時期に松山平野内で久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)に集中することも近辺での大型器台の出現と発展を示唆するものと思われる。いち早く大規模な大型器台を用いた祭祀が盛んに行われ、器台の発展において平野内にも大きな影響を与えていた遺跡群が久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)であるということができる。

福音小学校構内遺跡

弥生時代後期の竪穴建物が7棟検出されているが、出土遺物が少なく時期の詳細は不明である。土器溜まりや溝出土土器からみると後期中葉から後葉を中心とした時期の集落とみられる。竪穴建物SB15の床面直上で分銅形土製品が1点出土しており、分銅形土製品を用いた祭祀が後期の大型器台の祭祀とどう関わるか考えるうえでも注目される。居住域から約100m離れて、弥生時代後期後半の壺棺墓5基が検出されている。

福音小学校構内遺跡は大型器台の出土が最多で、祭祀空間(儀礼空間)が広がっていた可能性が示されている(梅木他編1995)。祭祀にかかわる遺構として、方形周溝が巡る性格不明遺構SX300と18m×16mの大型の土器溜まりが1ヶ所確認されている。土器溜まりから弥生土器が多量に出土し、破片まで含めた土器総数2505点の器種組成は器台110点のほか甕1144点、壺792点、鉢65点、高杯306点、支脚43点、ミニチュア土器等45点であるという(梅木他編1995)。また絵画・記号土器が多数出土している。なかでも長頸壺の上半部に弧文と龍のヒレ状の文様が2個組み合う文様(通称ブタ耳)が特徴的で、同じモチーフのものが約70点あると報告される。土器祭祀のなかでこの絵画・記号をもつ長頸壺と大小の器台はセットで用いられた可能性が高い。このほか中部瀬戸内系の壺や高杯、西南四国型甕など外来系土器が複数確認され、外来系土器も祭祀の場に持ち込まれたものと推定される。

土器溜まりからは器台A3・B・C・D1・D2型式が出土している。器台110点のうち大型器台D1・D2型式は14点認められ、D2型式については平野内で最も早い時期に出現している。一遺跡からこれほど多くの器台が出土している遺跡は他に見当たらず、現状では福音小学校構内遺跡近辺で大型器台D1型式からD2型式へと発展した可能性が高いと考えている。大型器台口縁部の文様は三角鋸歯文や沈線文が多く、半截竹管文も多用している。D2型式の胴部文様には縦列の円形透かしと多条の沈線文の組み合わせが徹底しており、この文様は後期後葉以降に平野内にも広がっている。一方、平野内では他に例がない三角鋸歯文や綾杉文、半截竹管文を胴部文様として用いるものが1点存在し(図7-1)、これを福音寺小学校構内遺跡の独特な文様としておきたい。

乃万ノ裏遺跡

福音小学校構内遺跡南側に隣接する集落遺跡で、SD10は福音小学校構内遺跡SD3と同一遺構となる。SD10と性格不明遺構SX5からは福音小学校構内遺跡と帰属時期が同じ弥生時代後期中葉～後葉の土器が多量に出土し、器台や線刻をもつ壺、多条沈線で加飾された直口壺が出土する。頸部に多条沈線、肩部にノの字の刺突文をもつ吉備系の長頸壺は、1点(報告番号241)が乳白色の色調を呈した搬入土器で、1点(報告番号242)は松山平野で製作された模倣土器とされる。

器台はA3型式とD1・D2型式が共伴し、福音小学校構内遺跡と同じ様相を示す。A3型式の器台は口縁部が下垂し、文様は三角鋸歯文が使用されるなどD2型式と共通する要素が多い。

釜ノ口遺跡9次調査

釜ノ口遺跡一帯は弥生時代後期の集落が継続的に営まれている。釜ノ口遺跡9次調査では弥生時代後期後葉古段階の溝SD3とSD6から多量の土器や木器が出土している。豊後地域からの搬入品とされる壺がSD3とSD6から1点ずつ、SD3から西南四国型甕形土器11点、壺4点が出土してい

る。このほか線刻土器が36点と多い。

大型器台はD2型式が3点、D1またはD2型式が1点で、これらと器台A3型式が共伴し、大型器台D2型式の胴部には三角鋸歯文が使用され福音小学校構内遺跡と共通する。

(3) 大型器台の盛行期

松山平野での大型器台の盛行期は後期後葉～終末期古相と考えられ、この時期には、道後城北遺跡群、久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)、石井・浮穴遺跡群、砥部・御坂川遺跡群、伊予遺跡群など松山平野の広範囲で出土がみられるようになる。大型器台のD型式とE型式がともにまとまった数量で出土しているのは、久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)と石井・浮穴遺跡群、砥部・御坂川遺跡群の3つで、これらの遺跡群を中心にして大型器台を用いた祭祀が盛行し、平野外の西部瀬戸内地域にも影響を与えていたと考えられる。

①道後城北遺跡群

道後城北遺跡群では後期後葉の遺跡は少なく、終末期古相には松山大学構内遺跡3次調査でD1型式が2点、D2型式が2点、持田本村遺跡でD型式が1点のほか、関氏採集資料でD1型式が3点、D2型式が1点認められる。詳細は不明であるが関氏採集資料4点は墓域にとまなう可能性があると報告されている(名本2003)。

②久米遺跡群

久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)では、筋違F遺跡でD1型式が1点、D2型式が2点、E型式が2点、東本遺跡4次・9次・11次調査でD1型式が1点、D2型式が6点、DまたはE型式が5点、釜ノ口遺跡4次調査でD2型式が3点、中村松田遺跡1次・4次・6次調査でD2型式が1点、D型式が6点、桑原遺跡8次でD2型式が2点、桑原高井遺跡1次でD2型式が1点、樽味立添遺跡3次でD2型式が1点、東野森ノ木遺跡2次でD2型式が1点、拓南中学校構内遺跡でD型式が1点、E型式が1点、DまたはE型式が1点、中村長正寺遺跡でDまたはE型式が1点を数える。

筋違F遺跡

筋違遺跡A～I遺跡は福音小学校構内遺跡の西側に隣接し、弥生時代後期後半期の集落が連続している。筋違F遺跡では円形堅穴建物SB5の上面に土器溜まりが検出され、甕、鉢、複合口縁壺、直口壺や長頸壺、装飾高杯、加飾の著しい細頸の複合口縁壺、線刻や記号のみられる壺胴部が出土している。

器台出土量は多く13点報告されており、普通器台8点と大型器台が5点(D1型式が1点、D2型式が2点、E型式が2点)ある。E型式は胴部がエンタシス状かつ細身で、縦列に並ぶ円形透かしが施され、口縁部文様は櫛描波状文とS字状浮文が組み合う(図7-4)。E型式の大型器台のなかでも筋違F遺跡は細身の胴部で独特の形態をもち、口縁部の文様構成も櫛描波状文とS字状浮文は後期後葉以前の大型器台では使用されていない文様であり特徴的である。E形式の出現地までは特定できないが、筋違F遺跡は平野内でも早い後期後葉にE型式が出現している数少ない遺跡である。

東本遺跡9次調査

東本遺跡1～12次調査は、弥生時代後期後葉から終末期にかけて大型・中型・小型の堅穴建物

が30棟以上密集する大規模集落の一つである。特に東本遺跡4・9・10次調査付近では大型円形竪穴建物が多くまとまって検出され、4次調査の大型円形竪穴建物SB302から破鏡が出土するなど、集落の中心部がこの付近に所在すると考えられている(栗田ほか編2011)。また4次調査では竪穴建物の内部構造として、東部瀬戸内地域で特徴的な「10(イチマル)」中央土坑が存在することが指摘されている(柴田2009)。5次調査の方形竪穴建物では三角状鉄片が出土し、鍛冶関連遺構の可能性も報告されている。

9次調査では、円形竪穴建物SB101の上面で土器溜まりが検出され、甕、鉢、複合口縁壺、直口壺や長頸壺、装飾高杯、加飾の著しい細頸壺、線刻や記号のみられる壺胴部が出土している。器台は多量で20点報告され、そのうち大型器台は10点(D2型式が6点、DまたはE型式が4点)である。大型器台口縁部文様は半截竹管文を多用し、櫛描波状文と円形や棒状浮文を多く用いる。胴部円形透かしは多段で縦列と斜め列状に施すものがあり、筋違F遺跡のE型式に類似する。

釜ノ口遺跡4次調査

釜ノ口遺跡は東本遺跡の南西約500mと近接した位置にある。1～11次調査があり、弥生時代後期の竪穴建物は1・2・6～8・10次調査および隣接する拓南中学校遺跡で検出されている。8次調査では、竪穴建物SB2からガラス小玉が多数出土し、溝SD3から破鏡の出土もある。釜ノ口遺跡一帯には集落が継続的に営まれ、弥生時代後期の大型集落の一つといえる。

4次調査では大型器台D2型式が3点出土しており、そのうち1点は口径51.2cm、器高64.5cm、裾部径41.4cmを測りD2型式最大法量をもつ。大型器台口縁部文様の特徴は沈線文の上に円形浮文が付され、胴部には多段で縦列の円形透かしと多条沈線文が整然と並ぶ。福音小学校構内遺跡にもみられる形態と文様構成であるが、典型的なD2型式として釜ノ口遺跡4次(図7-3)を挙げておきたい。

③石井・浮穴遺跡群

北井門遺跡2次・3次調査で、E型式が破片を合わせ21点と一遺跡で集中的に出土している。このほか西石井荒神堂遺跡でD1型式が3点、石井東小学校構内遺跡でD1型式が2点、西石井遺跡1次・3次調査でD1型式とD型式とみられる破片が8点、D2型式が4点確認される。

北井門遺跡2次・3次調査

北井門遺跡1～3次調査では弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて竪穴建物42棟が集中して検出されており、大規模な集落の形成が認められる。竪穴建物の分布は北井門遺跡の西側と東側に分かれ、間に150mほど遺構の存在しない空白地帯が広がる。西側の2・3次調査区では弥生時代後期後葉から終末期の竪穴建物が12棟検出されているが、竪穴建物の分布はまばらで広場のような空白地も広がっている。土製勾玉・管玉、装飾のある土製紡錘車や椅子形土製品、大型器台の破片が出土する竪穴建物があり、竪穴建物付近のSR-1から破鏡の出土もみられるなど、西側では祭祀に関わる遺物の出土が集中している。東側の1次調査区では30棟程の竪穴建物が密集しており、終末期の鍛冶炉や古墳時代前期の前方後方墳も検出されている。東側では後期後葉の大型器台の出土は報告されていない。

西側の2次調査区で自然流路SR-1が東西約50mの規模で検出された。弥生時代後期後葉の土器

を大量に廃棄した状況が認められ、大型器台のほか匙状土製品や環状木製品など祭祀具と考えられる遺物もみられる。SR-1周辺で大規模な祭祀が行われた可能性が指摘されている。また大量に残された土器の出土状況は良好で、遺物の分布状況から土器の廃棄単位が想定されている。流路方向に5～8mごとを1単位として1～5群の土器のまとまりがあり、各群の器種に共通性が認められ、加飾のある壺、甕、鉢、大型器台が3～4個体ともなうと分析されている(多田2012)。

大型器台は2次・3次調査あわせて21点と多量に出土し、全てが同形態のE型式とみられる。大型器台口縁部文様の特徴は櫛描波状文とS字状浮文で、胴部が細身となる特徴は筋違F遺跡に類似するが、胴部の円形透かしを多段斜め列状に施す独特の特徴が付加されている(図7-5)。同じ法量で同形態、同じ文様をもつ大型器台が10点以上確認されており、一定の規格が存在したとも考えられ同時期か短期間にまとめて製作された可能性を指摘しておきたい。

④砥部・御坂川遺跡群

砥部・御坂川遺跡群では、土壇原VI遺跡でE型式が2点、DもしくはE型式とみられる破片が2点、土壇原北遺跡でD1型式が1点、E型式が1点出土している。

土壇原VI遺跡

松山平野では壺棺墓を除くと、弥生時代後期の墓の調査報告事例がほとんどない。土壇原VI遺跡は数少ない墓の調査であり、台地上に形成された墳丘をもたない土壇墓群で約60基が密集して検出された。36号土壇墓は土壇墓群のなかで唯一副葬品を有し、床面から方格乳文鏡1点、管玉5点、鉄製刀子1点が出土した。配置からみても周囲の土壇墓群とは溝で隔てられ、他の土壇墓よりも優位性が認められる。土壇墓群の間に複数個所で供献土器群が検出されている(松村2022)。

図7-2は口径43.1cm、裾部径38cm、器高60.7cm、胴部径16.5～18.6cmに復元される大型器台D2型式である。口縁部と裾部は大きく外反して開き、下垂した口縁端部には5本1単位の櫛描波状文と刻目を入れた2個1単位の棒状浮文を付す。胴部は筒状であるが上部でわずかに膨らみをもつ。胴部には縦列に8段の大型円形透かしを施し、3段目と4段目の間に5本1単位とした同一工具で描かれた櫛描波状文と沈線文が施される。胴部に櫛描波状文を加える特徴が松山平野内では少なく注目される。

土壇原北遺跡

土壇原北遺跡は土壇原VI遺跡に隣接する。開墾中の発見で、完形の大型器台のほか普通器台、直口壺・細頸壺、装飾高杯、高杯、脚台付きの鉢、小形甕がまとまって出土し、土壇墓への供献土器群として報告された(長井1977)。

図7-6は完形出土の大型器台E型式で口径46.3cm、裾部径42.4cm、器高74.0cm、胴部径17.8～22.6cmを測る。松山平野内で出土した大型器台の中で最大法量をもつ。太いエンタシス状を呈す胴部から屈曲して口縁部は大きく外反して開き、口縁端部は上下に拡張しやや下垂気味に形成されている。口縁部には小型の半截竹管文を3段列で施文し、刻目を入れた棒状浮文を付している。胴部には縦列の大型円形透かしと多条沈線文を7段にわたり施す。外面に赤色顔料が塗られ、法量・形態・文様ともに松山平野の大型器台のなかでも特別なものと位置づけることができ、際立っている。

(4) 大型器台の衰退期

大型器台の衰退期は終末期新相～古墳初頭と捉えられ、この時期には道後城北遺跡群と、石井・浮穴遺跡群の遺跡でわずかに出土がみられる。道後城北遺跡群では若草町遺跡2次調査でD1またはD2型式が2点、石井・浮穴遺跡群では北井門遺跡でD1型式とD型式が5点、古川遺跡5次調査でDまたはE型式が1点認められる。

久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)では樽味四反地遺跡でD型式が4点と、桑原遺跡で妙見山1号墳の伊予型特殊器台に類似した器台片の出土がある。

①久米遺跡群

樽味四反地遺跡

樽味四反地遺跡は、東本遺跡・釜ノ口遺跡の集落から北東に500mから1kmの位置にある。古墳時代初頭の大型総柱建物が2棟並列して検出され、首長居館の出現と評価されている。久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)の成熟した地域共同体としての突出性(柴田2009)を示している。

大型器台はD1またはD2型式の口縁部小片が4点あり、そのうち1点は8次調査大型総柱建物の柱穴23からの出土である。小片であることから大型総柱建物の柱構築時の埋土に含まれた遺物とみられる。つまり大型総柱建物の構築以前で、首長居館の出現直前まで大型器台が使用されていたと考えたい。

桑原遺跡

近年発掘調査された桑原遺跡8次調査では、竪穴建物SB2から弥生後期土器の大型器台D2と伊予型特殊器台に類似した器台裾部が確認されており(新原2023)、ここで紹介しておきたい(図6)。

SB2は円形(A)と隅丸方形(B)の2棟の竪穴建物の重複があり、(A)から弥生後期後半の周防系複合口縁口縁壺(図6-1)と大型器台D2型式が2点(図6-4・5)、(B)から古墳時代初頭の二重口縁壺(図6-2)が出土しているという。

伊予型特殊器台は口縁部と裾部が大きく開く弥生器台の形態を踏襲しており、古墳時代前期まで伊予の器台文化が継続していると考えられてきたが、これまで西部瀬戸内系大型器台と伊予型特殊器台との間に関係を示す資料がなかった。

伊予型特殊器台に類似した器台裾部(図6-3)は竪穴建物(A・B)どちらにともなうものか明らかではないが、弥生後期後半から古墳初頭までの時期におさまるならば、西部瀬戸内系大型器台と伊予型特殊器台との間をつなぐ集落出土の新出資料となるだろう*3。

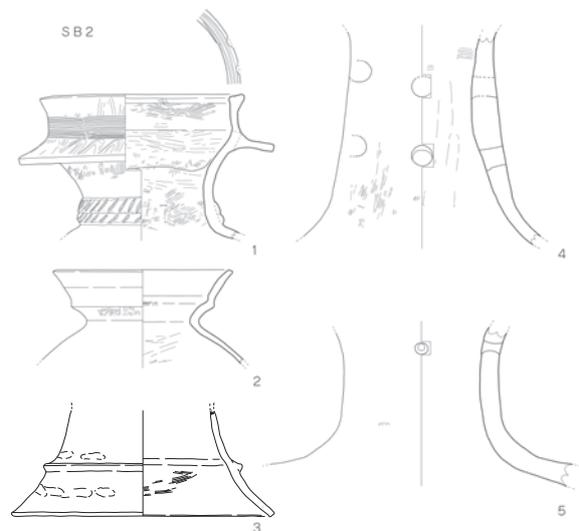


図6 桑原遺跡8次調査SB2出土土器 (S=1/8)

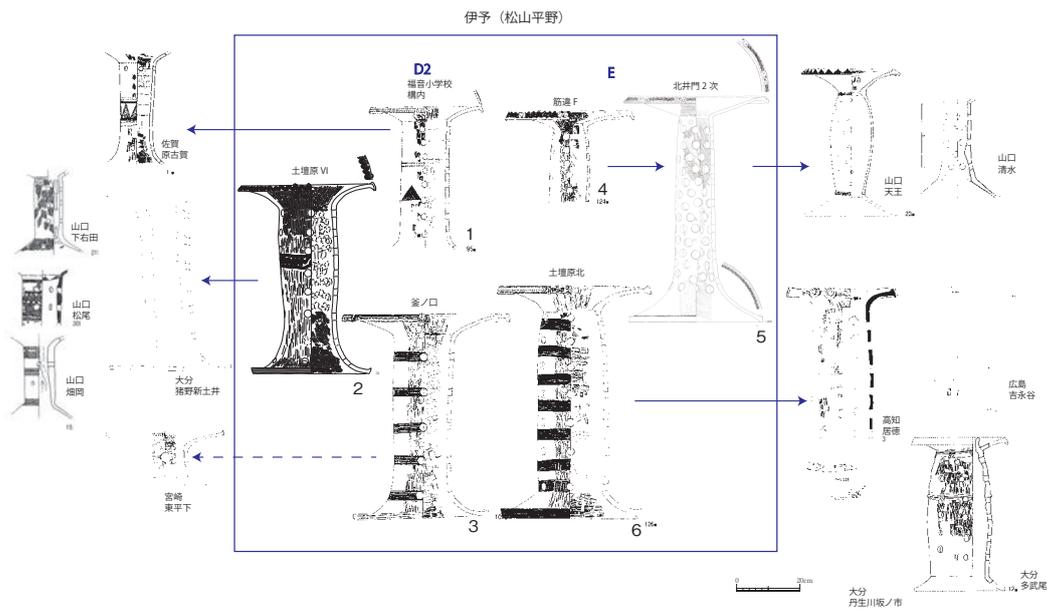


図7 西部瀬戸内地域に広がる伊予型の大型器台 (S=1/20)

4 大型器台出土遺跡と伊予に特徴的な大型器台

これまでみてきた松山平野の大型器台出土遺跡と弥生時代後期の遺跡群の特徴についてまとめておきたい。

後期中葉以降の大型器台出現から発展には久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)が関わり、後期後葉から終末期古段階にかけて久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)とともに石井・浮穴遺跡群や砥部・御坂川遺跡群が大型器台の展開に影響を与えた可能性を示した。これらの遺跡群は平野内の他遺跡群と比較しても大規模集落が集中しており、外来系土器や破鏡が集まる拠点的な集落も含まれている。また絵画・記号文をもつ土器、加飾の著しい土器、さらには祭祀関連遺物が多いことも共通している。絵画・記号文をもつ土器、加飾の著しい土器は祭祀に関わる性質の遺物で、大型器台とともに特定の場所や遺跡に集中することは、これらが使用される場面が似ており、松山平野では弥生時代後期中頃以降に大規模集落が出現していくなかで祭祀が集中して行われたといえる。使用される場面は特定できないが、福音寺小学校構内遺跡や北井門遺跡2次など大型器台がまとめて出土する集落内部には、祭祀に関連する空間(広場)や性格不明遺構が検出されていることも重要であろう。

また、発展過程において伊予地方で特徴的な大型器台を創出している遺跡を認めることができた。その大型器台の特徴は、松山平野内の他の遺跡にも共有され影響を与えている。例えば大型器台D2型式では、釜ノ口遺跡など胴部に多段で縦列の円形透かしと多条沈線文が整然と並ぶもの(図7-3)が挙げられるが、松山平野の他遺跡でも縦列の円形透かしと多条沈線文の文様は多く共有されている。大型器台E型式では、筋違F遺跡で胴部がエンタシス状かつ細身で、縦列に並ぶ円形透かしが施されており(図7-4)、北井門遺跡2次では筋違F遺跡に類似し、胴部の円形透かしを多段斜め列状に施すもの(図7-5)を創出している。

さらに伊予地方で特徴的な大型器台をモデルとして、西部瀬戸内地域にも胴部の形態や文様が

類似する大型器台が広がっていることを指摘しておきたい。大型器台D2型式では、福音寺小学校構内遺跡の三角鋸歯文と半截竹管文を胴部文様として用いるもの(図7-1)があるが、佐賀県原古賀遺跡で全く同じ文様構成の器台が知られている。土壇原VI遺跡では胴部に沈線文に加えて櫛描波状文が施されるもの(図7-2)があり、これと同様の文様が山口県松尾遺跡などで認められる。大型器台E型式では、山口県天王遺跡や清水遺跡の大型器台が筋違F遺跡(図7-4)や北井門遺跡2次(図7-5)の影響を受けたものといえるであろう。そして土壇原北遺跡では太いエンタシス状を呈す胴部をもつもの(図7-6)があり、高知県居徳遺跡や大分県多武尾遺跡などの大型器台に影響を与えている。

おわりに

本稿では松山平野の大型器台出土遺跡と弥生時代後期の遺跡群の特徴について触れ、発展過程において伊予地方で特徴的な大型器台を創出している遺跡を取り上げた。後期中葉以降の大型器台出現から発展には久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)内の遺跡が最も大きな影響力をもち、福音寺小学校構内遺跡と佐賀県原古賀遺跡など松山平野外の遺跡で文様を共有する器台が存在している。後期後葉から終末期には久米遺跡群(樽味 - 天山遺跡群)にくわえ石井・浮穴遺跡群、砥部・御坂川遺跡群からも西部瀬戸内地域に向け伊予型の大型器台の影響が広がっていると考えた。

さいごに、松山平野内の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡・遺跡群の発展段階のなかで、大型器台や大型器台を用いた祭祀が首長墓や首長居館出現とどのように関わっていくのか問題が残されているが、筆者の力量不足で検討が及ばなかった。また西部瀬戸内地域の大型器台を出土する遺跡と松山平野内の遺跡との関連についても直接的なものであるのかさらに追求が必要であり、これについても今後の課題としたい。

註

- *1 2024年3月時点の筆者による確認数であり、これ以外に遺漏もあると思われる。大型器台の出土点数は報告書等掲載遺物をカウントした。若草町遺跡2次調査と北井門遺跡1次調査は未報告資料で確認できたものがあり、筆者実測の上カウントしたものを含んでいる。
- *2 表1には表2に記載したD・D1の可能性のあるものはDに含み、同じくEの可能性のあるものはEに含めた。口縁部だけの小片や胴部でも上下の屈曲部まで残存しないものはDまたはE型式としており、これについてはDのカウントに含めた。
- *3 令和4年度の松山市埋蔵文化財年報に概要報告が掲載されている。器台については実見して確認したが、SB2の位置づけと時期の詳細については正式報告を待ちたいと思う。

参考文献

- 宇垣匡雅2000「鋸歯文をもつ土器—吉備の農耕儀礼と葬送儀礼—」『考古学研究』第47巻第2号 105～124頁
- 梅木謙一1991「松山平野の弥生後期土器—編年試案—」『松山大学構内遺跡』松山市文化財調査報告書第20集 107～118頁 松山市教育委員会
- 梅木謙一編1991『松山市道後城北遺跡群 松山大学構内遺跡—第2次調査—』松山市文化財調査報告書第20集松

山市教育委員会

- 梅木謙一他編1995『福音小学校構内遺跡—弥生時代編—』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一1996「伊予」『弥生後期の瀬戸内海—土器・青銅器・鉄器から見た領域と交通—』古代学協会四国支部 発足10周年記念大会資料 古代学協会四国支部 58～61頁
- 梅木謙一2000「3伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社 211～282頁
- 梅木謙一2001「伊予中部の土器」『庄内式土器研究』XXIV 庄内式土器研究会 113～132頁
- 梅木謙一2015「愛媛県中予における複合口縁壺」『平成27年度瀬戸内海考古学研究会第5回公開大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会 117～138頁
- 栗田茂敏ほか編2011『束本遺跡—9次・10次調査—、小坂遺跡—1次～6次調査—、中村松田遺跡—5次・6次調査—』財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター 松山市文化財調査報告書第153集
- 下條信行1991「松山平野と道後城北の弥生文化—西瀬戸内の体外交流—」『松山市道後城北遺跡群 松山大学構内遺跡—第2次調査—』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興団埋蔵文化財センター 137～150頁
- 下條信行・松村さを里編2008「資料4 西部瀬戸内系大型器台集成」『妙見山1号墳(図版・資料編)』愛媛県今治市教育委員会・愛媛大学考古学研究室 39～58頁
- 柴田昌児2009「松山平野における弥生社会の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集 197～231頁
- 新原佑典2023「桑原遺跡8次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報』35 令和4年度 3～6頁
- 多田仁ほか編2012『北井門遺跡2次調査』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査報告書第174集
- 谷若倫郎1988「道後城北遺跡の展開」古代学協会四国支部シンポジウム資料
- 長井数秋 1977「愛媛県土壇原北遺跡出土の弥生式土器」『ふたな 創刊号』伊予考古学会 1～11頁
- 名本二六雄2003「道後平野における弥生末期の墓制」『愛媛考古学15』愛媛考古学協会 42～69頁
- 松村さを里2008a「西部瀬戸内における弥生時代器台の展開について-伊予地方を中心に-」『妙見山1号墳(報告・論考編)』愛媛県今治市教育委員会・愛媛大学考古学研究室 335～355頁
- 松村さを里2008b「伊予地方における弥生時代器台の分布と変遷」『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念論文集 愛媛大学考古学研究室 125～140頁
- 松村さを里2018「四国の土器祭祀」『平成30年度瀬戸内海考古学研究会第8回公開大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会 35～48頁
- 松村さを里2022「伊予の弥生墓に供えられた土器—土壇原VI遺跡の大型器台と供献土器—」『紀要愛媛』第18号 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 11～38頁
- 松村さを里・坪根伸也・下條信行 2020「講演会記録 鼎談！大型器台から探る弥生時代の豊予交流」愛媛県歴史文化博物館研究紀要第25号

挿図出典

- 図1：梅木編年2001・2015の土器を抽出して筆者作成。図2：松村2008aに加筆して筆者作成。
- 図3：筆者作成。図4：柴田2009の図1を引用し、遺跡番号を省いた。
- 図5：国土地理院2万5千地図をもとに(公財)愛媛県埋蔵文化財センターが作成した愛媛県地図を利用。筆者作成。
- 図6：新原2023より引用。図6-3のみ筆者実測。
- 図7：筆者作成。

(2024年4月4日)

表2 松山平野の大型器台一覧

	番号	(下條松村2008)報告書等掲載番号	遺跡名	出土	型式	大型器台	大型器台数	法量				文様		備考	時期	所蔵・保管者	文献					
								口径	器高	胴部径	底径	口縁部文様	胴部沈線文()内条数・その他文様									
道後城北遺跡群	1	3	177頁1150	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	SR1上層	A3			31.4	25		30.8	退化凹線(沈線)文3条	多条沈線文、円形透3段	赤色顔料	後期前葉	松山市	松山市報告49集 1995				
	2	2	33頁92	松山大学構内遺跡Ⅳ(6次調査)	SR1①層	A3			—	—		30.4	—	多条沈線文・羽状文、円形透1段		後期前葉	松山市	松山市報告115集 2007				
	3	73	49頁152	松山大学構内遺跡Ⅱ(2次調査)	SB7	D1	○	1	31.4	—		—	なし	—		後期中葉	松山市	松山市報告20集 1991				
	4	74	49頁153	松山大学構内遺跡Ⅱ(2次調査)	SB7	D1	○	1	32.6	—		—	退化凹線(沈線)文2条	—		後期中葉	松山市	松山市報告20集 1991				
	5	72		文京遺跡10次	SX7	D1	○	1	—	—		—	—	円形透3段以上		後期前半	愛媛大学	愛媛大学報告Ⅲ 1991				
	6	—	46頁206	持田本村遺跡	SD202	D?	○	1	(34.7)				—	半截竹管文2段・円形浮文(上に竹管文)	—		後期後葉～終末	松山市	松山市報告210集 2023			
	7	82	217頁1539	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	SR1南半部上層	D1	○	1	—	—		—	—	円形透2段以上		後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告49集 1995				
	8	94	116頁591	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	SX1上部	D1	○	1	30.2	—		—	—	沈線文6条	—		後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告49集 1995			
	9	—	62頁262	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	第Ⅳ層(弥生)	D1	○	1	(25.6)	—		—	—	円形浮文	—		後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告60集 1997			
	10	—	155頁941	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	SR2南(②③区P11)	D1	○	1	(29.2)	—		—	—	半截竹管文2段・竹管文	—		後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告60集 1997			
	11	114	114頁572	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	SX1下部	D2	○	1	—	—		—	—	—	沈線文2段(11・16)以上、円形透4段以上		後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告49集 1995			
	12	119	129頁690	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	SP731	D2	○	1	39.8	—		—	—	沈線文6条	—		後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告49集 1995			
	13	—	62頁263	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	第Ⅳ層(弥生)	D2	○	1	—	—	(16)	—	—	—	櫛歯直線文5条、円形透2段以上		後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告60集 1997			
	14	—	172頁1115	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	埋土2	D2	○	1	(34.7)	—		—	—	—	—	後期末葉(終末期古相)か	松山市	松山市報告60集 1997				
	15	—	214頁1501	松山大学構内遺跡Ⅱ(3次調査)	SR1上層	D2	○	1	(44.4)	—		—	—	沈線文3条、円形浮文	—	赤色顔料(ベンガラ)	後期末葉(終末期古相)か	松山市	松山市報告60集 1997			
	16	121		若草町遺跡Ⅱ(2次調査)	SDⅡ	D2	○	1	—	—		—	—	—	沈線文(4)・斜沈線文(2)、円形透1段以上		後期終末～古墳初頭	愛媛県	未報告			
	17	122		若草町遺跡Ⅱ(2次調査)	SDⅡ	D1/D2	○	1	—	—		—	—	—	沈線文(7)・三角綾杉文		後期終末～古墳初頭	愛媛県	未報告			
	18	129	33頁7	関氏採集資料		D1	○	1	45.6	—		—	—	沈線文	—		後期後葉～終末	松山市	松山市報告85集 2002			
	19	130	33頁8	関氏採集資料		D1	○	1	43.6	40.8		34.5	波状文・浮文・半截竹管文	円形透9段			後期後葉～終末	松山市	松山市報告85集 2002			
	20	131	33頁9	関氏採集資料		D1	○	1	—	—		36	—	—	円形透5段以上			後期後葉～終末	松山市	松山市報告85集 2002		
	21	132	33頁12	関氏採集資料		D2	○	1	—	—		—	—	—	沈線文3段(3・9・9)以上、円形透3段以上			後期後葉～終末	松山市	松山市報告85集 2002		
久米遺跡群(樽味・天山遺跡群)	22	1		釜ノ口遺跡8次	SB3	A3			—	—		—	—	—	—	裾部に凹線文3条		後期前葉	松山市	松山市報告60集 1997		
	23	4		天山北遺跡	ビット状遺構	A3			28.5	19.8		26	退化凹線・竹管文・内面波状文	沈線文2段(6・3)・刺突文、円形透2段			後期中葉	松山市	松山市報告2集 1973			
	24	—	26頁68	釜ノ口遺跡9次	SD3(2層)	A3?			35.2	—		—	—	沈線文	—			後期後葉(古)	松山市	松山市報告174集 2014		
	25	—	26頁69	釜ノ口遺跡9次	SD3(2層)	A3			—	—	22	—	—	—	沈線文2段(3・3)、円形透(径2.0cm)2段			後期後葉(古)	松山市	松山市報告174集 2014		
	26	—	44頁189	釜ノ口遺跡9次	SD3(2層)	A3			29.4	18.4	11.2	25.5	竹管文(2個一対・8ヶ所)	円形透(径1.5cm)2段、裾部に竹管文(2個一対・8ヶ所)				後期後葉(古)	松山市	松山市報告174集 2014		
	27	—	26頁70	釜ノ口遺跡9次	SD3(2層)	D2	○	1	—	—	18.8	—	—	—	円形透(径1.6cm)2段以上			後期後葉(古)	松山市	松山市報告174集 2014		
	28	—	44頁188	釜ノ口遺跡9次	SD3(2層)	D1/D2	○	1	31.2	—		—	—	—	沈線文2条	—			後期後葉(古)	松山市	松山市報告174集 2014	
	29	—	44頁190	釜ノ口遺跡9次	SD3(2層)	D2	○	1	—	—	16.8	—	—	—	—	鋸歯文(三角綾杉文)、円形透(径1.6cm)1段以上			後期後葉(古)	松山市	松山市報告174集 2014	
	30	—	44頁191	釜ノ口遺跡9次	SD3(2層)	D2	○	1	—	—		28.4	—	—	—	円形透1段以上			後期後葉(古)	松山市	松山市報告174集 2014	
	31	6	104頁368	福音小学校構内遺跡	土器溜り	A3			30.3	24.8		25.3	なし	—	円形透3段				後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
	32	7	104頁369	福音小学校構内遺跡	土器溜り	A3			32.4	24.3		26.4	斜格子文	—	沈線文1段(3)、円形透2段				後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
	33	8	105頁374	福音小学校構内遺跡	土器溜り	A3			—	—		—	—	—	円形透2段				後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
	34	9	102頁367	福音小学校構内遺跡	土器溜り	A3			37.3	21.7		39.5	なし	—	円形透2段				後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
	35	—	104頁370	福音小学校構内遺跡	土器溜り	A3?			(27.8)	—		—	—	—	—	2ヶ一組の円形浮文	—			後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995
	36	—	104頁371	福音小学校構内遺跡	土器溜り	A3?			(28.6)	—		—	—	—	—	鋸歯文	—			後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995
	37	—	104頁373	福音小学校構内遺跡	土器溜り	A3?			(28.2)	—		—	—	—	—	横直線文3条、上面に三角文	—			後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995
	38	95	100頁355	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D2	○	1	35	—	16.0	—	—	半截竹管文2段	半截竹管文2段・鋸歯文(三角綾杉文)、円形透8段				後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
	39	96	102頁363	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D2	○	1	—	—	14.4	—	—	—	—	沈線文3段(7・10・11)、円形透5段以上				後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995
	40	97	102頁366	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D2	○	1	—	—	20.8	—	—	—	—	沈線文2段・横向綾杉文、円形透1段以上				後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995
	41	98	102頁365	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D2	○	1	—	—	14.4	—	—	—	—	沈線文1段(3)以上・綾杉文				後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995
	42	100	101頁357	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D1/D2	○	1	38	—		—	—	—	—	沈線文3条・棒状浮文	—			後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995

43	99	102頁 364	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D2	○	1	—	—	18.0	—	—	沈線文2段(8・12)以上、円形透2段以上	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
44	101	101頁 356	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D1/D2	○	1	37.2	—	—	—	—	沈線文3条	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
45	102	101頁 358	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D1/D2	○	1	36	—	—	—	—	沈線文2条・半載竹管文	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
46	103	101頁 359	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D1/D2	○	1	33.4	—	—	—	—	半載竹管文	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
47	104	101頁 360	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D1/D2	○	1	50.2	—	—	—	—	三角充填鋸歯文・半載竹管文	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
48	105	104頁 372	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D1/D2	○	1	36	—	—	—	—	三角充填鋸歯文・波状文	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
49	106	102頁 354	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D2	○	1	—	—	—	39.4	—	円形透1段以上	報告では受部	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
50	—	101頁 361	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D1/D2	○	1	(37.0)	—	—	—	—	—	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
51	—	101頁 362	福音小学校構内遺跡	土器溜り	D1/D2	○	1	—	—	—	36.5	—	裾端面に横直線文2条+縦直線6条1組	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告50集 1995	
52	5	47頁276	乃万の裏遺跡2次	SX5	A3			—	—	—	28	—	裾部に沈線文5条	—	後期後葉(古)	松山市	松山市報告72集 1999	
53	10	47頁271	乃万の裏遺跡2次	SX5	A3			46.5	23.3	—	40	—	三角充填鋸歯文	円形透2段	後期後葉(古)	松山市	松山市報告72集 1999	
54	112	69頁395	乃万の裏遺跡2次	V下層	D2	○	1	—	—	—	—	—	沈線文2段(4・6)以上、円形透2段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告72集 1999	
55	—	53頁294	乃万の裏遺跡2次	SR1	D1/D2?	○	1	(37.0)	—	—	—	—	横直線文3条、上に円形浮文	—	後期後葉	松山市	松山市報告72集 1999	
56	75	127頁 204	筋違F遺跡	SB5	D1	○	1	—	—	—	—	—	沈線文1段(4)、円形透2段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告52集 1996	
57	107	127頁 207	筋違F遺跡	SB5	D2	○	1	—	—	—	35.1	—	円形透1段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告52集 1996	
58	108	未掲載	筋違F遺跡	SB5	D2	○	1	—	—	—	—	—	円形透3段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告52集 1996	
59	124	127頁 202	筋違F遺跡	SB5	E	○	1	38.8	—	—	—	—	櫛描波状文・S字状浮文	円形透6段以上	後期後葉	松山市	松山市報告52集 1996	
60	125	127頁 203	筋違F遺跡	SB5	E	○	1	—	—	—	—	—	円形透5段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告52集 1996	
61	—	151頁 333	筋違F遺跡	SK12	D?	○	1	—	—	—	(42.0)	—	櫛描波状文・S字状浮文	沈線文3条・5条	後期後葉	松山市	松山市報告52集 1996	
62	109		釜ノ口遺跡4次		D2	○	1	51.2	64.5	—	41.4	—	沈線文4条・円形浮文	沈線文5(9・8・8・8・9)、円形透5段	後期後半(後葉)	松山市	『松山市史』	
63	110		釜ノ口遺跡4次		D2	○	1	—	—	—	—	—	沈線文2段(8・6)以上、円形透2段以上	—	後期後葉	松山市	未報告	
64	111		釜ノ口遺跡4次		D2	○	1	—	—	—	30.6	—	沈線文1段(7)以上、円形透1段以上	—	後期後葉	松山市	未報告	
65	—	56頁302	東本遺跡9次調査	SB101	D2(E)?	○	1	(60.0)	—	—	—	—	半載竹管文・円形浮文・U字形浮文	—	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
66	—	56頁303	東本遺跡9次調査	SB101	D2(E)?	○	1	(44.8)	—	—	—	—	櫛描波状文	—	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
67	—	56頁304	東本遺跡9次調査	SB101	D(E)?	○	1	(31.6)	—	—	—	—	櫛描波状文・円形浮文	—	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
68	—	56頁305	東本遺跡9次調査	SB101	D(E)?	○	1	—	—	—	—	—	沈線文	—	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
69	—	56頁306	東本遺跡9次調査	SB101	D2	○	1	—	—	13.2	—	—	円形透3段以上、8方向	—	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
70	—	56頁307	東本遺跡9次調査	SB101	D2	○	1	34.5	40.2+	13.6	—	—	沈線文・櫛描波状文・半載竹管文・浮文跡4箇所以上	円形透9段以上	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
71	—	56頁308	東本遺跡9次調査	SB101	D2	○	1	—	—	14.8	—	—	円形透5段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
72	—	56頁309	東本遺跡9次調査	SB101	D2	○	1	—	—	14.0	30.8	—	円形透5段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
73	—	56頁310	東本遺跡9次調査	SB101	D2	○	1	—	—	14.0	—	—	円形透4段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011	
74	—	57頁311	東本遺跡9次調査	SB101	D2	○	1	31.2	33.0+	11.2	—	—	半載竹管文・円形浮文	円形透8段以上	口縁上面に半載竹管文	後期後葉	松山市	松山市報告153集 2011
75	—	18頁34	東本遺跡11次調査	SB1	D(E)?	○	1	(37.0)	—	—	—	—	ヘラ描き沈線文・円形浮文	—	後期後葉	松山市	松山市報告143集 2010	
76	77	21頁128	中村松田遺跡	SB4	D1	○	1	—	—	—	24.4	—	円形透3段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告59集 1997	
77	78	21頁127	中村松田遺跡	SB4	D1	○	1	—	—	—	—	—	円形透4段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告59集 1997	
78	—	45頁268	中村松田遺跡	SK5	D2	○	1	—	—	(15)	—	—	直線文2段(4)以上、円形透3段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告59集 1997	
79	—	21頁63	中村松田遺跡4次調査	SE1	D	○	1	(31.0)	—	—	—	—	沈線文3条	—	後期後葉	松山市	松山市報告170集 2014	
80	—	31頁137	中村松田遺跡4次調査	SE2	D	○	1	—	—	12.4	—	—	沈線文2段(7・2)以上、円形透2段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告170集 2014	
81	—	31頁139	中村松田遺跡4次調査	SE2	D	○	1	—	—	—	(38.4)	—	円形透2段(径20cm)以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告170集 2014	
82	113	66頁213	東野森ノ木遺跡2次	SB502	D2	○	1	—	—	—	—	—	沈線文2段(6・7)以上、円形透2段以上	—	後期後葉	松山市	松山市報告117集 2007	
83	—	127頁 534	中村長正寺遺跡	SD1	D(E)?	○	1	(28.0+)	—	—	—	—	—	—	端部欠く	後期後半(後葉)	松山市	松山市報告134集 2009
84	127	95頁394	拓南中学校構内遺跡	SK3	E	○	1	43	—	—	—	—	棒状浮文	円形透4段以上	—	後期後半(後葉)	松山市	松山市報告134集 2009
85	—	95頁395	拓南中学校構内遺跡	SK3	D(E)?	○	1	—	—	—	(30.0)	—	—	—	裾端部に凹線文3条	後期後半(後葉)	松山市	松山市報告134集 2009
86	—	100頁 418	拓南中学校構内遺跡	包含層	D?	○	1	(41.4)	—	—	—	—	沈線文2条	—	後期後半(後葉)	松山市	松山市報告134集 2009	
87	117	154頁 676	樽味立添遺跡3次	SB301	D2	○	1	—	—	—	—	—	沈線文1段(4)以上、三角文	—	後期後半(後葉)	松山市	松山市報告117集 2007	

	88	—	5頁4	桑原遺跡8次	SB2	D2	○	1	—	—	15~18.4	—	—	円形透2段以上		後期後半	松山市	松山市年報35 2023	
	89	—	5頁5	桑原遺跡8次	SB2	D2	○	1	—	—	16.8	—	—	円形透1段以上		後期後半	松山市	松山市年報35 2023	
	90	80	66頁192	東本遺跡4次2区	SD203	D1	○	1	—	—	—	—	—	円形透4段以上		後期末葉(終末期古相)~古墳初頭	松山市	松山市報告54 集 1996	
	91	118	372頁 107	桑原高井遺跡1次	SB01	D2	○	1	42.2	—	—	—	—	半載竹管文2段・円形浮文		後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告54 集 1996	
	92	—	98頁135	樽味四反地遺跡20次	SB2上層	D?	○	1	—	—	—	—	—	柳描波状文		後期末葉(終末期古相)~古墳初頭	松山市	松山市報告 151集 2011	
	93	—	98頁136	樽味四反地遺跡20次	SB2上層	D?	○	1	—	—	—	—	—	山形文(鋸歯文か?)		後期末葉(終末期古相)~古墳初頭	松山市	松山市報告 151集 2011	
	94	123	423頁 1944	樽味四反地遺跡8次	大型建物跡柱穴	D1/D2	○	1	35	—	—	—	—	柳描波状文・円形浮文・内面に半載竹管文		後期終末期(新相)~古墳初頭	松山市	松山市報告 117集 2007	
	95	—	52頁133	樽味四反地遺跡19次	第IV層	D	○	1	—	—	14.8	—	—	円形透(径1.6cm)2段以上		—	松山市	松山市報告 151集 2011	
	96	—	38頁149	樽味立添遺跡4次	包含層	A			—	—	9.6	—	—	円形透(径0.8cm)2段以上		—	松山市	松山市報告 152集 2011	
	97	—	66頁53	樽味高木遺跡15次	包含層	A?			—	—	9.6	—	—	沈線文2段(5・2)以上、柳描波状文		—	松山市	松山市報告 152集 2011	
	98	—	296頁41	中村松田遺跡6次調査	SD1トレンチ	D?	○	1	—	—	9.0	—	—	円形透(径1.5cm)1段以上		後期後半~古墳前期	松山市	松山市報告 153集 2011	
	99	—	5頁3	桑原遺跡8次	SB2				—	—	12.8	26.4	—	裾部に三角形突帯		古墳初頭か	松山市	松山市年報35 2023	
	100	—	211頁 110	小坂遺跡6次調査	出土地点不明	D(E)?	○	1	(38.0)	—	—	—	—	ヘラ描き沈線文・棒状浮文		—	松山市	松山市報告 153集 2011	
久米遺跡群(来住遺跡群)	101	79	57頁43	来住廃寺2次	SB09	D1	○	1	31.2	—	—	—	—	柳描波状文		後期後半(後葉)	松山市	松山市報告12 集 1979	
石井・浮穴遺跡群	102	—	417頁 1459	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E	○	1	(44.4)	71.4	11.2~11.6	43.2	—	柳描波状文	円形透(径2.6cm)14段8方向、最上段に未貫通円形スタンプ	裾部に柳描波状文・半載竹管文	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2012
	103	—	418頁 1460	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E	○	1	(41.4)	71.7	12.4	(41.8)	—	柳描波状文・S字状浮文・半載竹管文	円形透(径2.3cm)14段、最上段に未貫通円形スタンプ	裾部に柳描波状文・半載竹管文	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	104	—	419頁 1461	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E?	○	1	(50.4)	—	—	—	—	柳描波状文・S字状浮文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	105	—	419頁 1462	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E?	○	1	(46.4)	—	—	—	—	柳描波状文・S字状浮文・円形浮文・半載竹管文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	106	—	419頁 1463	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E?	○	1	(50.4)	—	—	—	—	柳描波状文・斜格子文・半載竹管文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	107	—	419頁 1464	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E?	○	1	(39.0)	—	—	—	—	柳描波状文・半載竹管文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	108	—	419頁 1465	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E?	○	1	(48.4)	—	—	—	—	柳描波状文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	109	—	420頁 1466	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E	○	1	—	52.4+	12.8	—	—	円形透13段(径2.5cm)以上、最上段に未貫通円形スタンプ		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	110	—	420頁 1467	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E	○	1	—	—	12.0	—	—	円形透7段(径2.6cm)以上		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	111	—	420頁 1468	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E	○	1	(48.4)	50.7+	11.6	(37.7)	—	円形透12段(径2.5cm)以上		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	112	—	421頁 1469	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E	○	1	—	—	—	(38.2)	—	円形透1段以上	裾部に柳描波状文・半載竹管文	—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	113	—	421頁 1470	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E	○	1	—	—	—	(38.7)	—	円形透1段以上	裾部に柳描波状文	—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	114	—	421頁 1471	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E	○	1	—	—	—	(37.6)	—	—	裾部に柳描波状文	—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	115	—	421頁 1472	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E?	○	1	—	—	—	(36.0)	—	円形透12段(径2.5cm)以上	裾部に柳描波状文・半載竹管文	—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	116	—	421頁 1473	北井門遺跡2次調査	5区SR-1上層	E?	○	1	—	—	—	—	—	柳描波状文・半載竹管文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	117	—	296頁 1022	北井門遺跡2次調査	5区SI-1	E?	○	1	(46.0)	—	—	—	—	柳描波状文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 174集 2013
	118	—	128頁 384	北井門遺跡3次調査	SI5	E?	○	1	(38.0)	—	—	—	—	三角充填鋸歯文・刺突列点文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 177集 2013
	119	—	129頁 393	北井門遺跡3次調査	SI5	E?	○	1	(34.0)	—	—	—	—	柳描波状文		—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 177集 2013
	120	—	129頁 394	北井門遺跡3次調査	SI5	E?	○	1	—	—	—	(38.4)	—	円形透1段以上	裾面に柳描波状文、裾部に竹管文	—	後期後半(後葉)	愛媛県	愛媛県報告 177集 2013
	121	—	198頁 639	北井門遺跡3次調査	SD6(A地点)	E	○	1	32.4	—	—	—	—	柳描波状文・半載竹管文	円形透1段以上、最上段に未貫通円形スタンプ	—	後期後半(後葉~終末期古相)	愛媛県	愛媛県報告 177集 2013
	122	—	208頁 745	北井門遺跡3次調査	SD6(地点不明)	E?	○	1	—	—	—	(27.8)	—	—	裾面に柳描波状文、裾部に半載竹管文	—	後期後半(後葉~終末期古相)	愛媛県	愛媛県報告 177集 2013
	123	116	424頁 347	西石井遺跡3次	SE104	D2	○	1	—	—	—	—	—	沈線文3段(7・7・6)以上、円形透2段以上		—	後期後半(後葉)	松山市	松山市報告 112集 2005
	124	—	385頁43	西石井遺跡3次	SB201	D2	○	1	—	—	—	—	—	円形透2段以上		—	後期後半(後葉~終末期古相)	松山市	松山市報告 112集 2005
	125	—	448頁 439	西石井遺跡3次	SP239	D	○	1	—	—	—	—	—	裾部に有輪羽状文		—	後期後半(後葉~終末期古相)	松山市	松山市報告 112集 2005
	126	93	155頁 851	西石井遺跡1次	SK201	D1	○	1	32.6	—	—	—	—	三角充填鋸歯文・竹管文		—	後期末葉(終末期古相)	松山市	松山市報告 112集 2005
	127	115	164頁 972	西石井遺跡1次	SK403	D2	○	1	—	—	—	—	—	円形透2段以上		—	後期後半(後葉~終末期古相)	松山市	松山市報告 112集 2005

置づけ:松葉であり、執筆者名を本文末尾に示した。(青木・松葉)

1 別名端谷I遺跡および周辺の古代の様相

(1) 周辺の遺跡と別名端谷I遺跡

別名端谷I遺跡は、高縄山から北東に延びる日高丘陵に位置し、丘陵南部に形成された小開析谷の谷筋および丘陵斜面に立地する。周辺には、弥生時代前期末の溝状遺構が検出された別名端谷Ⅲ遺跡、中世後半の集落が確認された別名藪下遺跡、別名成ルノ谷遺跡が分布するほか、古代の遺跡が集中してみつまっている(図1)。

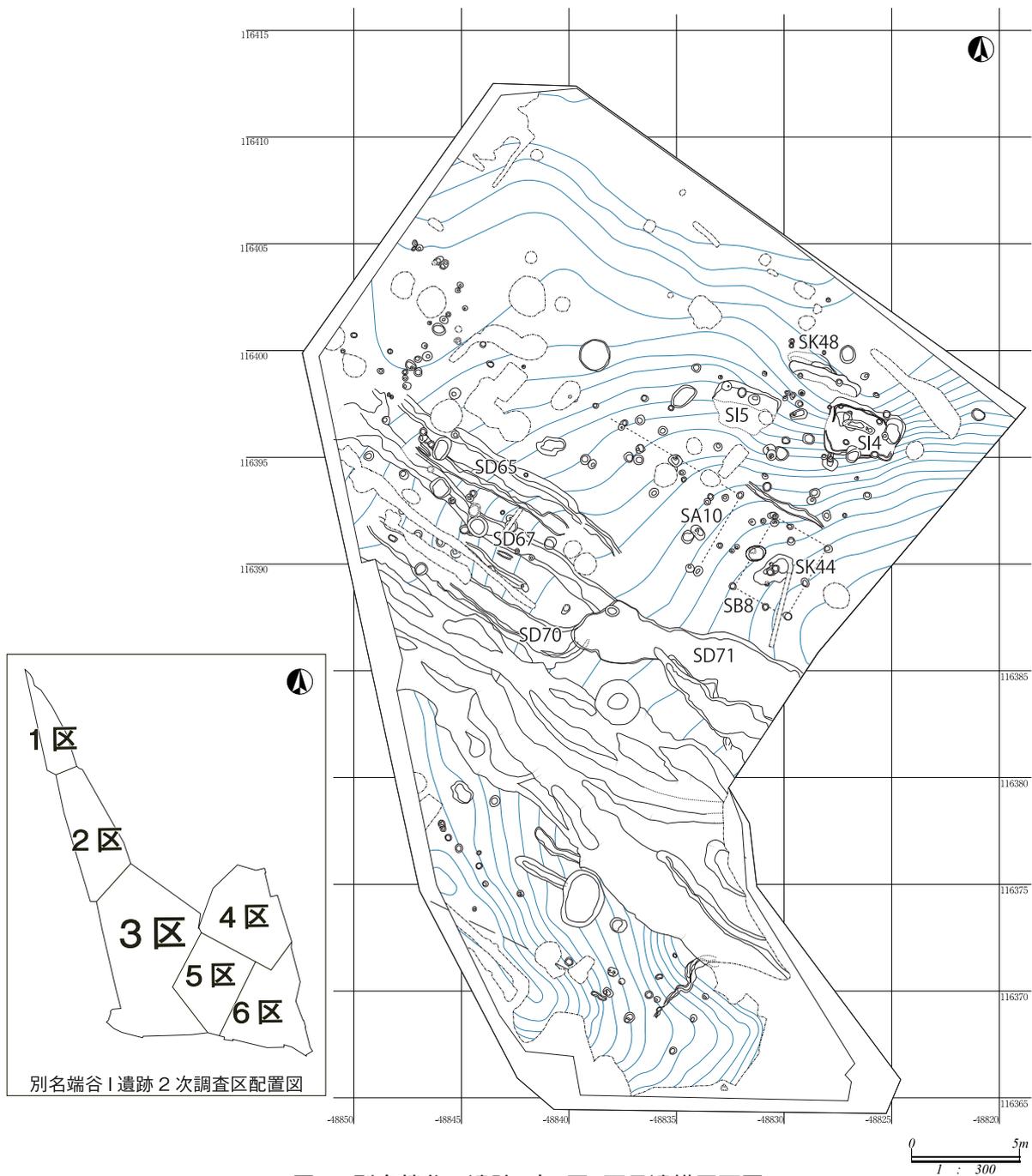


図2 別名端谷I遺跡2次3区1面目遺構平面図

その特徴として鍛冶・製鉄関係の遺構が挙げられ、高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡では平面形が鉄アレイ型をした長方形箱型炉と考えられる製鉄炉が検出された。鍛冶炉は別名寺谷Ⅰ遺跡で29基、高橋板敷Ⅰ遺跡では2基が確認されている。これらの遺跡からは、識字階層の存在を示す墨書土器や硯、一般集落ではあまり出土しない越州窯系青磁や緑釉陶器などが出土している。これらのことから、別名端谷Ⅰ遺跡を含む日高丘陵南部には、7世紀後半から10世紀にかけて製鉄・鍛冶を中心とした官営工房群が展開していたことが推測されている(池尻ほか2007)。(青木)

(2) 別名端谷Ⅰ遺跡2次の概要と古代の遺構・遺物

別名端谷Ⅰ遺跡2次調査では、弥生時代後期、古代(7世紀後半～11世紀)、中世後半(15～16世紀)の3時期の遺構群が確認された。弥生時代後期は竪穴建物と丘陵斜面に築かれた段状遺構が検出された。中世後半は、丘陵斜面を削平して平坦面を造成し、その平坦面を中心に小穴などの遺構が展開していた。特に2区は遺構密度が非常に高く、3間×4間の総柱建物が2棟確認でき、近くの自然流路では亀山系瓦質土器鍋・甕や土師質土器鍋、釜などが廃棄されていた。また、調査区内では谷の本筋とみられる自然流路が検出され、この流路からは「奉大般若経六百卷 天文拾伍丙午歲月吉日(カ辰)」と墨書された木の札が出土した。

古代の遺構は、中世や近現代段階の造成・削平によってあまり良好に残っていないが、1区、3区、5区、6区で確認され、特に3区は遺構密度が高い(図2)。

1区では、土師質土器の甕に土師質土器の杯で蓋をした土器埋納遺構(P36)が検出された。火葬墓と考えられる土器埋納遺構(P36)の近くでは、この遺構よりも時期が若干遡る掘立柱建物1棟と竪穴建物2棟が確認された。

5区では、北側中央で直径1.9mの円形を呈する井戸(SE1)が検出された。楠をそのままくり抜いた刳物を水溜および井戸側として使用し、その外側にさらに石積みが巡る、刳物と石積みを組み合わせた井戸であった。刳物の内部では、木製品の横櫛が出土し、11世紀ごろに廃絶されたと考えられる。

6区では、足高高台椀、土師質土器杯、皿、黒色土器などが廃棄されている溝(SD57)が検出され、この溝から出土した土器の中には、底部穿孔されたものや人為的に打ち欠いたものが認められる。

3区では、溝(SD65～71)と包含層から、緑釉陶器、灰釉陶器、越州窯系青磁が多数出土した。緑釉陶器は約200点、灰釉陶器は約60点出土しており、緑釉陶器は県内でも有数の出土量を誇っている。SD65からは愛媛県内で初事例となる白釉緑彩陶器が2個体出土している。墨書土器も3点確認でき、そのうちの1つは「野萬」と墨書されていた。その他にも風字硯や紡錘車なども出土している。

別名端谷Ⅰ遺跡2次調査では、鍛冶炉は検出されていないが、鉄滓や鞆羽口が出土しているため、1次調査地点のように、周辺で鍛冶が行われていたことが推測される。また、3区では本稿で取り上げる製塩炉と考えられる遺構が2基検出されている。(青木)

(3) 別名端谷I遺跡2次3区の竪穴建物・掘立柱建物・製塩炉

3区1面目では古代と中世後半の遺構が検出され、古代の遺構が大半を占めている。古代に伴う主要遺構は、竪穴建物SI4・SI5、掘立柱建物SB8、柵列SA10、土坑SK44・SK48、溝SD65～71がある。溝は調査区の中央を北西から南東方向に向かって流れており、その他の主要遺構は調査区東側に集中している。

これらの主要遺構のうち、SK44とSK48が製塩炉と考えられる。本遺跡では調査区全体から製塩土器が出土しているのではなく、SK44とSK48の付近しか出土していない。SK48では木炭、被熱を受けて器壁が風化した製塩土器片が多く出土した。また、SK44は埋土から製塩土器片が出土し、土坑直上の包含層から炭化材と製塩土器片が多数出土したこと、SK48と類似した規模であることから、製塩炉の可能性が高いと判断した。

SK44は、1間×2間の掘立柱建物に伴い、覆屋をもつ屋内の製塩炉である。一方で、SK48には明確な覆屋と考えられる遺構はみられないが、柱穴の有無はさておき、簡易的、仮設的な屋根を伴う製塩炉であった可能性は排除できない。これらの製塩炉に近接し、平面形が隅丸方形を呈する竪穴建物SI4・SI5が検出されている。ともに製塩土器は出土していないものの、例えば製塩に伴う作業場であるといったような有機的な関係が推測される。(青木)

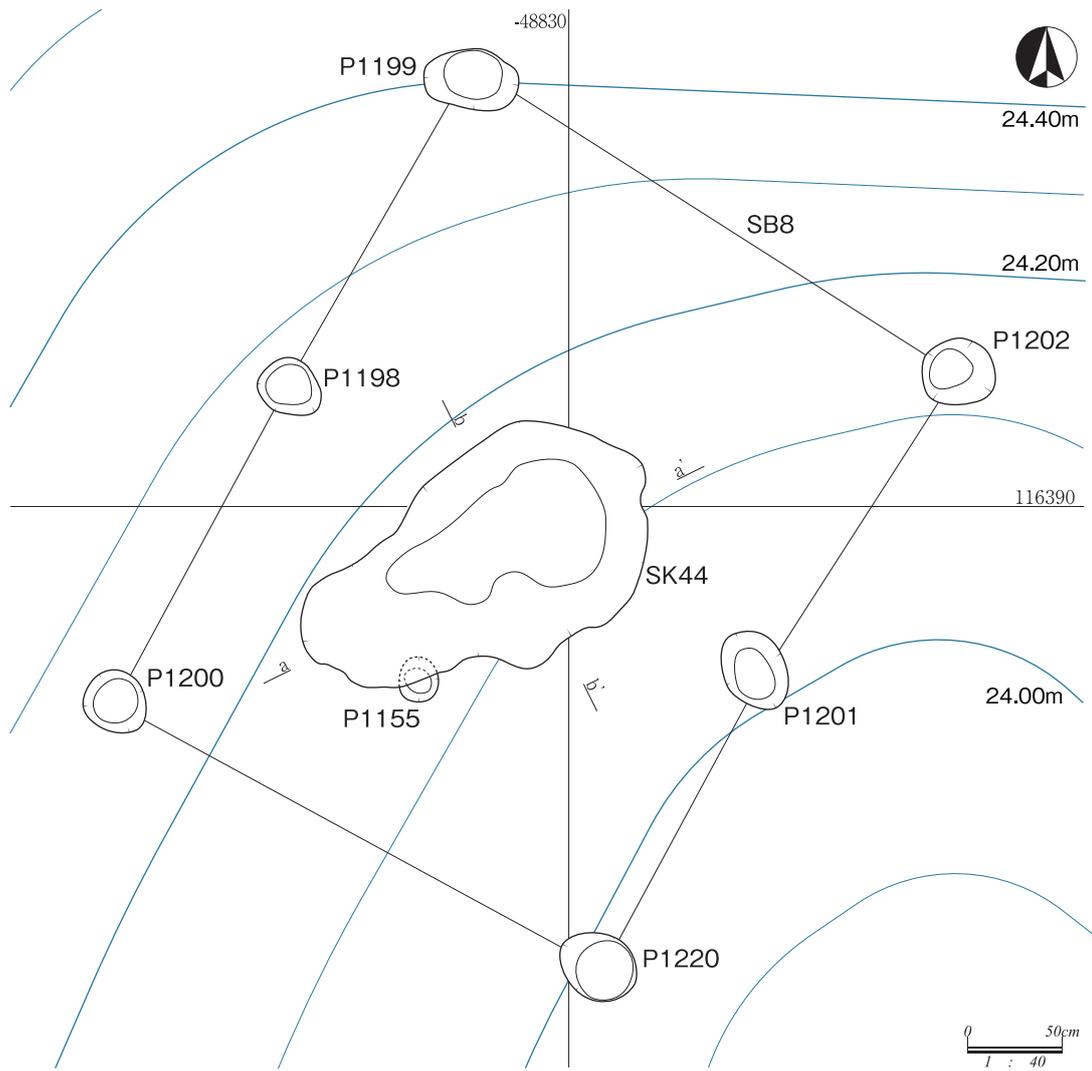
2 別名端谷I遺跡2次で検出された製塩炉

(1) 製塩炉の規模、構造、年代

製塩炉と考えられるSK44とSK48の土坑2基について、規模や構造をみていきたい。

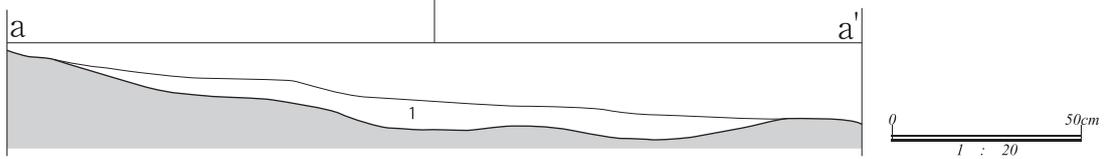
SK44は長辺2.03m、短辺1.17m、深さ0.1mを測り、平面形態は楕円形をなす(図3・写真1)。浅く掘り窪めた断面形状で、粘性の強い黒色土を埋土にもち、付近の溝からの流れ込みによって堆積したものと考えられる。土坑底面から製塩土器の底部片1点、埋土から製塩土器片15点が出土、総重量は135gである。また、土坑直上付近の包含層から70点、総重量1,376gの製塩土器片が出土した。土坑の埋土には焼土や灰、炭化物などが全く含まれず、周辺にも分布が認められないが、製塩土器が出土していること、土坑上に覆屋と考えられる1間×2間の掘立柱建物SB8が存在することから、製塩に伴う地床炉と考えられる。

SK48は長辺2.68m、短辺1.10m、深さ0.32mを測り、平面形態は長楕円形をなす(図4・写真2)。炉として使用した箇所は長辺1.56m、短辺0.83mの規模である。自然地形の斜面を段状に掘り込んだ後に炉の部分を浅く窪めて地床炉とする。土坑底面には細礫が4～8cmほどの厚みで堆積し、灰が細礫層に染み込んでくすんでいる。細礫層の周囲には数cmほどの木炭細片が密に分布する(図6・写真3)。炉底面の細礫の上に製塩土器を正位の状態で置き、周囲から木炭の熱で熱して土器を加熱したものと考えられる。細礫層と木炭の下位には炭化物や製塩土器片が混じる褐色系の粘質土が4～12cmほどの厚みで堆積しており、炉底面の張り替えに伴うものと考えられるので、複数回の炉の操業が想定される。地山土由来の土砂を炉の下部に入れて防湿し、その上面に細礫・木炭を敷くことで地床炉の底面にしたものと考えられる。SK44で見られたような覆屋と考えられる建物は周囲に認められないが、柱穴をもたない簡易的な覆屋が存在した可能性が考えら



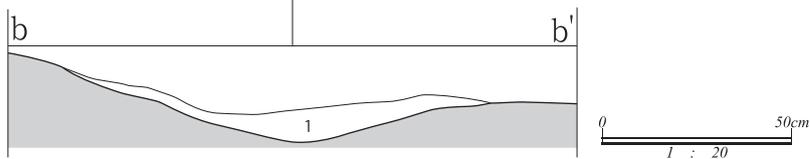
土層断面 a-a'

T.P.+24.200m



土層断面 b-b'

T.P.+24.200m



[SK44-土層断面]

層名	色調	Munsell	土質	粘性	粒度	緊密度	備考
1	黒	2.5Y2/1	粘質	強	細	中	粘性が強い。

図3 SK44平面図・土層断面図

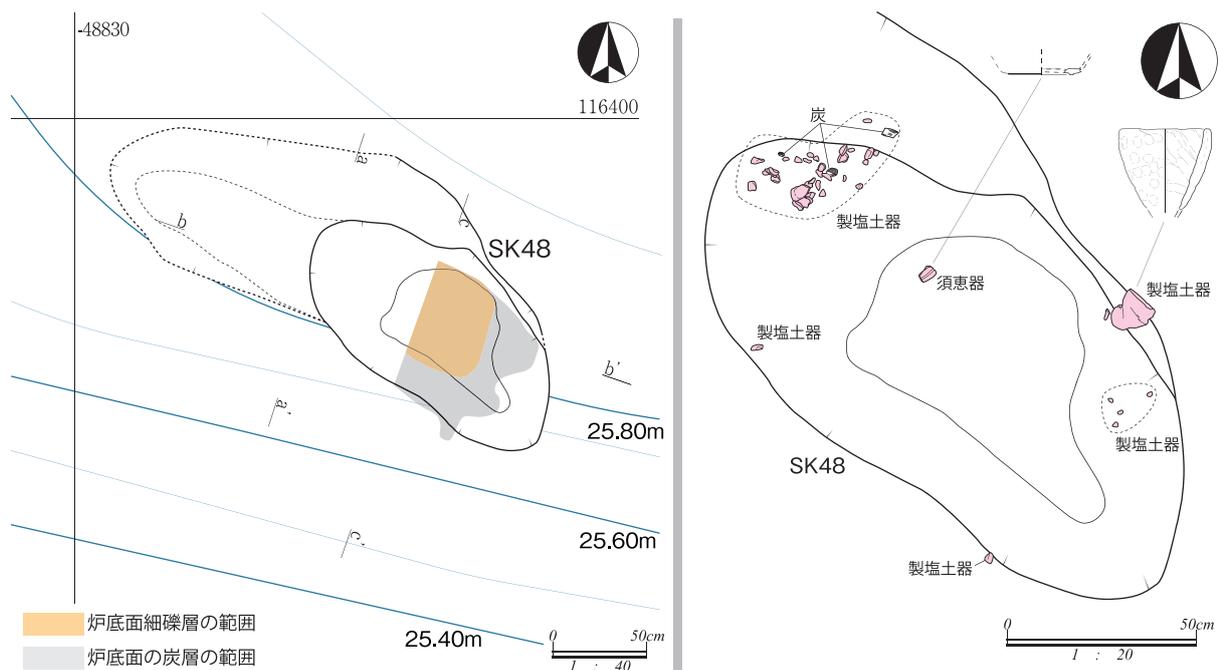


図4 SK48平面図

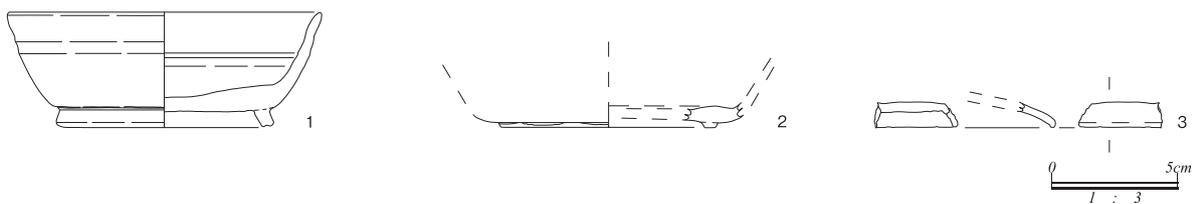


図5 SK48出土須恵器

れる。

SK48底面の細礫層から須恵器杯B底部片1点(図5-2)、製塩土器片41点(総重量319g)が出土した。この土坑の北西付近からも須恵器杯B片(図5-1)が出土している。

出土遺物からみた両遺構の年代に関して、SK44は製塩土器以外の遺物が見られないため、厳密な帰属時期は不明である。また、SK48は出土した須恵器杯B、杯B蓋の形態からみて8世紀で後半寄りの時期に伴うものと考えられる。

SK48底面から出土した炭化物のうち、5点について加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定が実施されており、そのうち4点は7世紀中頃から8世紀後半、1点は7世紀後半から8世

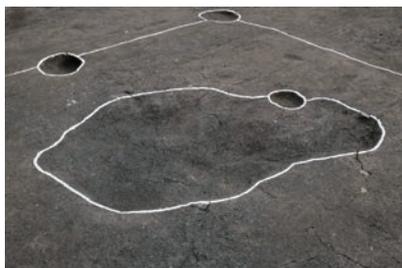


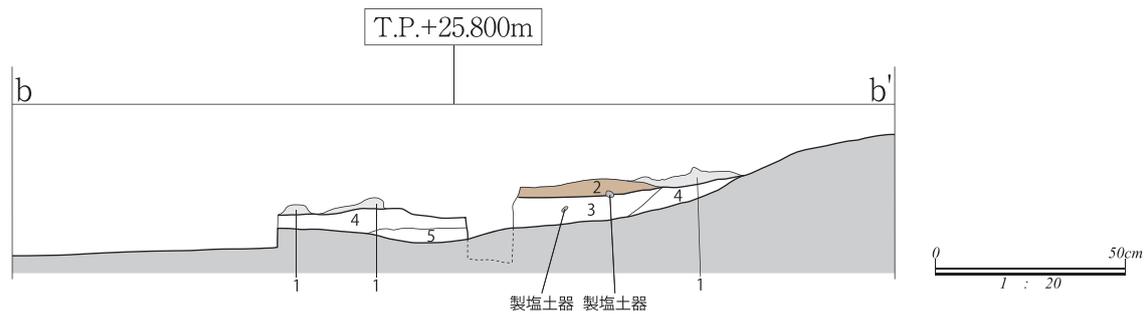
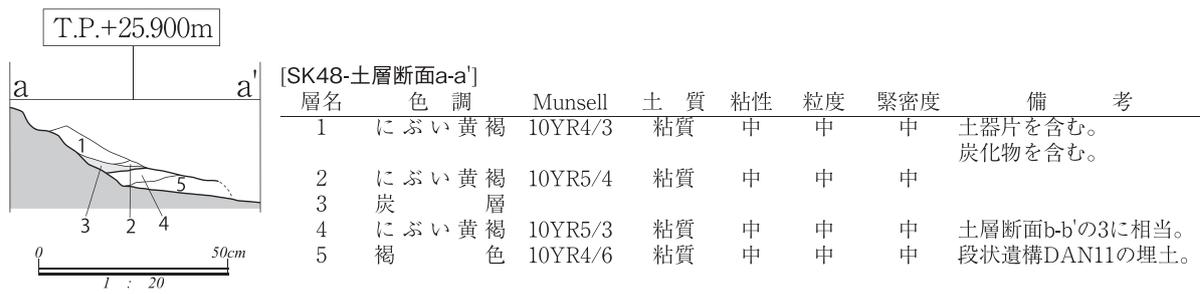
写真1 SK44



写真2 SK48

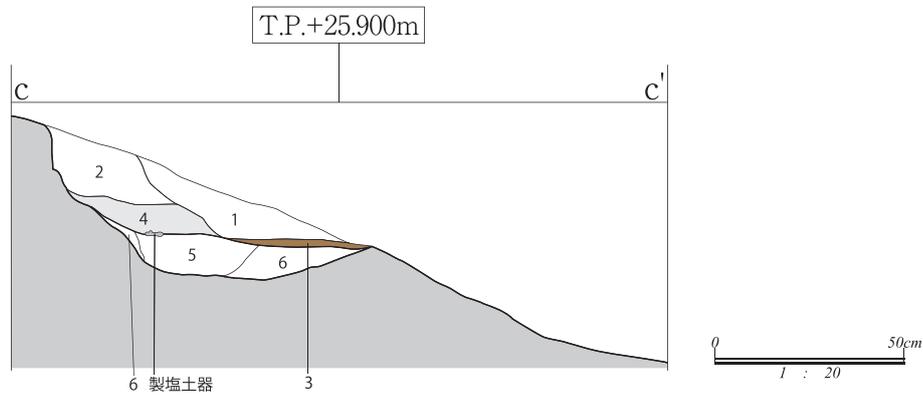


写真3 SK48土層断面



[SK48-土層断面b-b']

層名	色調	Munsell	土質	粘性	粒度	緊密度	備考
1	炭層						土層断面a-aの3に相当。
2	細礫層		砂質				土層断面c-c'の3に相当。
3	暗褐	10YR3/3	砂質	中	中	中	炭化物を含む。
4	にぶい黄褐	10YR5/3	粘質	中	中	中	炭化物・灰を含む。土層断面a-a'の4に相当。
5	褐	10YR4/4	粘質	中	中	中	炉底面の構築層。



[SK48-土層断面c-c']

層名	色調	Munsell	土質	粘性	粒度	緊密度	備考
1	にぶい黄褐	10YR5/4	砂質	中	中	中	多くの細礫を含む。
2	褐	10YR4/4	砂質	中	中	中	細礫・炭化物を含む。
3	炭層						木炭が主体。
4	細礫層				粗		1~2mmの細礫が主体。土層断面b-b'の2に相当。
5	暗褐	10YR3/3	粘質	中	中	中	炭化物を含む。土層断面b-b'の3に相当。
6	褐	10YR4/4	粘質	中	中	中	細礫・炭化物を含む。 10YR7/6明黄褐粘質土ブロックを含む。

図6 SK48土層断面図

紀後半という年代値が示された。SK48については出土須恵器の年代観とも齟齬がなく、9世紀以後まで降らないことが判明した¹⁾。SK44についても同様な時期が想定される。(松葉)

(2) 製塩炉の機能

別名端谷 I 遺跡2次で検出された製塩炉は長辺2m、短辺1mほどの楕円形をなし、浅く窪む地床炉である。SK48の構造からは、底面は防湿のために定期的に土を張り、その上に細礫を敷いて製塩土器を置き、周囲から炭で加熱するという製塩方法が復元される。

製塩土器は、当地で焼塩土器と呼称される口縁部が厚手で径が小さな尖底砲弾形である。別名端谷 I 遺跡は現在の海浜部から約3km離れていることから、煎熬によって得られた粗塩を遺跡内に搬入して、この焼塩土器を用いて焼き固めたとは考えにくい。土器ごと固形塩が遺跡に搬入され、塩の消費に際して地床炉で土器を再加熱し、堅塩の状態を維持するために用いられたものと考えられる。炉の平面規模と径10~15cmほどという土器の法量から考えて、一回の操業で15個程度の土器を並べたと想定される。

燃料と考えられる地床炉周囲の炭化材は、放射性炭素年代測定とともに実施した樹種同定によって、広葉樹のスダジイとコナラ属クヌギ節(以下、クヌギ節)が各2点、ツバキ属1点の計3分類群の樹種であることが判明した。

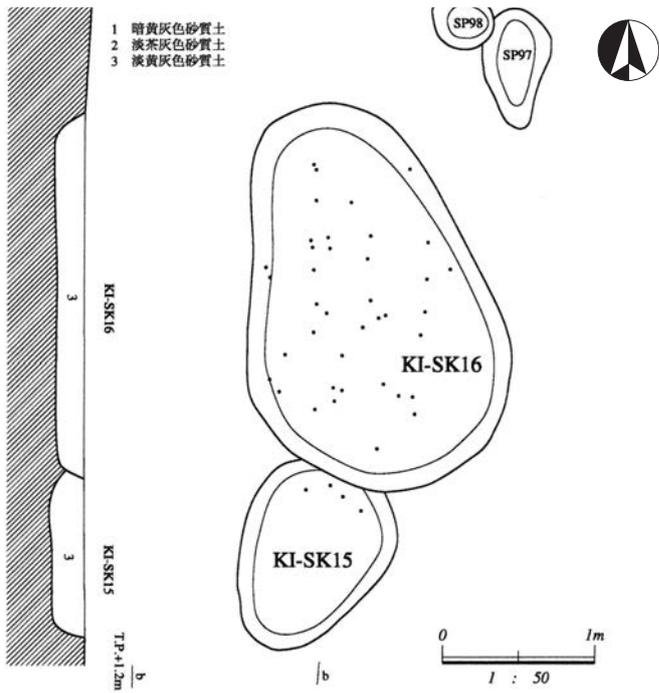
スダジイは暖帯から亜熱帯に分布するブナ科の常緑高木の広葉樹である。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアバマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する同様にブナ科の落葉高木の広葉樹である。ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。

炭化材には少なくともスダジイとクヌギ節、ツバキ属が存在することがあきらかとなったが、いずれの樹種も堅硬な樹種であり、燃料材としても火持ちがよく、薪炭材として普通に利用されたとされる(伊東ほか2011)。また、いずれも在来の樹種で(平井1996)、遺跡周辺に生育していた樹木を選択的に伐採利用したものと考えられる。(松葉)

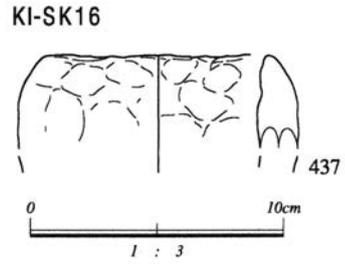
(3) 焼塩工程に伴うと考えられる地床炉の諸例

古代の土器製塩には、鹹水(塩分濃度を高めた濃い海水)を煮詰めて粗塩を作るための煎熬の工程と、得られた粗塩を焼き固めて固形塩を作るための焼塩の工程が存在することが指摘されている(森2010・松葉2021など)。鉄釜の使用が想定される周防国(羽鳥2013)、大型土器の使用が想定される若狭国(松葉2013)といったように、煎熬に用いられた器物は地域ごとに違いがあり、多様である一方、焼塩に用いられたものは圧倒的に土器が多く、それぞれの地域で一定の形態差があるものの、総じて小型土器が用いられ、固形塩の生産があったことが判明している(岩本2020)。

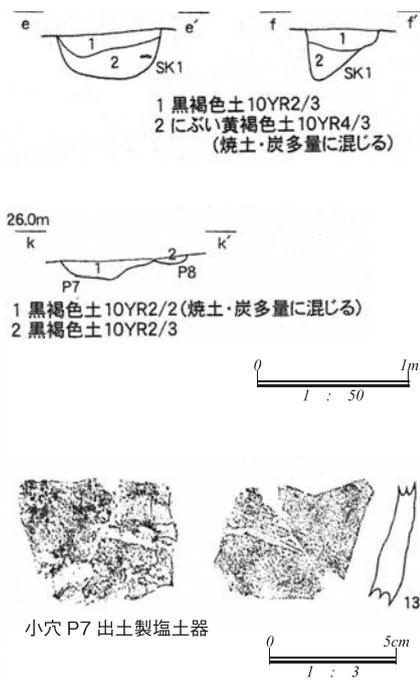
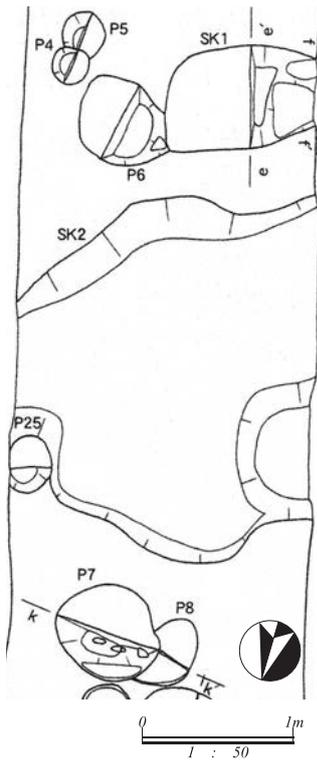
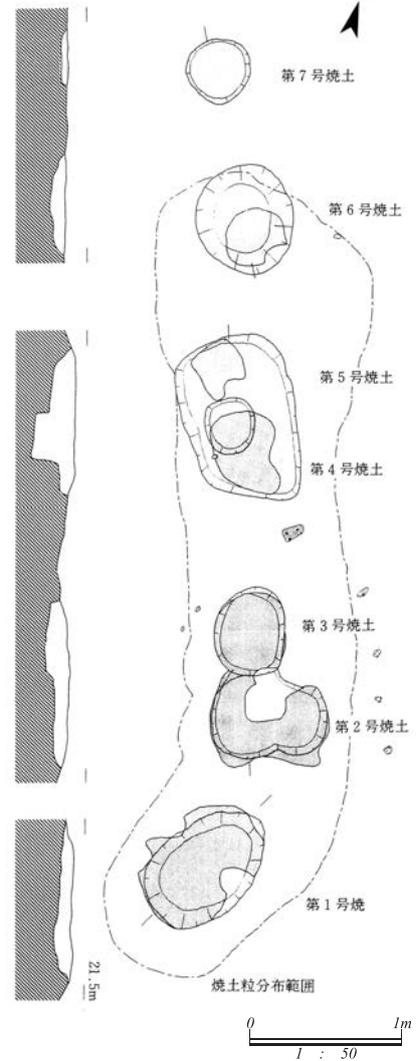
このような焼塩土器は、塩の移動や集約に伴い、河川や溝、津湊などの水上・陸上交通の拠点や結節点にある場所、あるいは官衙や消費末端となる一般集落などから出土する事例がよく知られている。一方で、内陸地を含めて焼塩工程に伴う炉跡そのものが検出される事例はあまり多くない。例えば美濃を中心とした濃尾平野北部地域では、例えば美濃式製塩土器と呼称される小型



愛媛県・馬島亀ヶ浦遺跡KI区
土坑KI-SK16



富山県・馬場山D遺跡焼土



福井県・興道寺廃寺第4次1 トレンチ
土坑 SK1・小穴 P7

図7 焼塩工程に伴うと考えられる地床炉の諸例

で長胴丸底形の焼塩土器が存在し、重竹遺跡などにみるように竪穴建物からこれらの焼塩土器が多く出土することが知られている(森2009)。美濃に限らず、竪穴建物から焼塩土器が出土する事例は全国的に多く、建物の火処と親和性が高い状況が見受けられる。逆に火処さえ伴えば焼塩の再加熱には場所や方法を選ばないと考えられることから、各地に多様な加熱施設が存在した可能性も想定される。

そのような前提を踏まえて、焼塩に伴う地床炉の可能性のある遺構に目を向けると、愛媛県内の事例として今治市・馬島亀ヶ浦遺跡K I 区の土坑K I -SK16が挙げられる(図7・谷若ほか1999)。長辺2.63m、短辺1.76m、深さ0.21mを測る楕円形の土坑で、焼土、灰、炭化材の出土は認められないが、奈良・平安時代の須恵器片とともに製塩土器片1点が出土している。積極的に地床炉とは評価できないかも知れないが、別名端谷 I 遺跡2次のSK44の事例から判断して製塩炉である可能性も視野におく必要がある²⁾。

愛媛県外では、例えば福井県の興道寺遺跡では海岸部から約2km離れた地点(興道寺廃寺第4次1トレンチ・図7)で、製塩土器片7点と多量の焼土・炭が出土した長辺0.95m、短辺0.68m、深さ0.33mの土坑SK1と、土師器甕片2点、製塩土器片4点と焼土・炭が出土した長辺0.68m、短辺0.63m、深さ0.12mの小穴P7が検出されている(松葉ほか2007)。ともに8世紀と考えられる遺構である。

また、富山県では馬場山D遺跡の丘陵上で石組み炉1基とともに、土坑や小穴状の掘り込みを伴う焼土8か所が検出されている(図7・岡本・山本ほか1987)。10世紀、平安時代の土器製塩と関係するものと想定されており、周辺からは支脚と小型の平底土器が出土している。富山県では、境A遺跡においても奈良・平安時代の焼土面が確認されている(橋本ほか1992)。

北陸の事例をいくつか挙げたが、このように焼塩工程に伴うと考えられる地床炉が散見されており、丹念に拾い上げれば各地で同様な事例を確認することができるものと考えられる。改めて別名端谷 I 遺跡2次の土坑SK44・48に関しても、焼塩工程に伴う製塩炉の一例として評価しておきたい。(松葉)

3 別名端谷I遺跡2次調査で出土した製塩土器

(1) 製塩土器の概要

別名端谷 I 遺跡2次調査3区では、SK44から16点、SK48から41点、包含層から70点、総数127点の製塩土器の破片が出土した。これらの製塩土器は大きく2つに分類される。1つは手捏ね成形の製塩土器であり、内面にはナデ調整が施される(図9)。もう1つは型作り成形の製塩土器であり、内面には型に被せたとみられる布の痕跡や、型の杵圧痕にあたる縦位・横位の溝がのこる(図10)。また、形態も、丸底からゆるやかに口縁部まで立ち上がり、器高と口径の差がほとんどないと想定されるもの、そして丸底からゆるやかに立ち上がり、口縁部はやや強く内湾し、口径より器高が大きくなると想定されるものの二種があり、前者を砲弾形、後者を略円錐形と表現する。周辺地域における完形出土例は今治市・四村額ヶ内遺跡にあり、これらは略円錐形を呈する(図8)。加えて、完形ではないものの全体の器形が砲弾形を呈すると推測される資料も周辺地域で

出土している。別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した製塩土器片の全体的な器形は砲弾形、あるいは略円錐形を呈する可能性が高い。

図9-1~34は、手捏ね成形の製塩土器である。完形での出土品はないものの、1、2は残存状態が良好であり、器形は砲弾形を呈する。口径復元は5点で可能であり、いずれも11~13cmにおさまる。口縁部はやや直線的、もしくは若干内湾しながら立ち上がる。口縁端部は面取りがみられるもの(図9-1、11、18など)、丸くおさまるもの(図9-2、6、23など)、尖り気味のもの(図9-3、16、25など)がある。外面には指頭圧痕が顕著にのこり、内面には横位あるいは斜位のナデ調整が施されている。胎土は粗く、1~5mm程度の長石粒を多量に含むものが多数を占め、少数ながらも石英粒や角閃石粒、雲母を含む例もみられる。1、2、3、13、14、18、19、22、24は輪積み痕を確認でき、特に2は明瞭にのこっている。また、ほとんどの破片の厚みが1.5~2cm程度を測るのに対し、9は最大厚0.6cmと、他の破片と比較して器壁が薄い。

図10-1~4は、型作り成形とみられる製塩土器である。内面に明確にのこる布目痕に加え、口縁端部が内側に先すぼまり状に突出するという、型作り成形の製塩土器でよくみられる口縁端部の形状から型作り成形であると判断される。いずれも残存状態があまり良好ではない。口縁部2点はやや内湾しながら立ち上がり、その口径は復元できない。図10-2は型作り成形の製塩土器特有の口縁端部形状を持つ。図10-1は口縁端部がやや摩耗しているものの、おそらく図10-2と同様の形状であったと想定される。型作り成形による土器片の厚みはいずれも1cm以内におさまり、手捏ね成形の破片と比較すると全体的に薄い。胎土や色調の特徴は手捏ね成形の製塩土器と概ね同じである。(福本)

(2) 出土製塩土器の特徴

a. 型作り成形の製塩土器に関する検討

別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した製塩土器のなかで、内面に布目痕をのこす土器は型作り成形によるものと判断される。ただし、布目痕が丁寧にナデ消される場合もあり、ナデ調整が手捏ね成形の根拠となるわけではない。型作り成形の土器は内面が平坦である一方、手捏ね成形土器の内面は凹凸があり、波うつ例が多い。

今回の検討資料は小片であったために、布目痕の有無が主な判断基準となってしまうが、破片の大きさが確保されれば、ナデ調整をのこす土器の中にも型作り成形品と判断し得る製塩土器が存在する可能性はあろう。

愛媛県内において、布目痕をのこす製塩土器が出土した遺跡は、上島町・宮ノ浦遺跡、今治市・四村額ヶ内遺跡、今治市・八町1号遺跡、伊予市・旗

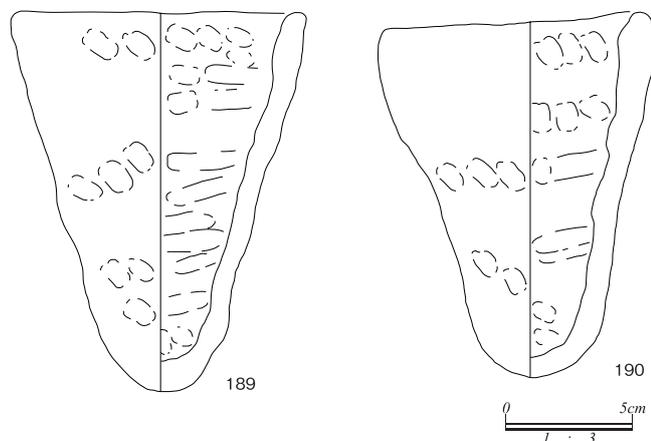


図8 四村額ヶ内遺跡出土製塩土器

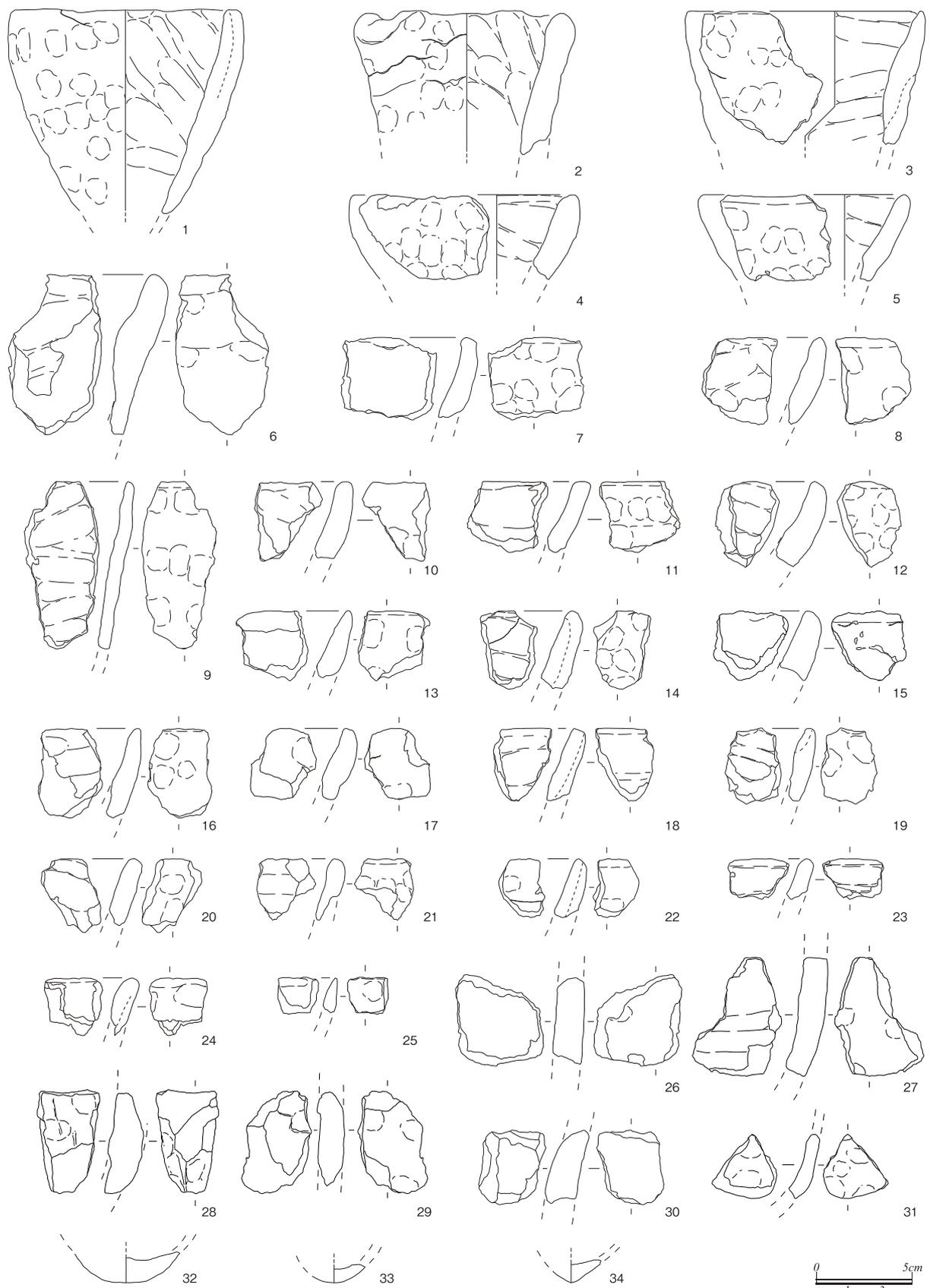


图9 SK44·SK48出土製塩土器(1)

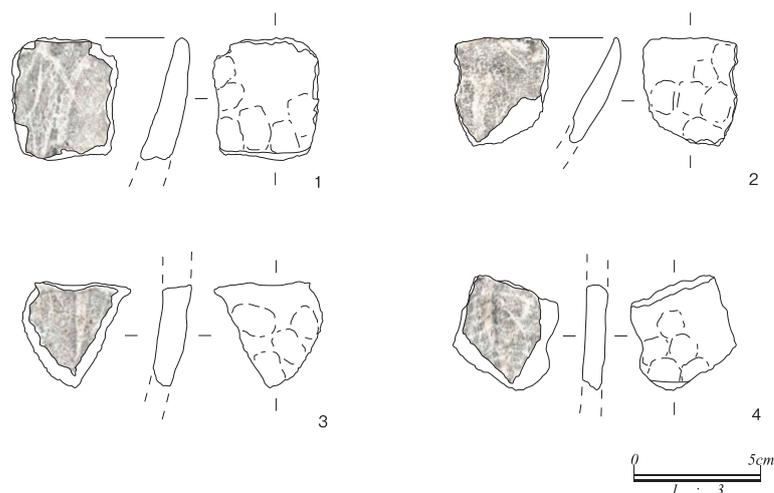


図10 SK44・SK48出土製塩土器(2)

屋遺跡Ⅱ、伊方町・野坂貝塚の5遺跡である³⁾。そのうち、旗屋遺跡Ⅱ、野坂貝塚出土の製塩土器は「六連島式土器」と報告されている(池尻ほか編2018、石貫2023)。六連島式土器とは、北部九州地域～山口県を中心に分布する焼塩土器であり、型作り成形のため内面に布目痕を伴う場合が多く、全体の器形が円筒形という特徴をもつ(小野1961、市橋1982)。別名端谷Ⅰ遺跡2次調査で出土した布目痕をのこす製塩土器片は、口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、全体形が砲弾形や略円錐形と推測されることから、口縁部が直立気味である六連島式土器とは異なる。胎土や焼成に着目すると、両者の差異は著しい。筆者が実査した福岡県福岡市・海の中道遺跡や山口県上関町・田ノ浦遺跡出土の六連島式土器は、その胎土が精緻であり、混和材を多量には含まない。それに比べ、別名端谷Ⅰ遺跡2次調査出土の布目痕をのこす製塩土器は胎土が粗く、長石粒を多量に含む。また、焼成も、前者は焼き締まりがかたく、後者はやや焼成があまりい。

以上の点から、別名端谷Ⅰ遺跡2次調査で出土した布目痕を有する製塩土器は、山口県～北部九州地域を中心に分布する六連島式土器ではない。

b. 手捏ね成形の製塩土器に関する検討

今治平野や道前平野を中心とした東予地域では、図11に示すような製塩土器が出土している。これらの製塩土器は今治市・糸大谷遺跡や今治市・長沢元瀬遺跡出土資料を除き、内面にはナデ調整が施されて生じた凹凸が明瞭にのこり、手捏ね成形の可能性がある。また、東予地域出土の製塩土器は1～5mm程度の長石粒を多量に含むという胎土の特徴や、橙色系あるいは黄褐色系を呈するという色調の特徴をもち、多少の差異は認められるものの、そのほとんどは別名端谷Ⅰ遺跡2次調査で出土した製塩土器と共通している。

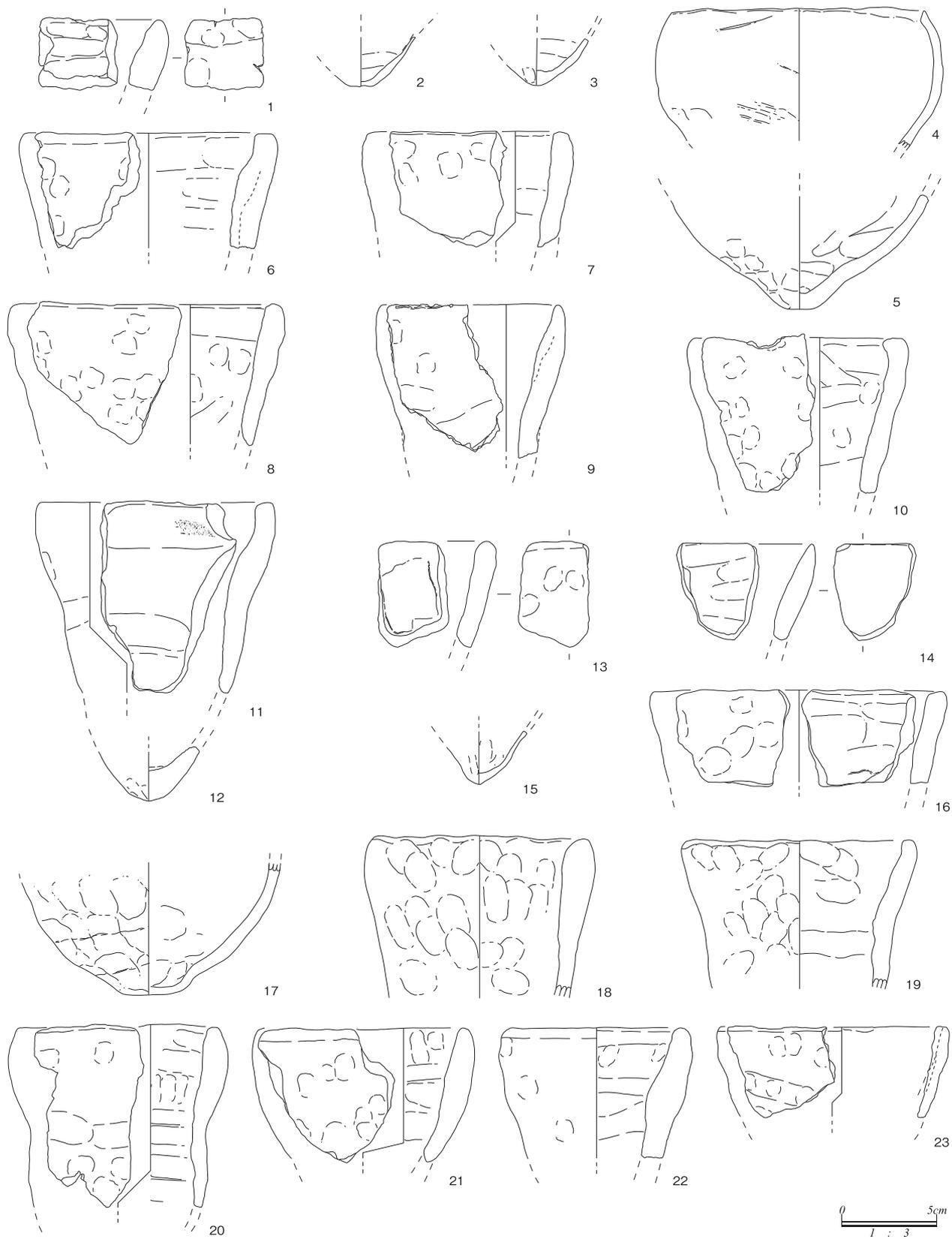
一方、別名端谷Ⅰ遺跡2次調査出土資料のなかには、色調の部分的な変化が多く認められ、一部には黒斑がみられる。さらに外面の器表面が荒れているものが多く、白色物質が表出しているものもある(図9-25)。東予地域における他の遺跡でも黒斑や、外面の器表面が荒れている製塩土器片を確認できるものの、別名端谷Ⅰ遺跡2次調査出土製塩土器のような、1つの遺跡で出土した製塩土器の大多数が同様の特徴をもつというわけではない。これらの製塩土器が再加熱に使用さ

れたか否かを断言することはできないが、別名端谷Ⅰ遺跡2次調査における地床炉の存在や上述した特徴を考慮すると、実際に本遺跡において、焼塩工程や再加熱に関わる何らかの行為が行われていたことを裏付ける資料であると考えられる。(福本)

表1 SK48出土須恵器 SK44・SK48出土製塩土器観察表

掲載番号	遺物番号	種別	出土情報	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	製作手法・調整 (内面/外面)	胎土	色調 (内面/外面)	焼成	備考
図5-1	1637	須恵器	SK48	(12.4)	[4.6]	(8.6)		回転ナデ 回転ナデ	1mm程度の長石粒・角閃石粒含む	灰白色 (2.5Y7/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)	堅緻	
図5-2	1635	須恵器	SK48		[1.0]	(8.4)		回転ナデ 回転ナデ	1mm以下の長石粒含む	灰白色 (2.5Y7/1) 灰白色 (2.5Y7/1)	堅緻	
図5-3	1649	須恵器	SK48		[1.0]			回転ナデ 回転ナデ	1mm以下の長石粒少量	灰白色 (2.5Y7/1) 灰黄色 (2.5Y7/2)	堅緻	
図9-1	1651	焼塩土器	SK48	(12.0)	[10.6]		193	ナデ 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒多量	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR7/6)	良好	輪積み痕
図9-2	1589	焼塩土器	包含層 (SK44)	(11.0)	[7.5]		130	ナデ 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒・石英粒多量	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)・黒褐色 (2.5Y3/1)	良好	輪積み痕
図9-3	1354-2	焼塩土器	包含層 (SK44)	(12.2)	[7.2]		56	ナデ 指頭圧痕	1~3mm程度の長石粒含む	褐色 (5YR6/6) 明赤褐色 (5YR5/6)	良好	輪積み痕
図9-4	1346-3	焼塩土器	包含層 (SK44)	(11.7)	[4.4]		47	ナデ 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒多量	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	良好	
図9-5	1346-1	焼塩土器	包含層 (SK44)	(12.8)	[4.5]		33	ナデ 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒多量	にぶい赤褐色 (5YR5/4) にぶい褐色 (7.5YR5/4)・褐色 (7.5YR5/1)	良好	
図9-6	1354-4	焼塩土器	包含層 (SK44)		[8.3]		73	ナデ 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒多量	にぶい赤褐色 (5YR5/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	良好	
図9-7	1354-10	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.2]		31	ナデ 指頭圧痕	1~3mm程度の長石粒多量	にぶい褐色 (7.5YR7/4) 褐色 (7.5YR7/6)・褐色 (7.5YR4/1)	良好	
図9-8	1354-1	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.5]		23	ナデ・指頭圧痕 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒・石英粒多量	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR6/6)	良好	
図9-9	1354-3	焼塩土器	包含層 (SK44)		[8.8]		28	ナデ ナデ・指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒多量	明赤褐色 (5YR5/6) 明赤褐色 (5YR5/6)	良好	
図9-10	1354-5	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.1]		15	ナデ 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒・石英粒多量	にぶい褐色 (7.5YR5/3) 灰褐色 (7.5YR5/2)・褐色 (10YR4/1)・褐色 (5YR6/6)	良好	
図9-11	1359-1	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.7]		21	ナデ ナデ・指頭圧痕	1~3mm程度の長石粒多量	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR6/8)	良好	
図9-12	1354-12	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.5]		22	ナデ 指頭圧痕	1~3mm程度の長石粒含む	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR7/4)	良好	
図9-13	1357-2	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.5]		17	ナデ 指頭圧痕	1~2mm程度の長石粒含む 雲母含む	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	良好	
図9-14	1354-9	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.0]		18	ナデ 指頭圧痕	1mm以下の長石粒多量	明赤褐色 (5YR5/6) 明赤褐色 (5YR5/6)	良好	輪積み痕
図9-15	1354-8	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.6]		21	ナデ ナデ?	1~5mm程度の長石粒含む	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	良好	
図9-16	1354-6	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.7]		19	ナデ・指頭圧痕 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒・石英粒多量	明赤褐色 (5YR5/6) 明赤褐色 (5YR5/6)	良好	
図9-17	1636-1	焼塩土器	SK48		[3.8]		11	指頭圧痕 指頭圧痕	1mm以下の長石粒少量	褐色 (7.5YR7/6) 褐色 (7.5YR7/6)	良好	
図9-18	1354-7	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.8]		14	ナデ ナデ	1~5mm程度の長石粒多量	明赤褐色 (5YR5/6)・灰黄褐色 (10YR6/2) 褐色 (5YR6/6)・にぶい褐色 (10YR7/2)	良好	輪積み痕
図9-19	1354-13	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.8]		12	ナデ 指頭圧痕	1~3mm程度の長石粒多量	にぶい褐色 (7.5YR6/4)・明赤褐色 (5YR5/6) にぶい赤褐色 (5YR5/4)・明赤褐色 (2.5YR5/6)	良好	輪積み痕
図9-20	1354-17	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.5]		13	ナデ 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒・石英粒多量	明黄褐色 (10YR7/6) 明黄褐色 (10YR7/6)	良好	
図9-21	1357-3	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.2]		7	ナデ 指頭圧痕	1mm以下の長石粒含む	褐色 (5YR6/8) 灰白色 (7.5YR8/1)・褐色 (7.5YR5/1)・赤褐色 (10YR5/4)	良好	
図9-22	1354-14	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.1]		7	指頭圧痕 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒多量	明赤褐色 (2.5YR5/6)・褐色 (5YR5/6) 褐色 (7.5YR5/6)	良好	輪積み痕
図9-23	1354-15	焼塩土器	包含層 (SK44)		[2.1]		7	ナデ ナデ	1~3mm程度の長石粒・石英粒含む	褐色 (10YR4/1) 褐色 (5YR6/6)	良好	
図9-24	1357-5	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.0]		9	ナデ ナデ・指頭圧痕	1~2mm程度の長石粒含む	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	良好	輪積み痕
図9-25	1359-3	焼塩土器	包含層 (SK44)		[1.7]		3	ナデ 指頭圧痕	1mm以下の長石粒含む	灰白色 (10YR8/2)・明赤褐色 (2.5YR5/6)・黄灰色 (2.5Y5/1) 灰白色 (7.5YR8/1)・褐色 (10YR6/1)	良好	
図9-26	1359-2	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.5]		39	ナデ? 指頭圧痕	1~4mm程度の長石粒多量	灰白色 (10YR8/2)・褐色 (7.5YR7/6) 褐色 (7.5YR7/6)	良好	
図9-27	1354-11	焼塩土器	包含層 (SK44)		[6.2]		33	ナデ 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒・石英粒多量	褐色 (5YR7/6) にぶい褐色 (7.5YR7/6)	良好	
図9-28	1409	焼塩土器	SK44		[5.2]		27	指頭圧痕 指頭圧痕	1~2mm程度の長石粒多量 1~3mm程度の石英粒含む	にぶい黄褐色 (10YR6/3)・灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄褐色 (10YR5/2)・にぶい褐色 (7.5YR6/4)	良好	
図9-29	1357-6	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.9]		20	ナデ? 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒多量	にぶい褐色 (7.5YR6/3)・にぶい褐色 (5YR6/4)・褐色 (5YR7/6) にぶい褐色 (7.5YR7/4)・にぶい黄褐色 (10YR7/2)	良好	
図9-30	1354-16	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.8]		25	ナデ? 指頭圧痕	1mm以下の長石粒含む 3mm程度の赤色粒少量	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	良好	
図9-31	1354-18	焼塩土器	包含層 (SK44)		[3.6]		8	指頭圧痕 指頭圧痕	1~2mm程度の長石粒多量	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	良好	
図9-32	1649-1	焼塩土器	SK48		[1.6]	[5.4]	24	ナデ ナデ?	1mm程度の長石粒含む	明褐色 (7.5YR7/2) 灰色 (7.5YR8/1)・にぶい赤褐色 (10YR6/3)	良好	
図9-33	1623	焼塩土器	SK48		[0.9]	[2.7]	5	指頭圧痕 指頭圧痕	1mm程度の長石粒含む	灰白色 (2.5Y8/1)・にぶい黄褐色 (10YR7/3) 灰色 (2.5Y8/1)・にぶい褐色 (10YR7/3)	良好	
図9-34	1636-2	焼塩土器	SK48		[1.2]	[2.4]	3	ナデ? ナデ?	1~3mm程度の長石粒含む	褐色 (5YR7/6)・明赤褐色 (2.5YR5/6)・灰黄色 (2.5Y6/2) 褐色 (7.5YR6/6)	良好	
図10-1	1357-1	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.8]		28	布日痕 指頭圧痕	1~2mm程度の長石粒多量	にぶい褐色 (7.5YR7/4) にぶい褐色 (7.5YR6/4)	良好	
図10-2	1346-2	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.2]		17	布日痕 指頭圧痕	1~3mm程度の長石粒多量	にぶい褐色 (7.5YR6/4) にぶい褐色 (7.5YR6/3)・褐色 (7.5YR4/1)	良好	
図10-3	1346-4	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.0]		18	布日痕 指頭圧痕	1~3mm程度の長石粒・石英粒多量	にぶい褐色 (7.5YR6/4) 灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	
図10-4	1357-4	焼塩土器	包含層 (SK44)		[4.2]		20	布日痕 指頭圧痕	1~5mm程度の長石粒多量	にぶい褐色 (7.5YR5/4) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	良好	

*()は推定値、 []は残存値



1. 馬島亀ヶ浦遺跡 2~5. 糸大谷遺跡 6・7. 阿方牛ノ江Ⅱ遺跡 8~10. 別名寺谷Ⅰ遺跡 11・12. 四村日本遺跡 13・14. 経田遺跡 15. 長沢元瀬遺跡
 16. 朝倉下下経田遺跡(以上、今治市) 17. 幸の木遺跡 18~19. 久枝Ⅱ遺跡 20~21. 大開遺跡 22~23. 松ノ丁遺跡(以上、西条市)

図11 今治平野・道前平野出土の製塩土器

(3) 製塩土器の評価

別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した製塩土器には、型作り成形と手捏ね成形の製塩土器の二種類があることをこれまで説明してきた。

前者は、愛媛県内における出土例が現状では少ないこと、そして北部九州地域～山口県を中心に分布する六連島式土器とは異なる製塩土器であると評価した。

また、後者は、器形や調整、胎土、色調等の特徴の観点から今治平野・道前平野地域出土の製塩土器と比較し、別名端谷 I 遺跡2次調査出土資料が今治平野・道前平野地域出土の製塩土器と同様の特徴をもつことを指摘した。なお、手捏ね成形の製塩土器片は、口縁端部の形状や口縁部の立ち上がり方に多様性があり、製作技法上の差異の反映と考えられるが、そのような現象が生じた背景については今後の検討課題としたい。また、別名端谷 I 遺跡2次調査出土製塩土器の大多数は確実に二次的被熱を受けていることが明らかであり、この遺跡で焼塩工程や再加熱などが行われたことが想定された。(福本)

4 製塩炉と製塩土器に関する評価

(1) 製塩炉

別名端谷 I 遺跡2次で検出されたSK44・48は、土坑を製塩のための地床炉として用いたものと想定される。海からの距離と遺跡の立地、出土製塩土器の形態などから考えて、海浜部から土器ごと遺跡内に搬入された固形塩を再加熱するために、焼塩炉として用いられた遺構と理解される。SK44には小規模ではあるものの覆屋としての掘立柱建物が伴い、SK48においても建物構造をとらない簡易的な屋根が存在したと考えることが合理的で、一定期間の使用を想定した施設と考えられる。

焼塩工程に伴うとみられる地床炉跡の類例を若干挙げたが、別名端谷 I 遺跡2次SK44と馬島亀ヶ浦遺跡K I 区の土坑K I -SK16は、製塩土器は出土するものの、土坑埋土に焼土・炭化材などを伴わないという特徴がある。ともに土坑が長楕円形を呈し、底面までが浅いという点でも共通する。溝から図8に示した完形の焼塩土器が出土している今治市・四村額ヶ内遺跡でもやはり楕円形を呈する浅い土坑が多く検出されており、その一部は自然の窪地という性格付けもされているが、改めて焼塩炉の可能性も積極的に評価していく必要がある。(松葉)

(2) 製塩土器

出土した製塩土器は、口径10～15cm内外、砲弾形・略円錐形をなす厚手のもので占められ、当地の製塩土器研究においては焼塩土器と認定されている一群の範疇にある。その中でも、一定の形態差、内面の布目痕の有無といったように製作技法の差異が存在し、複数の生産地から搬入された状況がうかがえる。

改めて注目されるのは、内面に布目痕や型枠痕跡と考えられる縦位・横位の線状痕が認められる個体が存在することである。島嶼部では上島町・宮ノ浦遺跡で内面に布目痕を伴う9世紀以後の製塩土器片が近年確認されたところでもあり、型作り成形による製塩土器が島嶼部から東予地

域西部域には一定程度用いられ、また内陸地に搬入されている可能性が新たに浮上した。各遺跡での既存の出土資料においても土器内面の型枠痕や布目痕などの有無を含めてその製作手法を再点検することで、その類例が増加するものと理解される。

また、今回、あきらかにはできなかったが、海浜部や島嶼部を含め、遺跡間における製塩土器の形態や胎土などの比較検討をおこなうことで、別名端谷 I 遺跡に限らず、内陸地出土のそれぞれの製塩土器が海浜部や島嶼部のどの製塩遺跡からもたらされたものかについてまで、踏み込める余地を残している。遺跡間で製塩土器の成形、胎土、焼成などに顕著な共通性や差異が見いだせない可能性は高いのかも知れないけれども、遺跡間の製塩土器の移動を考古学からあきらかにできれば、在地社会における塩の生産と流通に留まらず、製塩工程による遺跡間分業にも迫ることが期待できる。その努力は続けるべきであろう。(松葉)

(3) 遺跡の性格と土器製塩

別名端谷 I 遺跡2次では、谷筋の本流にあたる自然流路の左岸丘陵部で、製塩炉が確認された。この周辺にはSK44が付随する掘立柱建物と柱筋が揃う柵列で区画された空間があること、SK48に近接する簡易的な堅穴建物2棟が検出されたことは、恒常的であるかはともかく遺跡内に専従的・組織的に製塩に関与する体制が存在したことをうかがわせる。

現時点での見解として、律令期の官営工房群と評価される別名端谷 I 遺跡および周辺丘陵部の諸遺跡の性格を考えた場合、鍛冶炉が検出されている別名寺谷 I 遺跡から焼塩土器が出土していることは、近年指摘されているように鍛冶作業に伴う熱中症対策の一つとして塩分を必要としたために固形塩を別名端谷 I 遺跡に集約した可能性(大道ほか2015)、あるいは製塩炉が検出された別名端谷 I 遺跡2次3区から多量の施釉陶器が出土しているように、近郊に周辺の工房施設を管理・運営した官人層が居住・滞在した施設が存在し、彼らの給食の一環として食用塩を必要とした可能性などが想定される。

その評価は追って刊行される発掘調査報告書においておこなわれるが、製鉄・鍛冶を主体とする官営工房施設に製塩施設が付随している点、そしてその構造の一端があきらかになった点が特筆されるべき成果であり、各地の官衙および周辺の手工業生産に伴う施設と製塩との関わりを考える上で新資料を提示できたものと考えられる。(松葉)

おわりに

本稿では、別名端谷 I 遺跡2次で確認された製塩炉と製塩土器の位置づけを通じて、当地の土器製塩研究に関する基礎資料を提示した。愛媛大学考古学研究室と上島町教育委員会による宮ノ浦遺跡の発掘調査(有馬・大塩2023)、愛媛大学アジア古代産業考古学研究中心と愛媛大学法文学部考古学研究室が令和5年6月に共催した「第19回シンポジウム 古代の塩の生産と消費 - 中央と地方 -」(村上ほか2023)、伊方町・野坂貝塚出土製塩土器の新例の提示(石貫2023)など、近年、愛媛県では土器製塩に関する調査研究が盛んな状況にある。拙稿が当地における今後の土器製塩に関する調査研究の進展に寄与するものとなれば幸いである。

なお、今回取り上げた別名端谷 I 遺跡2次出土の製塩土器は、現在整理作業を進めている未報告資料である。掲載図表等の引用転載の制限は特におこなわないが、発掘調査報告書の刊行をもって最終的な評価とするため、現時点での評価を変更する可能性もある。

末尾となりますが、資料調査、本稿の執筆等にあって以下の機関・方々にお世話になりました。また、令和5年5月26日・27日に奈良文化財研究所で開催された平城京出土製塩土器に関する検討会では神野恵氏をはじめ同研究所諸氏ならびに検討会参加者から多くのご教示を賜りました。記して感謝申し上げます(敬称略)。

今治市教育委員会、愛媛県教育委員会、愛媛県歴史文化博物館、西条市教育委員会、独立行政法人奈良文化財研究所、石貫弘泰、岡島俊也、岡本真治、小野隼弥、加治木智也、柴田圭子、神野恵、杉山大晋、首藤久士、谷若倫郎、辻康男、冨田尚夫、眞鍋昭文、三好裕之、村上恭通、持永壮志朗、渡邊芳貴

註

- *1 この分析は公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センターが株式会社パレオラボに委託して実施したものであり、その成果の使用にあたっては同センター調査課長 柴田圭子氏、現場責任者 三好裕之氏をはじめセンター諸氏ならびに株式会社パレオ・ラボ諸氏のご高配を賜った。
- *2 馬島亀ヶ浦遺跡K I 区の土坑K I - SK16では焼塩土器の出土が知られており、別名端谷 I 遺跡2次のSK44・SK48の調査事例から考えて、土坑K I - SK16についても焼塩に伴う遺構である可能性を視野においておく必要があること、この遺構に限らず遺跡全体で焼塩土器の出土が多い傾向があることを調査者の谷若倫郎氏、眞鍋昭文氏からご教示いただいた。
- *3 四村額ヶ内遺跡、八町1号遺跡の未報告資料の中に、内面に布目痕を有し、口縁端部が切り落とされて整えられたような製塩土器がみられた。このような資料は型作り成形の可能性が高い。

引用・参考文献

- 青木聡志2023「別名端谷 I 遺跡2次調査における古代の土器埋納遺構について」『紀要愛媛』第19号 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 青木聡志2023「G.別名端谷 I 遺跡2次」『愛比売』2022(令和4)年度年報 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町 宮ノ浦遺跡Ⅶ』愛媛県上島町教育委員会
- 池尻伸吾・和田正人2007『今治新都市開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 別名端谷 I 遺跡・別名端谷 II 遺跡・別名成ルノ谷遺跡・別名寺谷 I 遺跡・別名寺谷 II 遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第139集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 池尻伸吾・石貫睦子・多田仁・土井光一郎・中野邦子編2018『旗屋遺跡Ⅱ 上三谷篠田・鶴吉遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第194集 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 石貫弘泰2023「愛媛県伊方町野坂貝塚出土の焼塩土器 - 布目痕の観察を軸に -」『伊方町町見郷土館研究紀要』第7号 町見郷土館
- 市橋重喜1982「第五章 調査の記録 - 遺物Ⅱ(生産用具)-1製塩土器」『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集 福岡市教育委員会
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂2011『日本有用樹木誌』海青社

- 岩本正二2020「古代における堅塩土器の全国展開」『難波宮と古代都城』中尾芳治編 同成社
- 大道和人・八瀬正雄・松本達也・松葉竜司・加藤晴彦2015「第三談 塩・鉄・丹後国「国産品」の生産と流通」
『丹後国一三〇〇年記念事業記録集 丹後国遷政』与謝野町教育委員会
- 岡本淳一郎・山本正敏・関清・狩野睦・酒井重洋・橋本正春編1987『北陸自動車道遺跡 -朝日町編3- 馬場山D遺跡 馬場山G遺跡 馬場山H遺跡』富山県教育委員会
- 小野忠熙1961「六連島遺跡」「筏石遺跡」『山口県文化財概要』4 山口県教育委員会
- 柴田昌児編2005『久枝遺跡 久枝Ⅱ遺跡 本郷Ⅰ遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第122集 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 柴田昌児・柴田圭子編2008『大久保遺跡(大久保・竹成地区・E地区)・大開遺跡・松ノ丁遺跡(1次・2次)』埋蔵文化財発掘調査報告書第144集 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 立花卓編2002『幸の木遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第102集 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 谷若倫郎・楠真依子・山崎友紀編1996『糸大谷遺跡-来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第2集-』埋蔵文化財発掘調査報告書第63集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 谷若倫郎・眞鍋昭文編1999『馬島亀ヶ浦遺跡・馬島ハゼヶ浦遺跡 -来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集-』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 谷若倫郎・吉田泰之編1998『四村日本遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第71集 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 中野良一・岡田敏彦・柴田昌児・柴田圭子・池尻伸吾・石貫睦子・眞鍋昭文2017『伊予の古代-未知なる伊予国府の探求に向けて-』公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 西川真美編2018『長沢元瀬遺跡・長沢二反地遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第192集 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 橋本正春・狩野睦・酒井重洋・山本正敏編1992『北陸自動車道遺跡調査報告 -朝日町編7- 境A遺跡』総括編 富山県教育委員会
- 平井信二1996『木の大本科』-解説編- 朝倉書房
- 羽鳥幸一2013「瀬戸内の製塩と流通について 周防国を中心に堅塩と煎塩の様相をみる」『奈良文化財研究所研究報告第12冊 第16回古代官衙・集落研究会 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所
- 廣田秀久・白石聡・山本正廣編1997『四村額ヶ内遺跡発掘調査報告書』今治市埋蔵文化財調査報告書33 今治市教育委員会
- 松村さを里・中野良一・吉田広編2014『経田遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第180集 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 松村さを里編2020『朝倉下下経田遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第198集 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 松葉竜司2021「第II部 地域の歴史と文化遺産の調査(京都府外) 土器製塩実験から古代若狭の生産塩を考える」
『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 松葉竜司2013「若狭湾沿岸地域における土器製塩と塩の流通」『奈良文化財研究所研究報告第12冊 第16回古代官衙・集落研究会 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所
- 松葉竜司・山口遥介・小林裕季編2007『美浜町内遺跡発掘調査報告書』2 美浜町教育委員会
- 村上恭通・神野恵・松葉竜司・福本佳織2023『愛媛大学 アジア古代産業考古学研究センター第32回アジア歴史講演会・愛媛大学法文学部考古学研究室第19回シンポジウム 古代の塩の生産と消費 -中央と地方-』愛媛大

- 学アジア古代産業考古学研究センター・愛媛大学法文学部考古学研究室
森泰通2009「古代美濃における堅塩の生産・流通・消費」『木曾川流域の自然と歴史 -木曾川学論集-』木曾川学研究協議会
森泰通2010「東海地方における古代土器製塩覚え書き2009 -内陸部から出土する製塩土器の意味を考えるために-」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
山内英樹編2006『高地スゴ谷 I 遺跡・高地栗谷4号墳・阿方牛ノ江 I 遺跡・阿方牛ノ江 II 遺跡・阿方牛ノ江 III 遺跡・阿方牛ノ江 IV 遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第130集 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

図版出典

- 図1・2 調査図面等を元に青木作図
図3・4・6 調査図面を元に松葉作図(岡本真治氏トレース)
図5 現在、整理中の別名端谷 I 遺跡2次調査出土資料を福本実測・トレース
図7 以下の文献から転載の上、松葉作図
谷若ほか編1999・図-84、岡本ほか編1987・第44図、松葉ほか編2007・第33図
図8 廣田ほか編1997・図21を福本再トレース
図9・10 現在、整理中の別名端谷 I 遺跡2次調査出土資料を福本実測・トレース
図11 以下の文献から転載の上、福本作図
1・6~16・20~23：福本実測・トレース、2~5：谷若ほか編1996・図-91を福本再トレース、17：立花ほか編2002・図-37を福本再トレース、18~19：柴田編2005・図730を福本再トレース

(2024年4月1日)

別名端谷 I 遺跡の古代の評価をめぐる基礎的整理 — 緑釉陶器と土師質土器三足盤 —

青木聡志

はじめに

別名端谷 I 遺跡は愛媛県今治市別名字端谷に所在し、平成14年度の今治新都市開発(第1次調査)に伴って発掘調査が実施された。本遺跡では、古代(8~9世紀)の鍛冶炉が検出され、『倉正私印』の銘をもつ銅印などが出土した。その後、令和4年度に一般国道196号今治道路・市道別名矢田線の整備に伴い第2次調査が実施され、県内では珍しい組み合わせの古代の井戸(石組みの井戸側に水溜もしくは井筒として刳物を使用)、火葬墓と考えられる土器埋納遺構、「奉□□大般若経六百卷 天文拾五丙午歲月吉日(吉辰)」と墨書された中世後半の木札などが出土した(青木2023)。その他にも、第2次調査の特筆すべき点として、県内では初事例となる白釉緑彩陶器や多数の緑釉陶器の出土が挙げられる。

本遺跡は在庁官人あるいは在地の官人層が主導した官営の鍛冶工房跡であり、国衙もしくは郡衙に付随する鍛冶工房跡と考えられている(財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2007)。別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した緑釉陶器は、9世紀~10世紀にかけていずれの時期も20~30点以上、一定量出土していることが特徴の一つであり、緑釉陶器は県内最多の出土量を誇り、灰釉陶器も県内有数の出土量である。施釉陶器の保有状況から本遺跡の評価を試みる必要があるが、そのためには愛媛県内で緑釉陶器が出土した遺跡と比較・検討をしなければならない。また、施釉陶器の保有状況だけでなく、井戸や土器埋納遺構などの新たな知見を踏まえると、官営鍛冶工房遺跡としての多様なあり方を想定できる可能性があり、本遺跡の位置付けや性格について再度評価する必要がある。そのため、本稿では別名端谷 I 遺跡の古代の評価をめぐる基礎的整理として、第2次調査の調査成果の一つである緑釉陶器を取り上げ、愛媛県内の緑釉陶器の保有状況を明らかにすることを目的とする。加えて、本遺跡の評価をするにあたり、第2次調査で出土した土師質土器三足盤について、県内でも類例をみないため、資料紹介をしたい。

1 別名端谷 I 遺跡2次調査の緑釉陶器

別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した緑釉陶器の概要について示す¹⁾。別名端谷 I 遺跡2次調査では、未整理段階で201点の緑釉陶器が確認されている(図1~4)。これらの緑釉陶器は、別名端谷 I 遺跡2次調査の調査区全体から満遍なく出土しているのではなく、偏りがみられる。大多数は3区1面目の包含層と3区SD65~71の溝から出土している。緑釉陶器の器種は、椀、皿、耳皿、小椀、袋物(壺か瓶)が認められ、産地では、京都産、東海産、近江産が確認でき、防長産は1点もみられない。特筆されるものとして、白釉緑彩陶器(図2-1、2)と陰刻花文皿(図3-50)がある。白釉緑

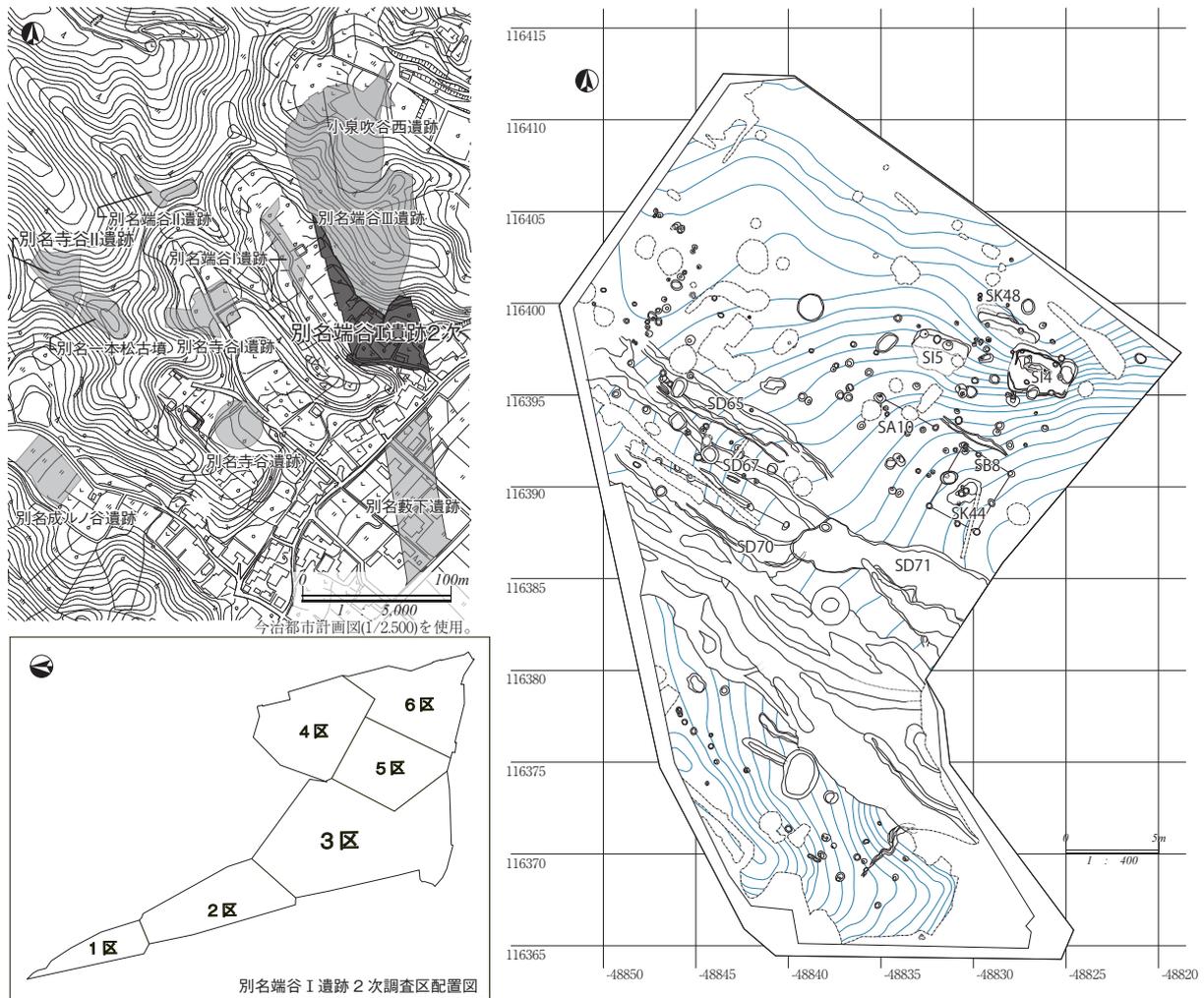
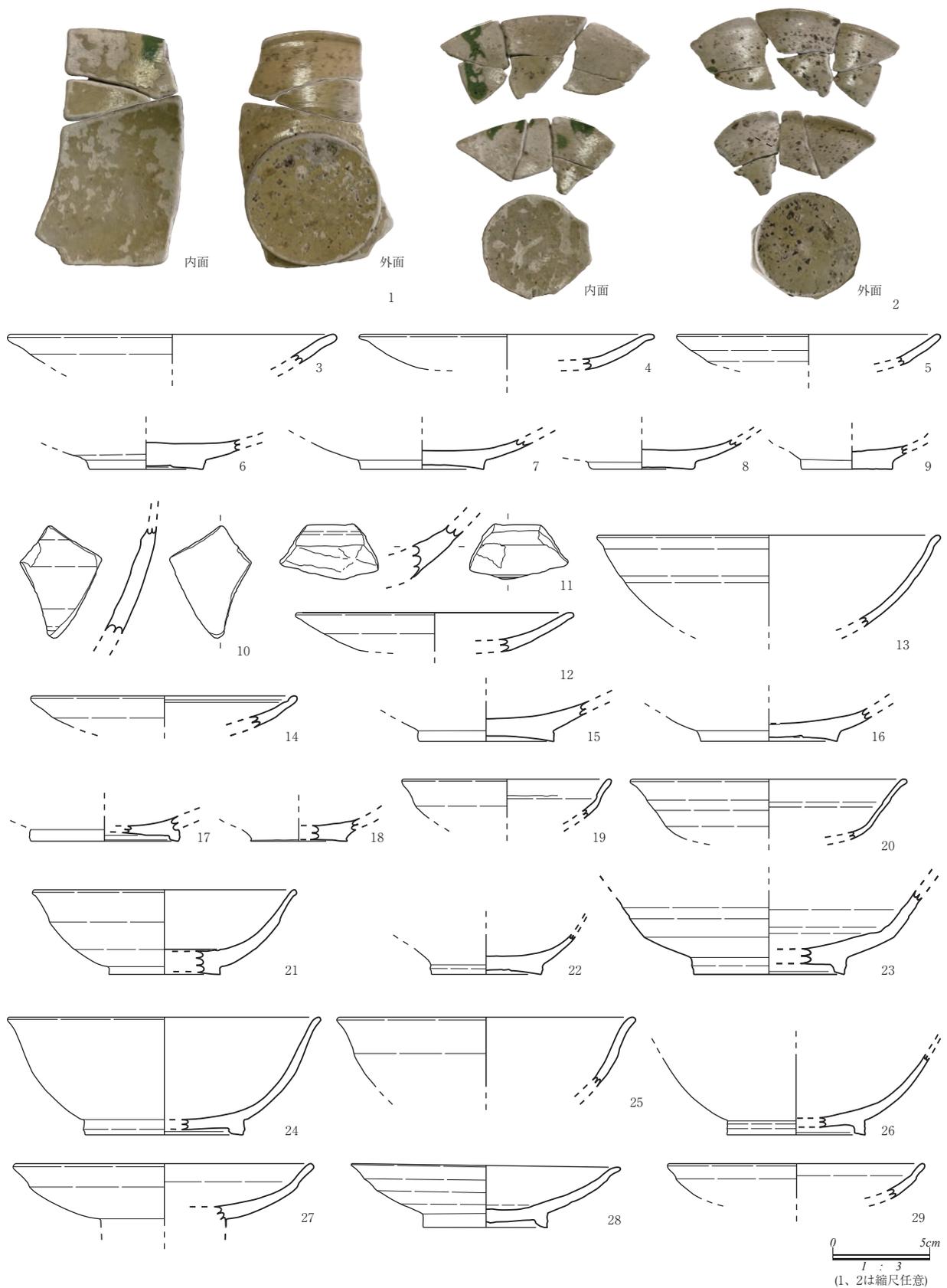


図1 別名端谷I遺跡2次調査の位置と3区1面目の全測図

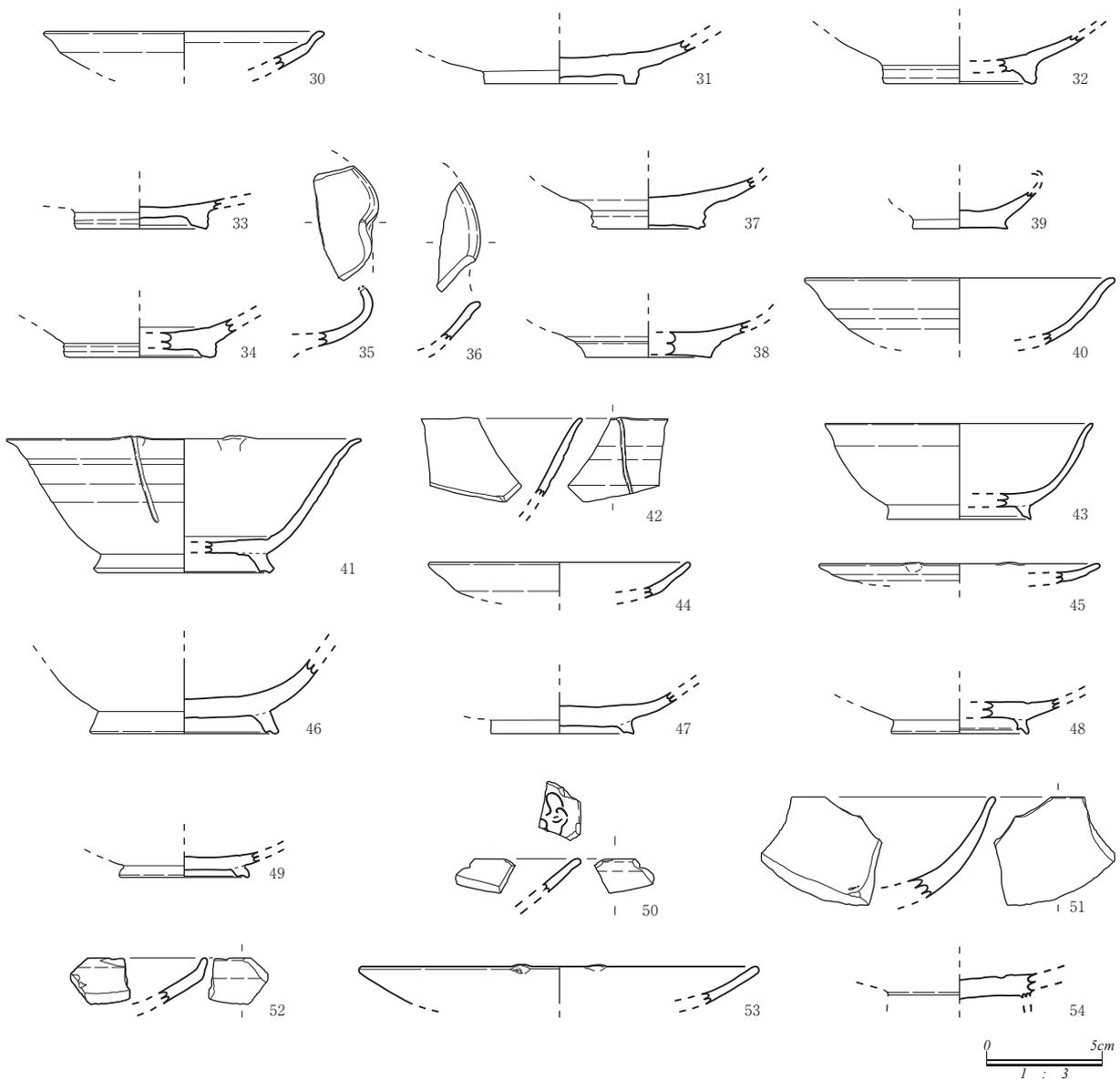
彩陶器は2個体出土し、器壁が厚いもの(図2-1)と薄いもの(図2-2)がみられる。高台は削り出しの円盤高台であり、透明釉が高台外面まで内外面ともに全面に施釉されている。口縁端部内面には、透明釉の上から濃緑色の釉が垂れ流すように掛けられている。図2-2は口縁部外面中程に濃緑色の斑点が一部確認できる。胎土は白色を呈する軟質胎土である。いずれもSD65から出土し、9世紀前半の京都産と考えられる。陰刻花文皿は6区SD57から出土し、内面に花文が描かれ、口縁部中程から端部に向かって花文が開いている。釉は内外面ともに施釉され、釉が土中の影響を受けて銀化しているため、濃い深緑色を呈している。胎土は精良で、硬質であり、焼成は堅緻である。9世紀後半の東海産と考えられる。白釉緑彩陶器は愛媛県内初事例であり、陰刻花文の緑釉陶器は、松山市祝谷本村遺跡で9世紀後半に位置付けられる京都産の陰刻花文碗が出土しているが、東海産の陰刻花文皿は県内初事例である。袋物(壺か瓶)(図2-10、11)は2点確認でき、いずれも9世紀前半の京都産である。耳皿(図2-9、13、図3-35～39)は9世紀前半～10世紀前半にかけてみられる。その他にも、碗や皿のなかには口縁部に輪花をもつ輪花碗や輪花皿もあり、東海産の輪花皿(図3-53)が1点出土している。

201点出土した緑釉陶器のうち、最も多くみられる産地は京都産である。173点確認でき、全体



1、2 白釉緑彩陶器 3~11 京都産(9世紀前半) 12~18 京都産(9世紀中頃) 19~22 京都産(9世紀後半) 23~29 京都産(10世紀前半)

図2 別名端谷I遺跡2次調査出土緑釉陶器その1



30～34 京都産(10世紀前半) 35～40 京都産(9世紀後半～10世紀前半) 41～49 近江産 50～54 東海産

図3 別名端谷I遺跡2次調査出土緑釉陶器その2

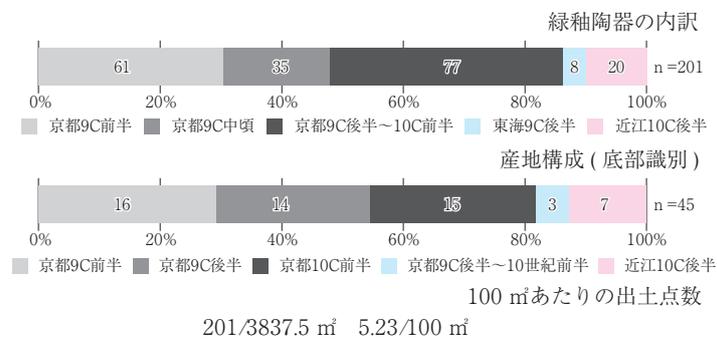


図4 別名端谷I遺跡2次調査で出土した緑釉陶器の概要

(別名端谷I遺跡2次調査の分析は、高橋照彦氏の御教示のもと現在整理作業中の数値である。今後未整理のものを含め増加する可能性があり、時期や産地に関しても多少増減する可能性がある。)

の出土量の86%を占める。次に近江産20点、東海産8点と続く。京都産のうち、9世紀前半は61点、9世紀中頃は35点、9世紀後半～10世紀前半は77点確認でき、近江産はいずれも10世紀後半、東海産はすべて9世紀後半ごろに位置付けられる。京都産緑釉陶器のうち、時期の判断がしやすい底部をみると、円盤高台未調整は5点、削り出し円盤高台は23点、削り出し蛇の目高台は5点、削り出し輪高台は16点みられ、焼成度合いや胎土も勘案すると、9世紀前半は16点、9世紀後半は14点、10世紀前半は15点認められる。

2 愛媛県における緑釉陶器

(1) 愛媛県内の緑釉陶器研究と課題

愛媛県の緑釉陶器研究の現状

愛媛県内の緑釉陶器研究は、県内出土資料の資料集成を中心に行われてきた。宮内慎一氏は愛知県陶磁美術館によって行われた集成(25遺跡を集成)を参考に(愛知県陶磁美術館編1998)、2000年以前に緑釉陶器が出土している松山市内の遺跡(14遺跡)では、松山市来住廃寺を含む来住台地周辺で全体の半数となる7遺跡確認されていることを指摘した(宮内1998)。小黒裕二氏と橋本貴登氏は、愛媛県内でも有数の施釉陶器の出土量を誇る今治市阿方春岡遺跡の整理作業を契機に、県内の施釉陶器が出土した遺跡の集成(33遺跡を集成)を試みた。施釉陶器は松山平野と今治平野の2地域に集中し、出土点数に限れば今治平野が突出していることを指摘し、古代においては今治平野が政治・経済の中心であったことを証明する結果と論じた(小黒・橋本2003)。その後、池尻伸吾氏は旗屋遺跡Ⅱで出土した灰釉陶器長頸瓶の出土を契機に、県内の施釉陶器の出土状況を集成(62遺跡72地点を集成)し、器種別の保有状況に着目して整理し直した(池尻2018)。

課題と目的

これまでの愛媛県内の緑釉陶器研究は集成を中心に行われてきた。集成以外では、池尻氏によって器種別の保有状況が示されたのみであり、愛媛県内の緑釉陶器研究は低調であるといえる。そのため、別名端谷Ⅰ遺跡2次調査で出土した緑釉陶器の評価を試みるには、県内の緑釉陶器の出土状況を把握し、それらの器種や産地、時期を考証する必要がある。

よって、別名端谷Ⅰ遺跡2次調査で出土した緑釉陶器の評価をするために、以下の分析を行う。まず、緑釉陶器が出土している愛媛県内の遺跡を再度集成し、器種別の点数を把握する。次に、出土した緑釉陶器を時期別に整理し、各遺跡の消長を時期別の出土点数とともに示し、緑釉陶器の産地ごとの出土点数についても分析する。さらに、100㎡あたりの出土点数から愛媛県内の緑釉陶器が出土する遺跡の性格などについて検討する。

(2) 愛媛県内出土の緑釉陶器

緑釉陶器出土遺跡の分布

愛媛県内では、緑釉陶器は86遺跡98地点で出土している(図5)。報告書に実測図として掲載されていないが、未報告資料として緑釉陶器の出土点数が記載されている点数および筆者が資料調査で行った際に確認した未報告資料の点数を合わせると、合計697点出土している²⁾。

緑釉陶器が出土した遺跡の分布をみると、従来から指摘されているように、松山平野と今治平野に集中している。今治平野では、伊予国分寺周辺(16～19)、蒼社川右岸域(20～24)、日高丘陵東麓(25～31)、近見丘陵南部(32～35)、松山平野では和気・堀江周辺(42～46)、道後城北～石手川右岸(48～54、56)、石手川左岸(57～61)、南江戸(62～69)、石井～北井門(72～76)、来住台地(77～81)で分布のまとまりがみられる。出土点数は今治平野が圧倒的に多く、国府有力推定地の一つである今治市八町遺跡・同市八町1号遺跡では、未報告資料も含め204点出土している。また、瀬戸内海交通の要衝である来島海峡に面した今治市糸大谷遺跡では100点、官人層の居宅の可能性が想定されている今治市阿方春岡遺跡では56点出土している。一方、松山平野では、10点以上出土している遺跡は平田七反地遺跡、樽味四反地遺跡、旗屋遺跡Ⅱしかなく、ほとんどの遺跡は3点未満である。

器種別の保有点数(図6)

器種別にみても、椀と皿の出土が圧倒的に多く、小椀、小杯、耳皿、壺、瓶は非常に少ない。耳皿は箸台と指摘され(伊藤2023)、儀式・儀礼の場で使用された器種である。耳皿は今治平野を中心に確認でき、その他の地域では松山平野で2点出土している。官的施設の中でも中心的な官衙関連遺跡や寺院関連施設で認められる。袋物(壺か瓶)は、愛媛県内の灰釉陶器長頸瓶の例になるが、池尻氏によると、灰釉陶器長頸瓶を保有する遺跡は、各郡の主要な官的施設や寺院関連施設を中心に認められるという(池尻2018)。緑釉陶器の壺や瓶が出土している遺跡は、別名寺谷Ⅰ遺跡や八町遺跡のように直接的に官衙関連の性格が指摘されている遺跡や官衙関連施設の周辺域とみられる遺跡で認められるため、灰釉陶器長頸瓶の出土と同様のことが指摘できる。しかしながら、その出土量は灰釉陶器長頸瓶よりも少ない。

時期別にみた緑釉陶器(図7・8)

愛媛県内では、9世紀～10世紀に位置付けられる緑釉陶器が出土しており、9世紀前半は19点、9世紀後半は143点、10世紀前半は157点、10世紀後半は55点確認できる。9世紀前半はその他の時期と比べると、出土数が非常に少ないなか、今治平野を中心に出土している。その中でも蒼社川右岸域の八町・四村地域や伊予国分寺周辺域では出土数がやや多い。9世紀後半では、緑釉陶器の出土数及び出土遺跡数が前時期よりも飛躍的に増加し、今治平野だけでなく、松山平野や今治平野を除いた東予地域でも認められる。しかしながら、緑釉陶器を多数保有しているのは今治平野に所在する遺跡であり、八町1号遺跡2次調査地点では20点、阿方春岡遺跡では15点みられる。その他の地域では、松山市樽味四反地遺跡5次調査地点と同市平田七反地遺跡で5点確認できる以外は1～2点ほどしか出土していない。10世紀前半は、出土数は前時期より若干増加しているが、出土遺跡数は減少している。今治平野では、前時期に緑釉陶器が出土していた遺跡では10世紀前半も出土数がほぼ同数もしくは増加している事例が多い。一方、松山平野では、10世紀前半の緑釉陶器が出土している遺跡および出土数は前時期よりも減少し、9世紀後半～10世紀前半にかけて緑釉陶器を保有している遺跡が少なくなる。つまり、今治平野では9世紀後半～10世紀前半にかけて緑釉陶器を保持し続ける遺跡が多いのに対し、松山平野では9世紀後半に緑釉陶器を保有していた遺跡は、一部の遺跡しか10世紀前半頃の緑釉陶器を入手できないことが伺える。松山平

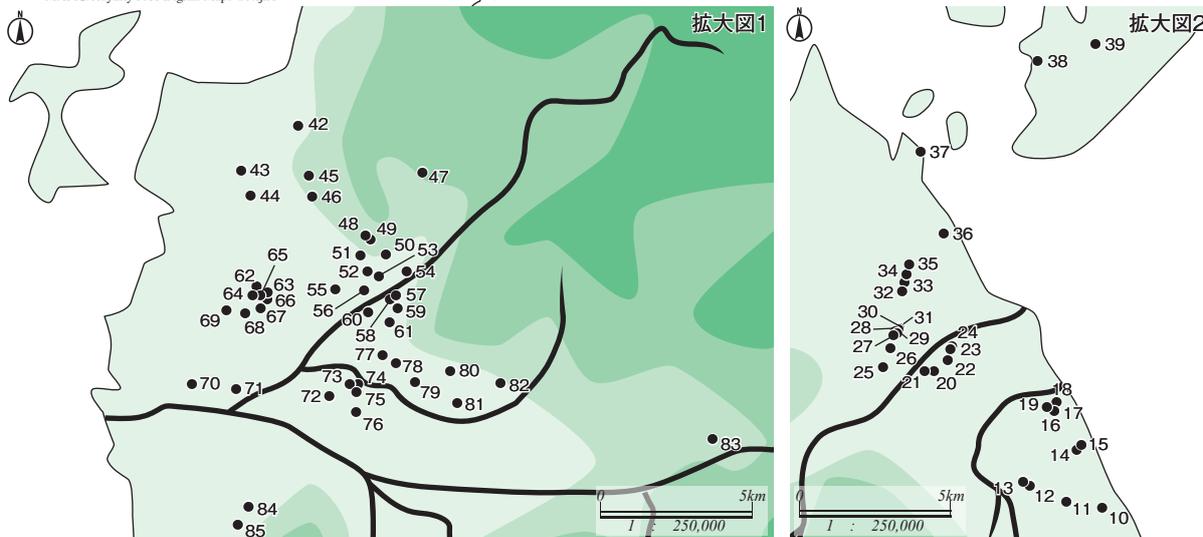
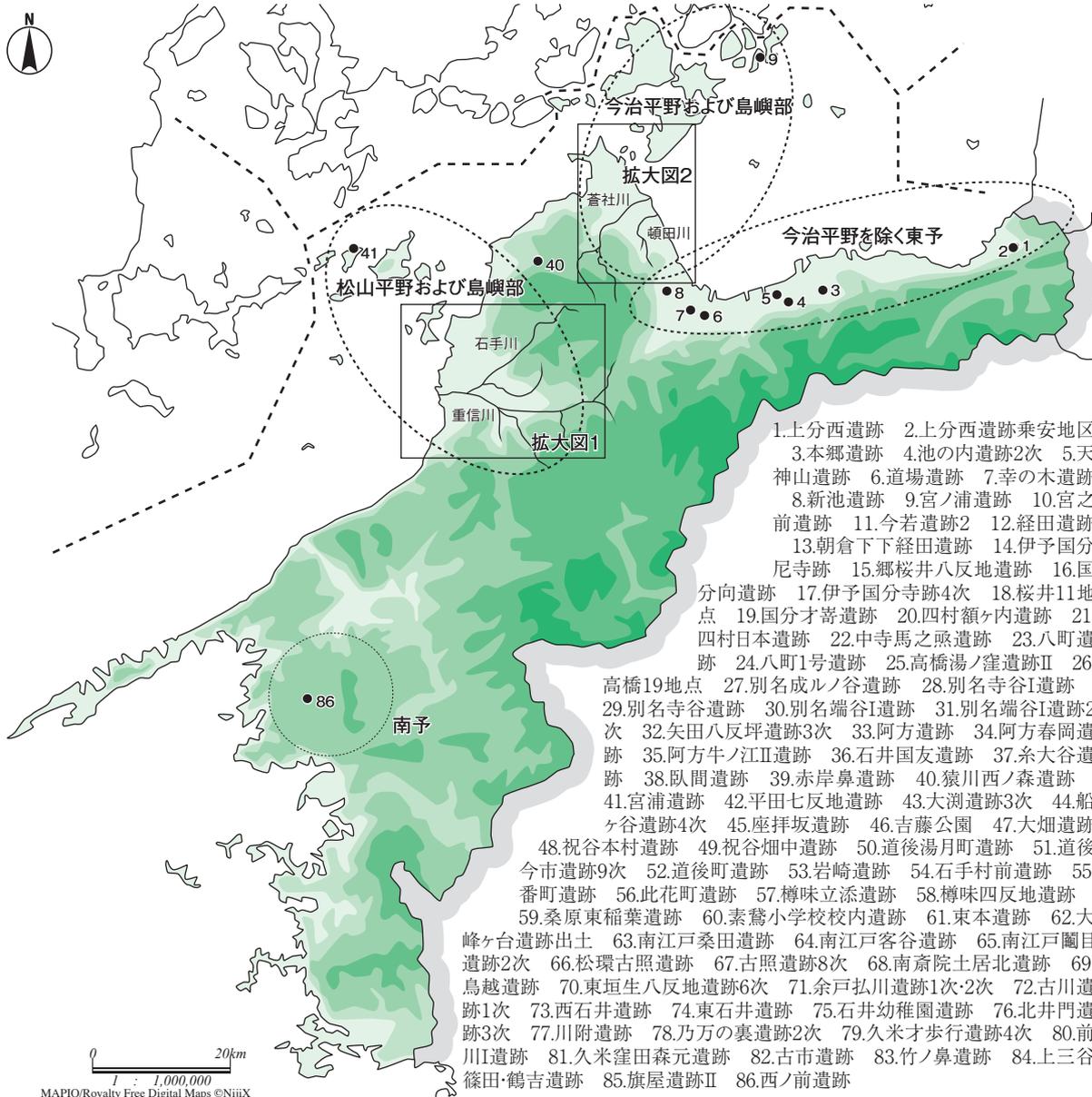


図5 緑釉陶器出土遺跡

番号	遺跡名	碗	小碗	小杯	皿	耳皿	碗か皿	壺	瓶	不明	未報告	合計	番号	遺跡名	碗	小碗	小杯	皿	耳皿	碗か皿	壺	瓶	不明	未報告	合計
1	上分西遺跡	1										1	48	祝谷本村遺跡				1							1
2	上分西遺跡乗安地区	1										1	49	祝谷畑中遺跡	2										2
3	本郷遺跡	4			2						1	7	50	道後湯月町遺跡				1							1
3	本郷遺跡3次	1										1	51	道後今市遺跡9次		1									1
4	池の内遺跡2次	1										1	52	道後町遺跡			1								1
5	天神山遺跡	2			1							3	53	道後町遺跡Ⅱ											3
6	道場遺跡	2										2	54	岩崎遺跡	7			1		1					9
7	幸の木遺跡	9			1							10	55	石手村前遺跡										5	5
8	新池遺跡				1							1	56	番町遺跡	2										2
9	宮ノ浦遺跡	9	1		7							17	57	此花町遺跡	3									1	4
10	宮之前遺跡	1										1	58	樽味立添遺跡4次	1										1
11	今若遺跡2	3			3						5	11	59	樽味四反地遺跡	3										3
12	経田遺跡	1										1	60	樽味四反地遺跡5次	3		2		5						10
13	朝倉下下経田遺跡	3										3	61	樽味四反地遺跡6次					1						1
14	伊予国分尼寺遺跡	2			1		3					6	62	樽味四反地遺跡10次	1										1
15	郷桜井八反地遺跡	1			1							2	63	樽味四反地遺跡12次	1										1
16	国分向遺跡	1			1						5	7	64	樽味四反地遺跡15次					3						3
17	伊予国分寺跡4次	6			2							8	65	樽味四反地遺跡19次	1					1					2
18	桜井11地点	1				1						2	66	樽味四反地遺跡20次	1										1
19	国分才壽遺跡	1										1	67	桑原東稲葉遺跡1次調査										1	1
20	四村額ヶ内遺跡	11			1						4	16	68	桑原東稲葉遺跡2次調査	2										2
21	四村日本遺跡		1		1						1	3	69	素鷲小学校校内遺跡						1					1
22	中寺馬之吸遺跡	1			3			1			5	6	70	東本遺跡6次	2										2
23	八町遺跡	2			1						48	51	62	大峰ヶ台丘陵客谷地区	1										1
24	八町1号遺跡2次	11			4	2	25				62	104	63	南江戸桑田遺跡					1	1					2
24	八町1号遺跡3次	7			6						22	35	64	南江戸客谷遺跡				1							1
24	八町1号遺跡4次	2			1						11	14	65	南江戸蘭目遺跡2次	1										1
25	高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ	1									1	66	66	松環古照遺跡									1		1
26	日高19地点						1				1	67	67	吉照遺跡8次	1										1
27	別名成ルノ谷遺跡	1									1	68	68	南斎院土居北遺跡							1				1
28	別名寺谷Ⅰ遺跡	6			15	2			1		24	69	69	鳥越遺跡			1								1
29	別名寺谷遺跡	6									6	70	70	東短生八反地遺跡6次	2										2
30	別名端谷Ⅰ遺跡					1					1	71	71	余戸弘川遺跡1・2次										1	1
31	別名端谷Ⅱ遺跡2次											72	72	古川遺跡1次				3							3
32	矢田八反坪遺跡3次	1									1	73	73	西石井遺跡	1			1							2
33	阿方遺跡						1				1	74	74	東石井遺跡				1							1
34	阿方春岡遺跡	26			3	1					26	56	75	石井幼稚園遺跡	1			1	1						3
35	阿方牛ノ江Ⅱ遺跡							1			5	6	76	北井門遺跡3次	2			1							3
36	石井国友遺跡	8			3		3				14	77	77	川附遺跡	1	1									2
37	糸大谷遺跡	27	1		18	1	14				39	100	78	乃万の裏遺跡2次						2					2
38	臥間遺跡	2									3	5	79	79	久米才歩行遺跡4次	1									1
39	赤岸鼻遺跡	1									1	80	80	前川Ⅰ遺跡				1							1
40	猿川西ノ森遺跡	1			1						2	81	81	久米窪田森元遺跡3次	3								1		4
41	宮浦遺跡	6			2		1				9	82	82	久米窪田森元遺跡4次	4										4
42	平田七反地遺跡	15			2		7				24	82	83	古市遺跡1次	1										1
43	大洞遺跡3次	2									2	83	83	竹ノ鼻遺跡	1					1					2
44	船ヶ谷遺跡4次					1					1	84	84	上三谷篠田・鶴吉遺跡	1										1
45	座拝坂遺跡	1			1						2	85	85	旗屋遺跡Ⅱ	2										2
46	吉藤公園							2			2	86	86	西ノ前遺跡	2										2
47	大畑遺跡	1									1	1	総計	243	5	1	97	10	73	4	1	2		261	697

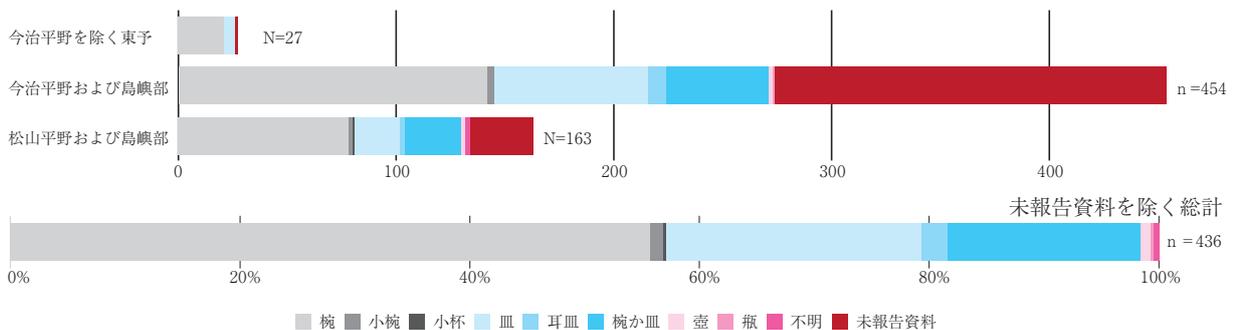


図6 緑釉陶器種別出土点数および割合

野では9世紀後半と10世紀前半において、一部の遺跡を除き、緑釉陶器を入手できる階層や勢力に何らかの変化があった可能性が想定される。緑釉陶器の出土数や遺跡数だけでなく、保有のあり方に関して、今治平野と松山平野では地域差が存在していることが指摘でき、この地域差の要因として、今治平野に国府が所在していたことが考えられる。今治市糸大谷遺跡ではこの時期の緑釉陶器が40点出土しており、他の遺跡よりも出土数が多い。10世紀後半は、緑釉陶器の出土数および遺跡数はともに前時期よりも減少している。しかしながら、今治平野では前時期と変わら

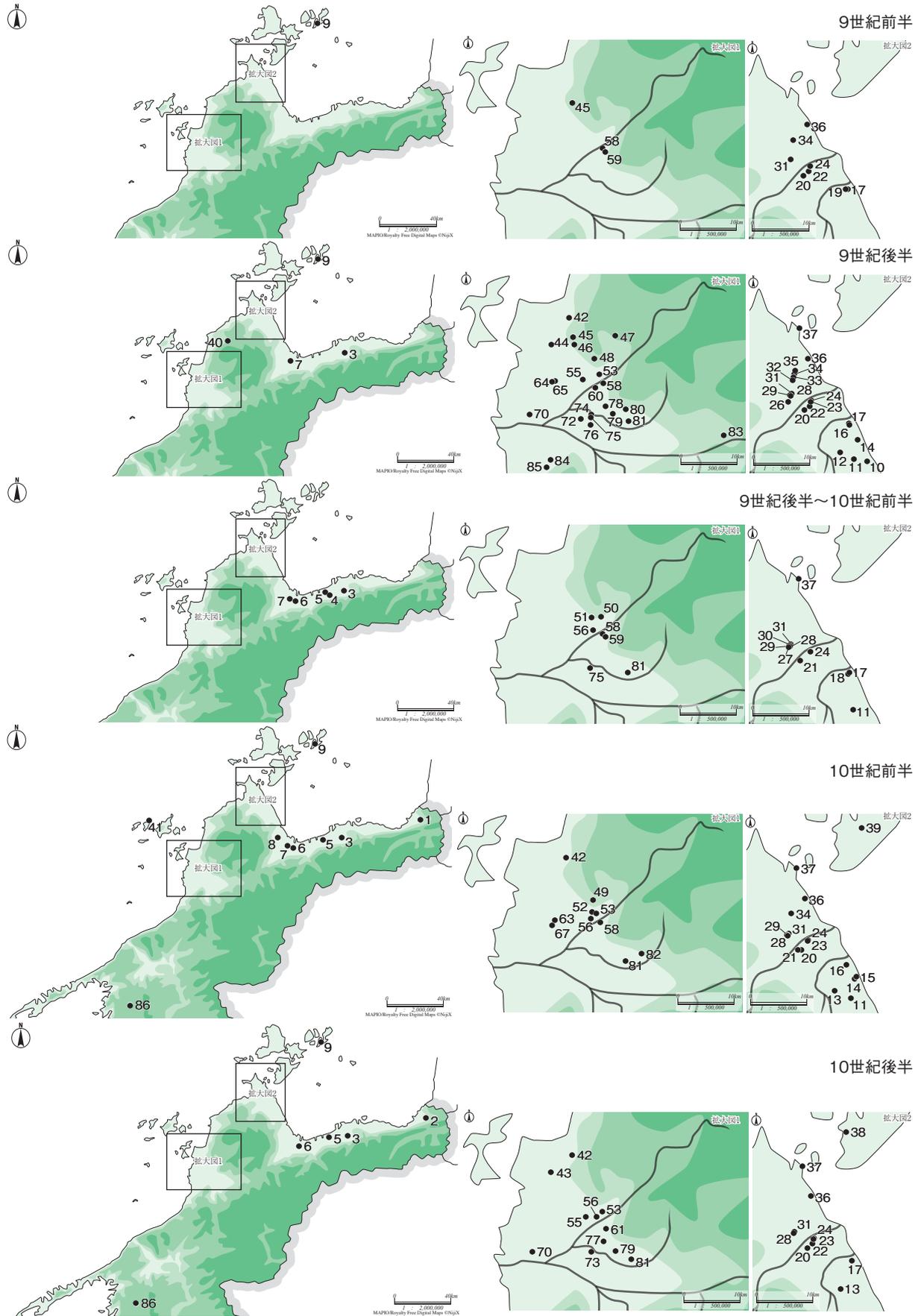


図7 緑釉陶器出土遺跡時期別分布図

番号	遺跡名	9C前半	9C後半	9C	9C後半～10C前半	10C前半	10C後半	10C	不明	番号	遺跡名	9C前半	9C後半	9C	9C後半～10C前半	10C前半	10C後半	10C	不明
1	上分西遺跡					1				48	祝谷本村遺跡		1						
2	上分西遺跡乗安地区						1			49	祝谷畑中遺跡						2		
3	本郷遺跡		1		1	3	1			50	道後湯月町遺跡				1				
	本郷遺跡3次		1							51	道後今市遺跡9次				1				
4	池の内遺跡2次				1					52	道後町遺跡					1			
5	天神山遺跡				1	1	1				53	岩崎遺跡		3			4	2	
6	道場遺跡				1	1	1			54	石手村前遺跡								
7	幸の木遺跡		1		5	4				55	香町遺跡		1						1
8	新池遺跡					1				56	此花町遺跡				1	1	1		
9	宮ノ浦遺跡	1	1			5	10			57	梅味立遺跡4次		1						
10	宮之前遺跡		1								梅味四反地遺跡		2			1			
11	今若遺跡2		1		1	4					梅味四反地遺跡5次	1	5	1	1	2			
12	経田遺跡		1								梅味四反地遺跡6次		1						
13	朝倉下下経田遺跡					2	1				梅味四反地遺跡10次					1			
14	伊予国分尼寺遺跡		4			1		1		58	梅味四反地遺跡12次					1			
15	郷桜井八反地遺跡					1			1		梅味四反地遺跡15次		1				2		
16	国分向遺跡			1		1					梅味四反地遺跡19次					2			
17	伊予国分寺跡4次	2	4		1		1				梅味四反地遺跡20次					1			
18	桜井11地点				1		1			59	桑原東稲葉遺跡1次調査					1			
19	国分才寄遺跡	1									桑原東稲葉遺跡2次調査	1							
20	四村額ヶ内遺跡	2	3			5	1		1	60	素鷲小学校校内遺跡		1						
21	四村日本遺跡				1	1				61	束本遺跡6次							2	
22	中寺馬之廬遺跡	1	2	1			1			62	大峰ヶ台丘陵客谷地区								1
23	八町遺跡		1			1	2			63	南江戸桑田遺跡					1			1
	八町1号遺跡2次	5	20		3	6	10			64	南江戸客谷遺跡		1						
24	八町1号遺跡3次		6			4	3			65	南江戸圃日遺跡2次		1						
	八町1号遺跡4次		1		1	1				66	松環古照遺跡								1
25	高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ		1							67	古照遺跡8次						1		
26	日高19地点		1							68	南斎院土居北遺跡				1				
27	別名成ルノ谷遺跡				1					69	鳥越遺跡				1				
28	別名寺谷Ⅰ遺跡		8		5	10				70	東垣生八反地遺跡6次		1					1	
29	別名寺谷遺跡		1		1	3	1			71	奈戸弘川遺跡1・2次								
30	別名彌谷Ⅰ遺跡				1					72	古川遺跡1次		3						
31	別名彌谷Ⅱ遺跡2次									73	西石井遺跡								2
32	矢田八反坪遺跡3次		1							74	東石井遺跡		1						
33	阿方遺跡		1							75	石井幼稚園遺跡		1			2			
34	阿方春岡遺跡	2	15			13				76	北井門遺跡3次		3						
35	阿方牛ノ江Ⅱ遺跡		1							77	川附遺跡							1	1
36	石井国友遺跡	2	8	1		1	2			78	乃方の裏遺跡2次		2						
37	糸大谷遺跡		10		2	40	5		4	79	久米才歩行遺跡4次								1
38	臥間遺跡						2			80	前川Ⅰ遺跡		1						
39	赤岸鼻遺跡					1				81	久米窪田森元遺跡3次		1		2				1
40	猿川西ノ森遺跡		2								久米窪田森元遺跡4次					2	1		1
41	宮浦遺跡			4		1			4	82	吉市遺跡1次						1		
42	平田七反地遺跡		5			14	4		1	83	竹ノ鼻遺跡		2						
43	大瀨遺跡3次						2			84	上三谷篠田・鶴吉遺跡		1						
44	船ヶ谷遺跡4次		1							85	旗屋遺跡Ⅱ		2						
45	座拝坂遺跡		1	1						86	西ノ前遺跡						1	1	
46	吉藤公園		2								総計	19	143	9	36	151	62	1	16
47	大畑遺跡		1																

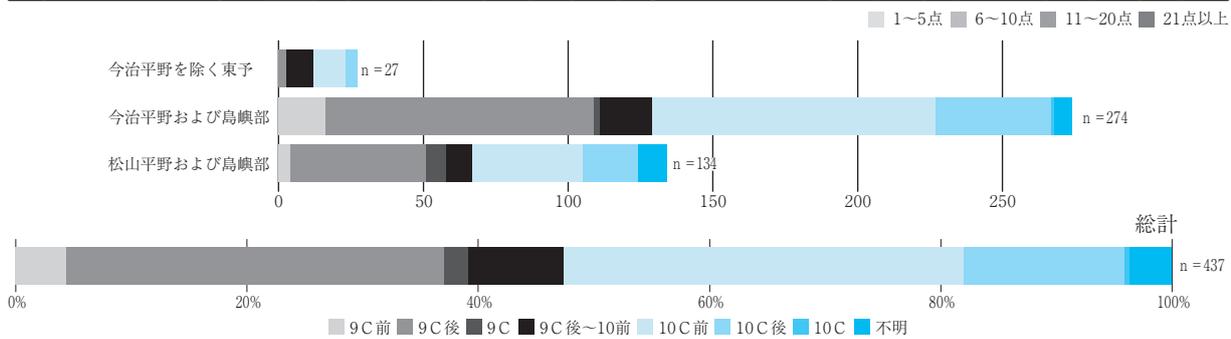


図8 緑釉陶器時期別出土点数と割合

ず緑釉陶器の出土量が他の地域よりも多いという特徴がある。その他の地域では、松山市平田七反地遺跡の4点を除き、1～2点ほどしか出土していない。

産地別からみた緑釉陶器(図9)

平安期の緑釉陶器生産地は、平安京近郊(以下では京都とする)、東海、近江、防長の4地域がある。愛媛県では、これらのうち京都産355点、東海産4点、近江産63点、防長産1点を確認できる。京都産が84%占めているが、時期別にみると9世紀～10世紀前半は京都産が中心であり、一

部東海産がみられ、10世紀後半は近江産が主体を占める。これは、高橋照彦氏が指摘するように、西日本は畿内産(京都産)が多数を占め、10世紀中頃には近江産が急速に生産量を増すことにより、西日本地域では畿内産に替わって近江産が主体を占めるといふ生産地の動向やその供給先を反映しており(高橋1995a)、伊予も西日本地域と同様の傾向を示している。注目されるのは防長産緑釉陶器の出土であり、防長産緑釉陶器は長門・周防周辺域や太宰府を中心とする北部九州地域を中心に供給され、生産地から東に目を向けると、平安京や国府推定地でしか出土していない。伊予では、島嶼部に所在する宮ノ浦遺跡で1点出土しているが、国府有力推定地の一つである八町遺跡をはじめ、伊予本土では1点も確認できない。

100㎡あたりの緑釉陶器の出土点数(表1)

これまでの分析では、出土点数を扱ってきた。単純なことではあるが、発掘調査面積が広いほど出土遺物は増加する傾向があり、調査面積が広くて緑釉陶器の出土が多い遺跡と面積が狭くて緑釉陶器の出土が多い遺跡では、遺跡の性格や調査地点の性格などを踏まえて検討する必要がある。高橋氏は平安京や地方の100㎡あたりにおける緑釉陶器の出土点数を分析し(図10)、地方では国府周辺に緑釉陶器が集中して出土する傾向があり、国府周辺を結節点として、高級陶器の流通や保有がなされていたことを想定した。そして、国府域でも、地区によって出土量の多寡に差異が生じるため、出土地点差などを考慮する必要があり、官衙遺跡といっても郡衙一般での保有量は必ずしも突出していないことを指摘した(高橋2015)。

番号	遺跡名	京都	東海	近江	防長	不明	番号	遺跡名	京都	東海	近江	防長	不明
1	上分西遺跡	1					48	祝谷本村遺跡	1				
2	上分西遺跡乗安地区			1			49	祝谷畑中遺跡	2				
3	本郷遺跡	5		1			50	道後湯月町遺跡	1				
4	本郷遺跡3次	1					51	道後今市遺跡9次	1				
5	池の内遺跡2次	1					52	道後町遺跡	1				
6	天神山遺跡	2		1			53	道後町遺跡II					
7	道場遺跡	2		1			54	岩崎遺跡	7		2		
8	幸の木遺跡	10					55	石手村前遺跡					
9	新池遺跡	1					56	番町遺跡	1		1		
10	宮ノ浦遺跡	7		9	1		57	此花町遺跡	2		1		
11	宮ノ浦遺跡	1					58	樽味立添遺跡4次	1				
12	今若遺跡2	6						樽味四反地遺跡	3				
13	経田遺跡	1						樽味四反地遺跡5次	10				
14	朝倉下下経田遺跡	2		1				樽味四反地遺跡6次	1				
15	伊予国分寺遺跡	5				1		樽味四反地遺跡10次	1				
16	郷桜井八反地遺跡	1				1		樽味四反地遺跡12次	1				
17	国分向遺跡	1	1					樽味四反地遺跡15次	3				
18	伊予国分寺跡4次	7		1				樽味四反地遺跡19次	2				
19	桜井11地点	1		1				樽味四反地遺跡20次	1				
20	国分才寄遺跡	1					59	桑原東稲葉遺跡1次調査					
21	四村額ヶ内遺跡	9		2		1		桑原東稲葉遺跡2次調査	2				
22	四村日本遺跡	2					60	素碓小学校校内遺跡	1				
23	中寺馬之頭遺跡	3	1	1			61	東本遺跡6次			2		
24	八町遺跡	2		2			62	大峰ヶ台丘陵客谷地区					1
25	八町1号遺跡2次	31	2	8			63	南江戸桑田遺跡	1				1
26	八町1号遺跡3次	10		3			64	南江戸客谷遺跡	1				
27	八町1号遺跡4次	3					65	南江戸蘭目遺跡2次	1				
28	高橋海ノ窪遺跡II	1					66	松環古照遺跡					1
29	日高19地点	1					67	古照遺跡8次	1				
30	別名成ルノ谷遺跡	1					68	南斎院土居北遺跡	1				
31	別名寺谷I遺跡	24					69	鳥越遺跡	1				
32	別名寺谷遺跡	5		1			70	東垣生八反地遺跡6次	1		1		
33	別名端谷I遺跡	1					71	余戸弘川遺跡1・2次					
34	別名端谷I遺跡2次	1					72	吉川遺跡1次	3				
35	矢田八反坪遺跡3次	1					73	西石井遺跡			2		
36	阿方遺跡	1					74	東石井遺跡	1				
37	阿方春岡遺跡	30					75	石井幼稚園遺跡	3				
38	阿方牛ノ江II遺跡	1					76	北井門遺跡3次	3				
39	石井国友遺跡	11		3			77	川附遺跡			1		1
40	糸大谷遺跡	55		5	4		78	乃方の裏遺跡2次	2				
41	臥間遺跡	1		2			79	久米才歩行遺跡4次			1		
42	赤岸鼻遺跡	1					80	前川I遺跡	1				
43	猿川西ノ森遺跡	2					81	久米窪田森元遺跡3次	3		1		
44	宮浦遺跡	5				4	82	久米窪田森元遺跡4次	2		1		1
45	平田七反地遺跡	19		4	1		83	古市遺跡1次	1				
46	大淵遺跡3次			2			84	竹ノ鼻遺跡	2				
47	船ヶ谷遺跡4次	1					85	上三谷篠田・鶴吉遺跡	1				
48	座拝坂遺跡	2					86	旗屋遺跡II	2				
49	吉藤公園	2						西ノ前遺跡	1		1		
50	大畑遺跡	1						総計	355	4	63	1	17

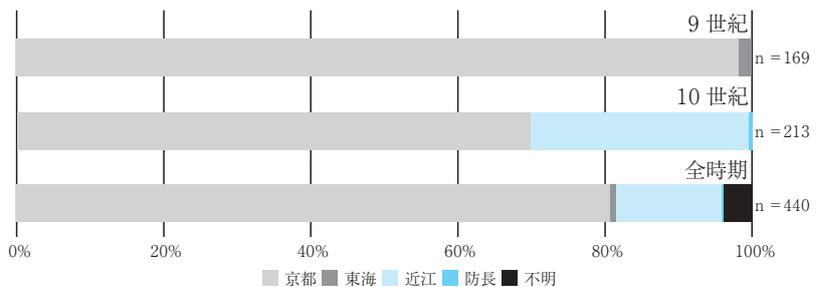


図9 緑釉陶器産地別出土点数と割合

表1 100㎡あたりの緑釉陶器の出土点数

番号	遺跡名	出土 点数	調査面積 (㎡)	100㎡あたりの 出土点数(点/㎡)	番号	遺跡名	出土 点数	調査面積 (㎡)	100㎡あたりの 出土点数(点/㎡)
1	上分西遺跡	1	15990	0.01	48	祝谷本村遺跡	1		
2	上分西遺跡乗安地区	1	14199	0.01	49	祝谷畑中遺跡	2		
3	本郷遺跡	7	360	1.95	50	道後湯月町遺跡	1	177.2	0.57
4	本郷遺跡3次	1	1780	0.06	51	道後今市遺跡9次	1	652.6	0.16
5	池の内遺跡2次	1	12914	0.01	52	道後町遺跡	1	3450	0.03
6	天神山遺跡	3	10500	0.03	53	道後町遺跡Ⅱ			
7	道場遺跡	2	1455.5	0.14	54	岩崎遺跡	9	13000	0.07
8	幸の木遺跡	10	10800	0.1	55	石手村前遺跡	5	340	1.48
9	新池遺跡	1	1300	0.08	56	番町遺跡	2	1017.5	0.2
10	宮ノ浦遺跡	17	454.7	3.74	57	此花町遺跡	4	751.715	0.54
11	宮ノ前遺跡	1	1100	0.1	58	樽味立添遺跡4次	1	174	0.58
12	今若遺跡2	11	3325.8	0.04	59	樽味四反地遺跡	3	1500	0.2
13	経田遺跡	11	38792	0.01	60	樽味四反地遺跡5次	10	2146	0.47
14	朝倉下下経田遺跡	3	37322	0.01	61	樽味四反地遺跡6次	1	999	0.11
15	伊予国分寺遺跡	6	1059	0.57	62	樽味四反地遺跡10次	1	120	0.84
16	郷桜井八反地遺跡	2	1000	0.2	63	樽味四反地遺跡12次	1	201	0.5
17	国分向遺跡	7	755	0.93	64	樽味四反地遺跡15次	3	220	1.37
18	伊予国分寺跡4次	8	446	1.8	65	樽味四反地遺跡19次	2	290	0.69
19	桜井11地点	2	1093	0.19	66	樽味四反地遺跡20次	1	143	0.7
20	国分才寄遺跡	1	27	3.71	67	桑原東稲葉遺跡1次調査	1	188	0.54
21	四村額ヶ内遺跡	16	700	2.29	68	桑原東稲葉遺跡2次調査	2	619	0.33
22	四村日本遺跡	3	500	0.6	69	素養小学校校内遺跡	1	1200	0.09
23	中寺馬之塚遺跡	5	600	0.84	70	東本遺跡6次	2	328	0.61
24	八町遺跡	51	6590	0.78	71	大峰ヶ台丘陵客谷地区	1		
25	八町1号遺跡2次	104	1432	7.27	72	南江戸桑田遺跡	2	1900	0.11
26	八町1号遺跡3次	35	500	7	73	南江戸客谷遺跡	1	864	0.12
27	八町1号遺跡4次	14	282	4.97	74	南江戸蘭目遺跡2次	1	3550	0.03
28	高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ	1	849	0.12	75	松環古照遺跡	1	16100	0.01
29	日高19地点	1	423	0.24	76	古照遺跡8次	1	3920	0.03
30	別名成ルノ谷遺跡	1	1200	0.09	77	南斎院土居北遺跡	1	2886	0.04
31	別名寺谷Ⅰ遺跡	24	6440	0.38	78	鳥越遺跡	1	983.88	0.11
32	別名寺谷Ⅱ遺跡	6	194.67	3.09	79	東垣生八反地遺跡6次	2	124.22	1.62
33	別名彌谷Ⅰ遺跡	1	3060	0.04	80	余戸弘川遺跡1・2次	1	4130	0.03
34	別名彌谷Ⅱ遺跡2次				81	古川遺跡1次	3	307.28	0.98
35	矢田八反坪遺跡3次	1	3200	0.04	82	西石井遺跡	2	5799.7	0.04
36	阿方遺跡	1	2000	0.05	83	東石井遺跡	1	4800	0.03
37	阿方春岡遺跡	56	3200	1.75	84	石井幼稚園遺跡	3	430	0.7
38	阿方牛ノ江Ⅱ遺跡	6	11600	0.06	85	北井門遺跡3次	3	9898	0.04
39	石井国友遺跡	14	1080	1.3	86	川附遺跡	2	495	0.41
40	糸大谷遺跡	100	10060	0.99	87	乃万の裏遺跡2次	2	2475	0.09
41	臥間遺跡	5	3000	0.17	88	久米才歩行遺跡4次	1	1095	0.1
42	赤岸鼻遺跡	1	560	0.18	89	前川Ⅰ遺跡	1	1200	0.09
43	猿川西ノ森遺跡	2	9700	0.03	90	久米窪田森元遺跡3次	4	902	0.45
44	宮浦遺跡	9	500	1.8	91	久米窪田森元遺跡4次	4	1330.01	0.31
45	平田七反地遺跡	24	6400	0.38	92	吉市遺跡1次	1	2910	0.04
46	大洞遺跡3次	2	3415.9	0.01	93	竹ノ鼻遺跡	2	7000	0.03
47	船ヶ谷遺跡4次	1	2881	0.04	94	上三谷篠田・鶴吉遺跡	1	2261.9	0.01
48	座拝坂遺跡	2	995	0.21	95	旗屋遺跡Ⅱ	23	1050	2.2
49	吉藤公園	2	800	0.25	96	西ノ前遺跡	2	109.5	1.83
50	大畑遺跡	1	1027	0.1					

0.1未満 0.1～0.5未満 0.5～1.0未満 1.0～3.0未満 3.0～5.0未満 5.0以上 調査面積が不明な遺跡は空白

以上～3.0点未満出土している遺跡は新居浜市本郷遺跡、伊予国分寺跡、四村額ヶ内遺跡、阿方春岡遺跡、石井国友遺跡(以上今治市)、宮浦遺跡、石手村前遺跡、樽味四反地遺跡、東垣生八反地遺跡(以上松山市)、伊予市旗屋遺跡Ⅱ、西予市西ノ前遺跡がある。樽味四反地遺跡と東垣生八反地遺跡は、数次に伴う発掘調査が行われているため、これらの調査面積を踏まえると数値は1.0以下になると思われ、西ノ前遺跡と宮ノ浦遺跡は愛媛大学による学術調査が行われた遺跡であり、発掘調査面積が狭いことから数値が大きくなっていることが想定される。しかしながら、宮ノ浦遺跡は数値が小さくなったとしても、1.0点を下回ることはないと考えられる。宮ノ浦遺跡は、1158(保元3)年に石清水八幡宮の荘園として取り込まれた遺跡であり、古代後半から畿内系黒色土器A類・B類、越州窯系青磁などが出土しており、特に畿内地域と何らかの強い影響関係が伺える遺跡である。西ノ前遺跡も周辺に岩城郷の中心的な施設や岩城廃寺の存在が指摘されている遺跡である。本郷遺跡は、周辺に南海道の新居駅や新居郡衙があったと推定されている。

このように、緑釉陶器が100㎡あたり1.0点以上出土している遺跡は、寺院周辺や国府有力推定

高橋氏の検討を踏まえてみていくと、100㎡あたり緑釉陶器が5.0点以上出土している遺跡は、今治市八町1号遺跡しかなく、本遺跡では7.0点前後出土している。これは、八町1号遺跡が所在する八町地域は、近隣の四村地域とともに伊予国府の有力推定地の一つであることが考えられる。緑釉陶器の出土比率が高いことは、近隣に国府が所在していたとすれば、その存在を反映している可能性がある。100㎡あたり3.0点以上～5.0点未満出土している遺跡は、上島町宮ノ浦遺跡、今治市国分才寄遺跡、同市別名寺谷遺跡があり、1.0点

	遺跡名 (性格ほか)	緑釉陶器の出土 点数と調査面積	100㎡あたりの緑釉 陶器の出土点数		遺跡名 (性格ほか)	緑釉陶器の出土 点数と調査面積	100㎡あたりの緑釉 陶器の出土点数
平安京ならびに 周辺出土	平安京内裏 (SK25)	96点 / 45㎡	213.3点 / 100㎡	出雲国府跡出土	六所脇 (政庁)	20点 / 360㎡	5.6点 / 100㎡
	藤原良相邸 (西三条第)	52点 / 116㎡	44.8点 / 100㎡		宮の後 (曹司)	71点 / 4276㎡	1.7点 / 100㎡
	斎宮 (伊勢斎王) の邸宅	2187点 / 7556㎡	28.9点 / 100㎡		大舎原 (国司館)	36点 / 6008㎡	0.6点 / 100㎡
	左京二条四坊十町	278点 / 4000㎡	7点 / 100㎡		彼岸田 (工房など)	52点 / 1490㎡	3.5点 / 100㎡
	長岡京跡右京 第69次 (平安京外)	68点 / 800㎡	8.5点 / 100㎡		種ノ口ほか (外縁区域)	0点 / 594㎡	0点 / 100㎡
	長岡京跡右京 第349次 (平安京外)	44点 / 2650㎡	1.7点 / 100㎡				
				三田谷 I 遺跡出土	94・95年度調査区	3点 / 4000㎡	0.075点 / 100㎡
					96・97年度調査区	1点 / 14000㎡	0.007点 / 100㎡
					97・98年度調査区	5点 / 8950㎡	0.056点 / 100㎡

図 10 他地域の 100㎡あたりの緑釉陶器の出土点数 (高橋 2015 を筆者改変)

地、官衙関連遺跡でも、硯や灰釉陶器、越州窯系青磁などが出土し、識字階層や有力者の存在が想定される遺跡という特徴がある。100㎡あたりの出土点数では、0.1点未満の遺跡が最も多く、次に0.1点以上～0.5点未満が続く。これらの遺跡は緑釉陶器以外の出土遺物の分析や検出された遺構との関係性などから総合的に分析して遺跡の性格を推測する必要があり、これらの遺跡の性格については今後の課題としたい。

(3) 愛媛県内における別名端谷 I 遺跡2次調査の位置付け

愛媛県内と別名端谷 I 遺跡2次調査の出土状況を比較し、本遺跡の特徴を整理する。

出土点数では、愛媛県全体で緑釉陶器は未報告資料を含めて697点確認でき、一つの遺跡で最も出土しているのは八町1号遺跡2次の104点、次に糸大谷遺跡の100点、阿方春岡遺跡の56点、八町遺跡の51点と続き、緑釉陶器が50点以上出土している遺跡は4遺跡しかなく、大半の遺跡は10点未満である。別名端谷 I 遺跡2次調査では201点確認でき、一つの遺跡では愛媛県内最多の出土数を誇る(図11)。また、これまで伊予国府有力推定地であった、八町遺跡・八町1号遺跡で出土した合計点数と近い数である。

時期別の出土点数では、愛媛県全体では9世紀前半の資料数が非常に少なく、9世紀後半になると前時期よりも飛躍的に増加し、10世紀前半は前時期とほぼ同じ数量であり、10世紀後半には減少し、11世紀代のものはみられない。今治平野と松山平野では、緑釉陶器の保有状況に地域差が存在し、1遺跡のなかでも複数時期の緑釉陶器を一定量持ち続ける遺跡は少なく、ある特定の時期の緑釉陶器を多数保有し、その前後の時期のものを少数ながらも持ち続けている遺跡が多いことを指摘した。

別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した9世紀前半に位置付けられる緑釉陶器は61点確認され、愛媛県全体で19点しか出土していない状況と比較すると特異といえる。このことは、白釉緑彩陶器や袋物の出土、本稿では触れていないが、K14に位置付けられる灰釉陶器が10点以上出土していることも踏まえて検討する必要がある。

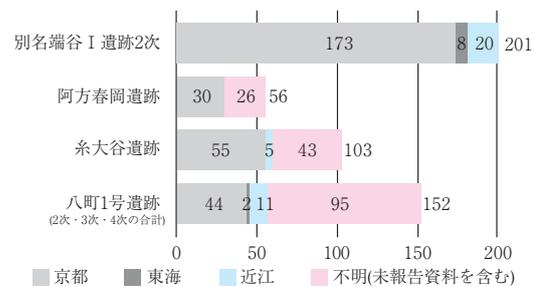


図 11 緑釉陶器出土主要遺跡の産地別数量

また、別名端谷 I 遺跡2次調査では9世紀後半と10世紀前半のそれぞれの時期の正確な点数を把握できていないが、9世紀～10世紀にかけて各時期ともに20点以上出土していることは明らかであり、9世紀～10世紀前半では、各時期ともに40点以上出土している。複数時期の緑釉陶器が出土している遺跡では、出土量のピークが9世紀後半もしくは10世紀前半であり、そのピークを境に出土量が激減する遺跡が多いのに対し、別名端谷 I 遺跡2次調査では、9世紀前半のものが多数出土し、その後10世紀前半にかけて40点以上保有し続け、10世紀後半に前時期よりも出土量が減るが、それでも20点以上入手し続けている。つまり、別名端谷 I 遺跡2次調査では、9世紀～10世紀を通していずれの時期も緑釉陶器を一定量保有し続けており、このような特徴をもつ遺跡は愛媛県内で本遺跡のみである。

産地別では、別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した緑釉陶器は、愛媛県全体の傾向と同じく、京都産が8割以上を占めている。また、時期ごとにみても9世紀代は京都産が主体であり、東海産は1割未満である。10世紀代は、10世紀前半は京都産が中心であり、10世紀後半になると京都産に代わって近江産が主体を占める。愛媛県全体で東海産は4点しか認められないなか、本遺跡では8点出土しているのは注目されるが、全体の1割にも達していない。

100㎡あたりの出土点数では、別名端谷 I 遺跡2次調査の調査面積は3837.5㎡であり、100㎡あたり5.23点出土している。この数字は八町1号遺跡2次の7.27点、八町1号遺跡3次調査の7.0点に次ぐ大きさであり、国府有力推定地の遺跡に近似した値である。また、別名端谷 I 遺跡2次調査で緑釉陶器が出土した場所は、大多数が3区から出土しており、3区周辺には何らかの官衙関連施設が存在していたことが想定される。

(3) 小結—緑釉陶器からみた別名端谷 I 遺跡2次調査—

以上、愛媛県内で緑釉陶器が出土した遺跡と別名端谷 I 遺跡2次調査の状況を比較した。本遺跡で出土した緑釉陶器の特徴として、以下のことが指摘できる。

①愛媛県内で最多の出土量を誇り、出土量が特定の時期に偏ることなく、9世紀～10世紀にかけていずれの時期も一定量保有し続け、多様な器種がみられる。

②特に9世紀前半に位置付けられる緑釉陶器が非常に多く、県内初事例となる白釉緑彩陶器や袋物(壺か瓶)の出土が示すように、本遺跡の当該期は県内の出土状況と比較しても特異な状況である。

③100㎡あたりの出土点数において、国府有力推定地の出土点数に次ぐ数値の大きさを示している。

3 土師質土器三足盤

(1) 別名端谷 I 遺跡2次調査出土の土師質土器三足盤の概要

別名端谷 I 遺跡2次調査出土の土師質土器三足盤

土師質土器三足盤は、合計16点出土している(図12、13)。出土している土師質土器三足盤は、いずれも破片資料であり、足のみもしくは底部に足が1本あるいは2本貼り付けられた個体が確認

される。これらの土器が三足付き土器の足である根拠は図12-1の資料である。図12-1は底部に足が2本貼り付けられ、底部中央から足2本の角度がおよそ120度であり、自立するためには残存しているそれぞれの足から120度の位置に足が付くことが想定され、底部に3本足が付く土器と判断した。3本足が付く土器は、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器に類例があり、その器種には盤と火舎がある。本遺跡の出土資料は、底部に足が3本付くものは存在せず、口縁部も残存していない。そのため、全体形を推測することが困難であり、足だけでは盤か火舎、どちらの器種なのか判別が難しい。しかしながら、盤と火舎では底径に大きな違いがある。本遺跡で底径が復元可能であったのは2点しかないが、その復元底径は7.0~7.8cmであり、この底径に近いのは盤である。よって、本遺跡で出土した土師質三足付き土器は、器種として「盤」の可能性が高い。土師質土器三足盤の部位・名称については図14の通りである。

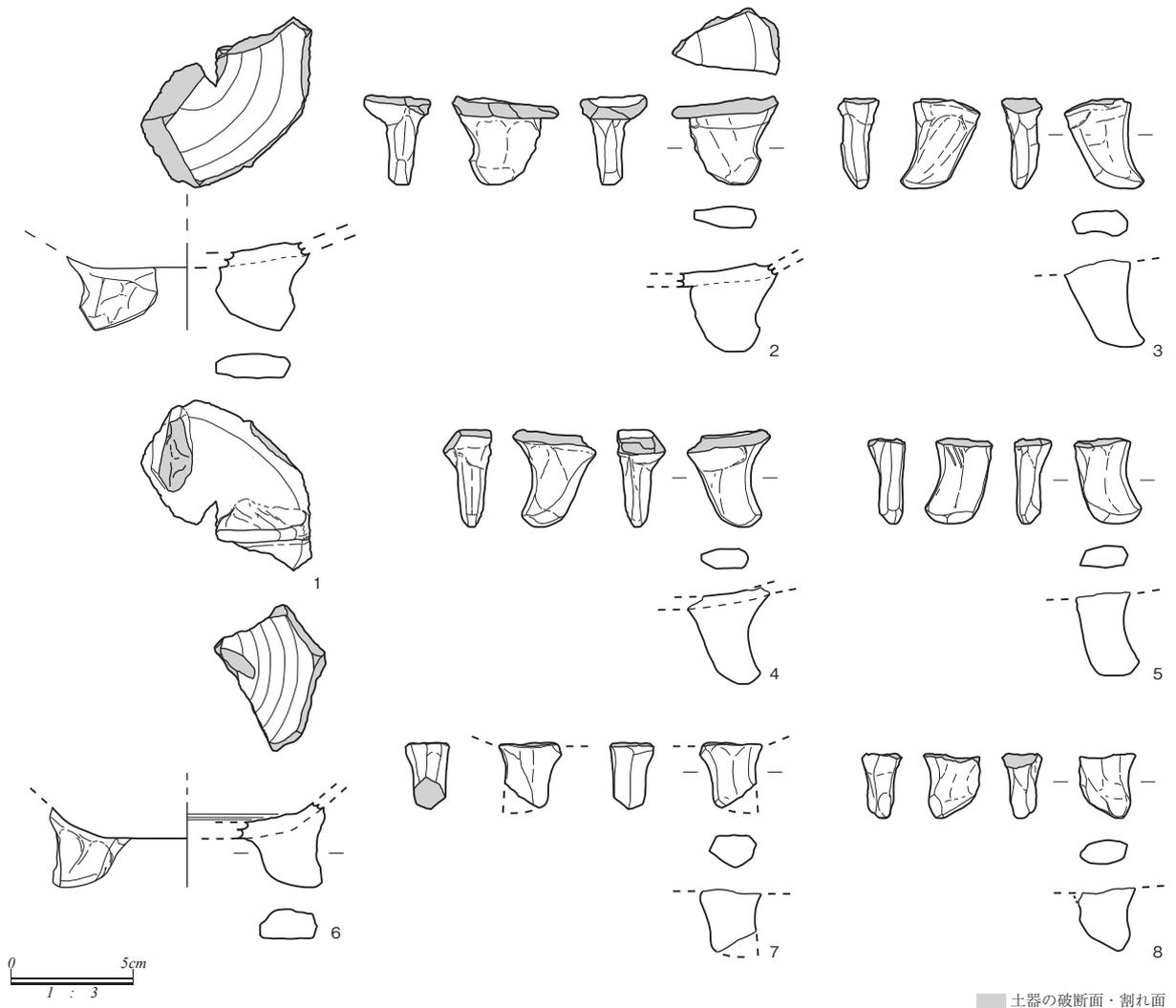


図12 別名端谷 I 遺跡 2 次出土土師質土器三足盤その 1

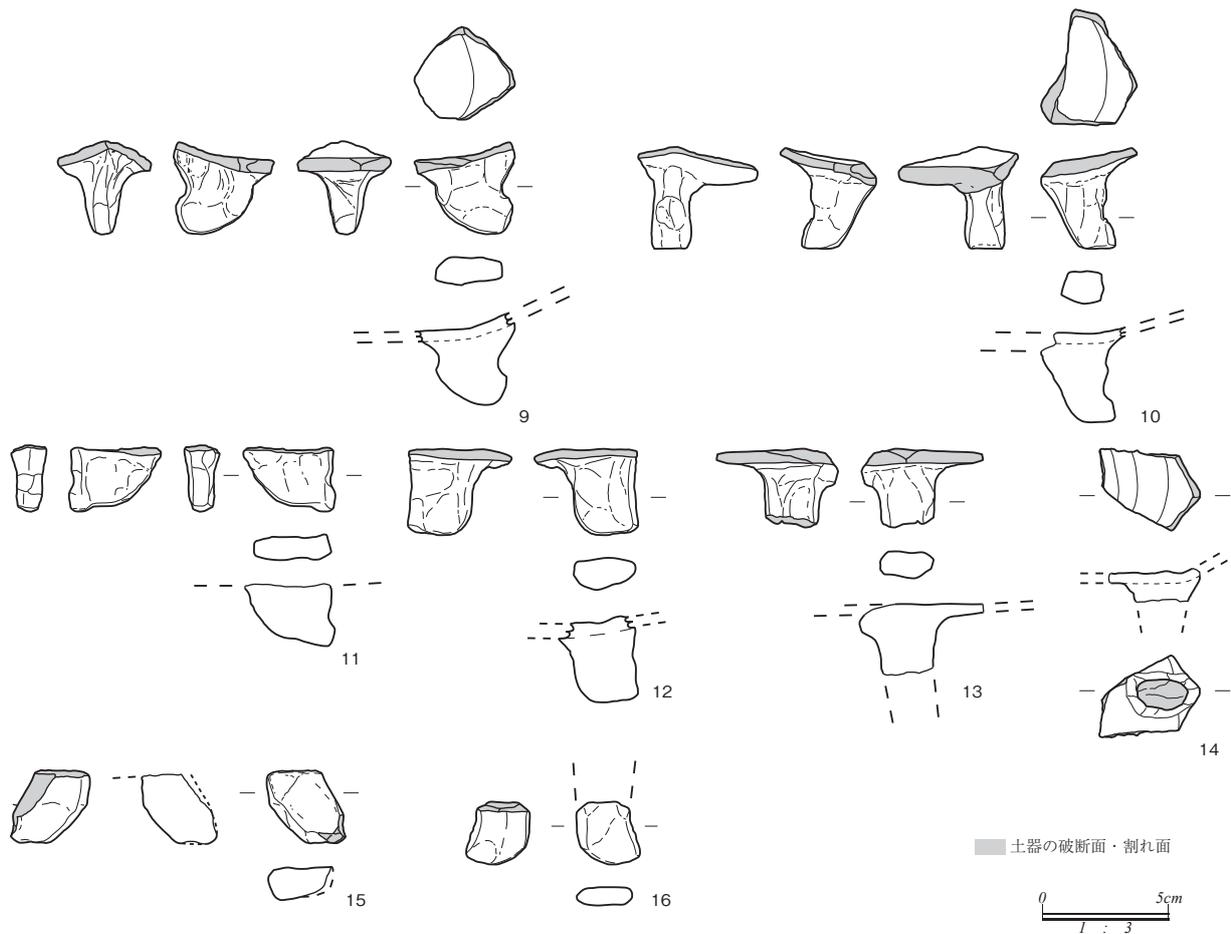


図13 別名端谷I遺跡2次出土土師質土器三足盤その2

(2) 土師質土器三足盤の特徴と時期

土師質土器三足盤の特徴

本遺跡の土師質土器三足盤について、次のような特徴が指摘できる。①杯部および皿部は見込みにロクロ目が観察され(1、2、14など)、一部には底部外面に切り離し時の回転ヘラ切り調整が確認でき、在地の土師質土器杯・皿の製作技法と同じ回転台調整で成形されている。②底部には足が丁寧に貼り付けられ、底部と脚

の付け根付近には左右両側面から前面にかけて丁寧な横位を基調としたやや強いナデ調整、足の左右両側面は縦位を中心とした非常に丁寧なナデ調整が施される。③足の前面や背面には平坦な面がみられるため、何らかの工具による丁寧な面取りがされている。前面は面が一つであるのに対し、背面には面が二つみられるものが主体であり、背面の凹部は基本的に2面の面取りが施される。そして、足の断面形態は前面・背面に角を有した長形を呈した多角形(五角形)の形態が多い。④足の全体形はナデ調整などによって背面に凹みと凸部が作り出され、猫足状を呈してい

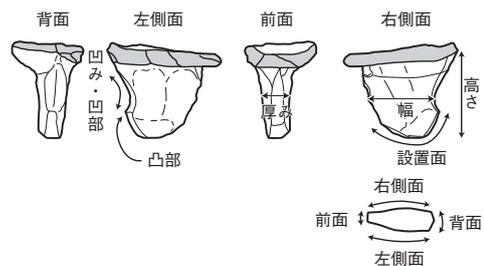


図14 土師質土器三足盤の部位名称

る。⑤胎土は1mm前後の長石を多く含み、どちらかといえばやや粗い印象を受け、色調は橙色を呈する。

足の形態は大きく4種類に分けられる。A：足の幅が広く、足の高さが高く、背面の凸部が背面中位ほどに位置する形態(1、2、6、9)、B：足の幅が狭く、足の高さが高く、背面の凸部が下位に位置する形態(3、4、5、10)、C：足の幅が狭く、足の高さがやや低く、背面の凸部が下位に位置する形態(7、8、11、12)、D：面取りやナデ調整がやや粗雑であり、足の幅が狭く、高さも低く、背面の凸部が不明瞭な形態(15、16)。

足の形態が時期差を表しているとするならば、A→B→C→Dへの変化が想定される。

土師質土器三足盤の時期

土師質土器三足盤は別名端谷 I 遺跡2次調査の3区でしか出土しておらず、その他の調査区では確認されていない。13はP1057、1～11、14、15は包含層、12、16はSD71から出土している。土師質土器三足盤の多くは包含層出土資料であり、包含層とSD71では9世紀～10世紀に位置付けられる緑釉陶器や灰釉陶器が出土している。P1057は年代が推定可能な遺物がみられないため、明確な時期を指摘できない。

以上より、土師質土器三足盤の時期は9世紀～10世紀ごろの年代が想定される。

(3) 土師質土器三足盤に関する若干の考察

土師質土器三足盤の模倣対象

「盤」は、大きな平たい器や大きな皿、皿状のものを指し、皿の底部に3本の脚がついたものは三足盤と呼称されることが多い。三足付き土器の類例でも提示したように、本遺跡で出土した土師質土器三足盤は、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器の三足盤を模倣したと考えられる。これらの三足盤は、独自に成立したものではなく、金属器由来の器形である(愛知県陶磁美術館学芸課編2022)。つまり、土師質土器三足盤は、金属器の三足盤を模倣した緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器三足盤をさらに模倣して成立したことが想定される(図15)。

土師質土器三足盤の製作集団

この土器を製作した集団は、模倣対象物である緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器のいずれかを実際に見ながら模倣した可能性がある。本遺跡で出土した土師質土器三足盤の特徴として、両側面、前面、背面ともに非常に丁寧なナデ調整および何らかの工具を用いた面取りのようなナデ調

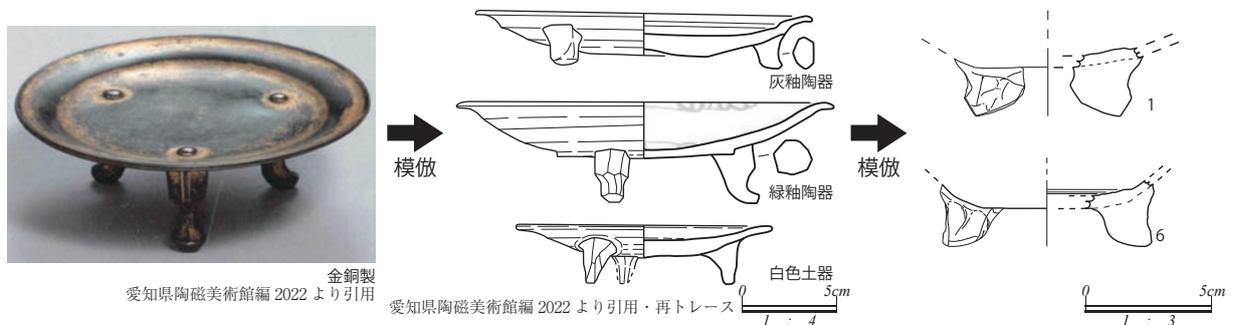


図15 土師質土器三足盤の模倣対象

整が施されていることを指摘した。古代後半の今治平野の在地土器は、主に回転ナデ調整を用いた手法で製作されており、何らかの工具を用いたナデ調整は甕のような大型の器種しかみられず、しかもこのようなナデ調整を施す甕はあまり出土しない。そして、面取りのようなナデ調整を施す、皿、杯、椀のような小型器種はみられない。そのため、在地土器を製作する技術では、三足盤の脚部を丁寧につくることは困難であると想定され、何か模倣対象物を見ながら製作した可能性が考えられる。しかしながら、脚部をすべて面取りできていないこと、脚部の断面形が長形を呈する多角形であること、回転ナデ調整で整形し、切り離し時の回転ヘラ切り痕跡をナデ消していないことは、製作集団が模倣対象の器形をそっくりそのまま模倣することができていない点として現れている。

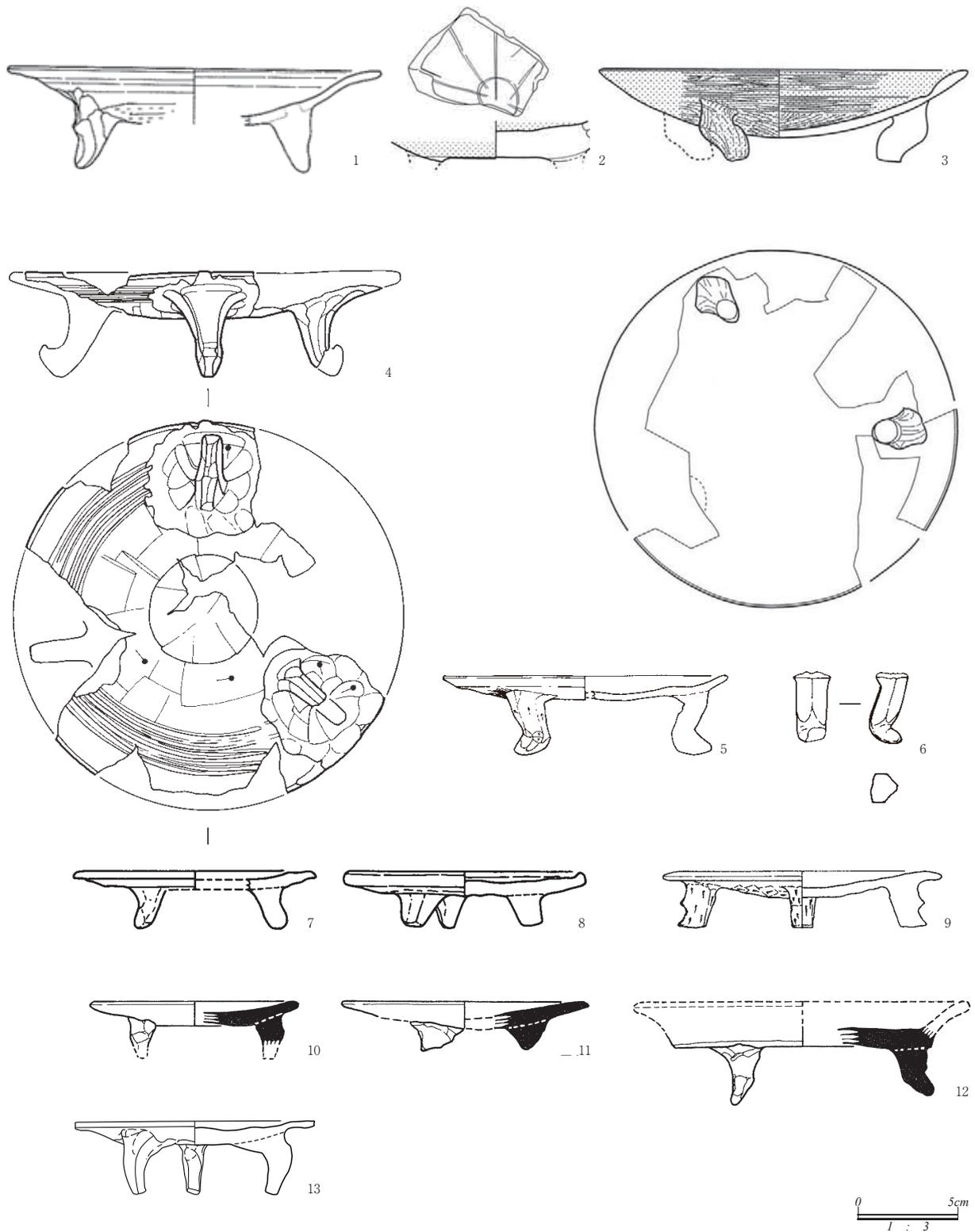
古代の模倣三足盤の類例

愛媛県内では、管見の限り古代の土師質土器三足盤の出土は確認できず、足付き土器そのものの出土例を認められない。12世紀～13世紀には八町1号遺跡2次(今治市)で三足付きの土器(図12-74、図26-397、図36-590)が出土しているが(中野編1995)、その形態は別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した例とは全く異なる。

全国的にみても、灰釉陶器や緑釉陶器、白色土器三足盤の出土事例自体少ないが、これらの器形を在地土器で模倣した例はさらに少ない(図16)³⁾。器形から、1、3、4は緑釉陶器か灰釉陶器三足盤を模倣しており、その他は白色土器三足盤を模倣していることが推測される。これらの三足盤は、ヘラ削りやナデ調整などによって脚が丁寧に成形され、脚の器形にはバリエーションがある。また、脚の断面形は基本的に正多角形に近い器形であり、それぞれの模倣対象に近似した形態を模倣している。これらの三足盤がみられる遺跡では、緑釉陶器や灰釉陶器、墨書土器などが多数認められ、帯金具や硯なども出土している特徴があり、官衙関連のなかでも中心的な官衙関連の性格が想定されている。

(4) 小結—別名端谷 I 遺跡2次調査の土師質土器三足盤—

三足盤は非常に特殊な土器であり、全国的にみても官衙関連の中心的な遺跡で出土している性格がある。また、出土点数も非常に少ないことから、日常使いの器ではなく、何らかの儀礼や儀式のために使用されていたことが想定される。土器を模倣するには、模倣対象となるAに価値を見だし、それを真似ることでその価値を再現しようとし、非意図的な要素はなく、対象Aの価値が社会集団に共有されている必要がある(柴田2021)。本遺跡では、11世紀の事例にはなるが、SD57において、土師質土器足高台椀と土師質土器杯・皿が多数廃棄された遺構が検出されている。この溝で出土したこれらの土器のなかには、底部穿孔された痕跡があるものや、一度土器を意図的に割ったのちにこの溝に廃棄されたものもみられ、この溝周辺で儀礼・儀式が行われたことが推測される。11世紀に行われていた儀式・儀礼は、施釉陶器が多数出土し、土師質土器三足盤が出土している時期である9世紀～10世紀まで遡る可能性がある。この儀式・儀礼がどういったものであったのか明らかにすることはできないが、本遺跡は官営工房の性格をもつ遺跡であることから、在庁官人や在地の官人層が関与していたと考えられる。



1. 山王遺跡(宮城県) 赤焼土器 2. 深堀遺跡(長野県) 土師器 3. 下曾根遺跡(長野県) 黒色土器 4. 西四ツ屋遺跡(長野県) 土師器 5,6. 史跡斎宮跡(三重県) 土師器 7,8. 長原・瓜破遺跡(大阪府) 土師器 9. 白水遺跡(兵庫県) 土師器 10~12. 玉津・田中遺跡(兵庫県) 土師器 13. 二本木遺跡(熊本県) 土師器

図 16 古代における緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器模倣の三足盤の類例

4 おわりに

別名端谷 I 遺跡の古代の評価をめぐる基礎的整理として、別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した緑釉陶器と土師質三足盤を取り上げた。緑釉陶器では愛媛県内の保有状況を整理し、別名端谷 I 遺跡で出土した緑釉陶器には、3点特徴がみられることを指摘した。土師質土器三足盤からは、本遺跡で儀式・儀礼が執り行われていた可能性について指摘した。別名端谷 I 遺跡は、在庁官人あるいは在地の官人層が主導した官営の鍛冶工房跡であり、国衙もしくは郡衙に付随する鍛冶工房跡と考えられていることから、今後の整理作業では、本稿で取り上げた遺物と遺構との関係や、その他の出土遺物の検討を通し、古代の別名端谷 I 遺跡の多様なあり方について明らかにしたい。

最後になりましたが、本稿を執筆するに当たり、高橋照彦先生には別名端谷 I 遺跡2次調査で出土した緑釉陶器だけでなく、愛媛県内で出土した緑釉陶器の産地や年代などについて多大な御指導、御教示を賜りました。また、以下の方々や調査機関には資料調査の便宜の他、多くの御指導や御教示を賜りました。記して感謝を申し上げます。(敬称略)

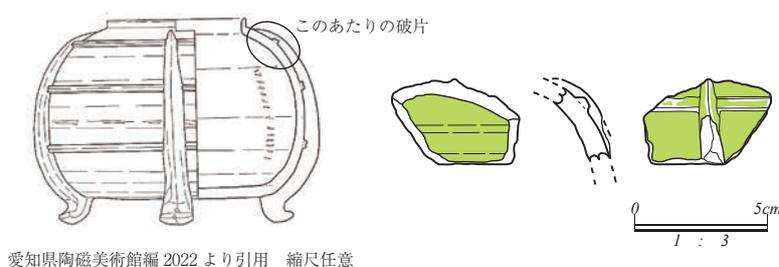
大塩啓一郎、岡島俊也、小野隼也、加治木智也、笹田朋孝、柴田圭子、菅波正人、首藤久士、富田尚夫、福本佳織、松葉竜司、村上恭通、持永壮志朗、三好裕之、山崎純男

今治市教育委員会、愛媛県教育委員会、愛媛県歴史文化博物館、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター、西条市教育委員会、松山市考古館

追記 資料紹介

今治市で資料調査を実施した際に、八町1号遺跡3次調査の未報告資料の中に緑釉陶器四足壺の破片を確認したため、紹介したい。

図17で図示しているのが八町1号遺跡3次調査のD-3 9層で出土した緑釉陶器四足壺の破片である。この破片は四足壺の体部(肩部)付近の破片である。外面には縦にのびる帯と横方向に巡る帯がみられる。胎土は精緻な白色胎土である。焼成は軟質であり、かつ良好である。内外面ともに淡黄緑色の釉が施釉されている。京都産と考えられ、9世紀頃とみられる。本稿でも示したように、これまで愛媛県では壺とみられる緑釉陶器は出土していたが、いずれも残存状況が良好でないため、壺のどのような器種か判断できない。そのため、四足壺としては、本稿で紹介した八町1号遺跡3次調査出土例が県内初事例である。



愛知県陶磁美術館編 2022 より引用 縮尺任意

図 17 八町 1 号遺跡 3 次調査未報告資料緑釉陶器四足壺 (右)

註

- *1 別名端谷 I 遺跡2次調査の内容は未報告であり、今後報告書が刊行される予定である。また、本遺跡で出土した緑釉陶器は未整理段階の報告になるため、今後の整理作業で出土点数はさらに増える可能性がある
- *2 報告書が刊行されていない資料や、報告書に緑釉陶器が出土している記載がない遺跡の未報告資料すべてを実見できていないため、実際には本報告で確認した点数よりも出土している。なお、本稿の図18～24および表2～7において、報告書で掲載されている緑釉陶器および筆者が資料調査した際に実測した未報告資料の一部を図示しており、それらを一覧表としてまとめている。また、図18～24の掲載番号は、(本稿での掲載番号、報告書での掲載番号)を表す。
- 報告書では緑釉陶器と掲載されているが、実見したところ緑釉陶器ではない土器が数点あったので報告する。伊予国分尼寺遺跡18は灰釉陶器であった。八町1号遺跡3次調査337は青磁であり、433は灰釉陶器であった。姫原遺跡153は在地の11世紀～12世紀代の土師器であった。船ヶ谷遺跡4次の1683は10世紀～11世紀代の在地の土師器であった。八町遺跡12は中世以降の陶磁器であった。
- *3 全国遺跡報告総覧で「三足盤」と検索して、管見の限り52遺跡で出土していることを確認した。全国遺跡報告総覧に掲載されていない報告書もあるため、実際には古代の三足盤が出土している遺跡は増加すると思われる。これらの遺跡では、灰釉陶器三足盤の報告例が多数を占めていた。

参考文献

- 愛知県陶磁美術館編1998『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁美術館
- 愛知県陶磁美術館編2022『平安のやきもの—その姿、うつろいゆく』愛知県陶磁美術館
- 青木聡志2021「愛媛県における古代～中世の土器編年—今治平野の9世紀から12世紀を中心に—」『紀要愛媛』第17号 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター pp.14-16
- 池尻伸吾2018「第4節 まとめ」『旗屋遺跡II 上三谷篠田・鶴吉遺跡 JR予讃線他埋蔵文化財調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書 第194集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター pp.46-56
- 伊藤正人2023「箸台ノート」『物質文化』103 物質文化研究会 pp.21-47
- 小黒裕二・橋本貴登2000「第10章考察」『阿方春岡遺跡 阿方牛ノ江遺跡 矢田八反坪遺跡 矢田大出口遺跡 矢田平山近世墓 矢田平山古墳 矢田平山遺跡 一般国道196 号今治北道路埋蔵文化財調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書 第88集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター pp.319-328
- 尾野善裕2003「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会 pp.20-37
- 熊本県教育委員会2010『二本木遺跡群Ⅲ』
- 神戸市教育委員会1999『白水遺跡 第4次』
- 神戸市教育委員会2000『玉津田中遺跡発掘調査報告書 第8・10・12・13・15次調査』
- 斎宮歴史博物館2010『史跡斎宮跡 平成20年度発掘調査概報』
- 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2007『別名端谷I遺跡・別名端谷II遺跡・別名成ルノ谷遺跡・別名寺谷I遺跡・別名寺谷II遺跡—今治新都市開発に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集—』
- 財団法人大阪市文化財協会1993『長原・瓜破遺跡発掘調査報告V』
- 佐久市教育委員会2001『上芝宮Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ、下曾根Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ』
- 佐久市教育委員会2002『深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』
- 柴田亮2021「九州北部の輸入陶磁器模倣瓦器椀～肥前西部地域を中心として～」『第39回中世土器研究会 輸入

- 陶磁器と国産土器・陶磁器-類似と模倣-』日本中世土器研究会 pp.13-24
- 高橋照彦1994「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集 国立歴史民俗博物館 pp.313-348
- 高橋照彦1995a「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 pp.257-278
- 高橋照彦1995b「平安期緑釉陶器の生産の展開と変質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集 国立歴史民俗博物館 pp.137-166
- 高橋照彦2003「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会 pp.5-19
- 高橋照彦2015「都と地方の土器」『官衙・集落と土器1—宮都・官衙と土器—』クバプロ pp.11-26
- 長野県埋蔵文化財センター2009『西四ツ屋遺跡 表町遺跡』
- 中野良一編1995『八町1号遺跡—2次調査区—』 今治市教育委員会
- 畑中英二2003「近江における緑釉陶器生産の様相」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』 古代の土器研究会 pp.64-72
- 宮城県教育委員会1996『山王遺跡Ⅲ』
- 宮内慎一1998「IX 古代の土器」『岩崎遺跡』松山市文化財調査報告書 第71集 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター pp.510-515

報告書

- 1.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2011『上分西遺跡・上分西遺跡乗安地区』
- 2.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2010『本郷遺跡』
- 3.財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2011『本郷遺跡3次・滝の宮遺跡』
- 4.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2009『池の内遺跡2次調査』
- 5.西条市教育委員会1993『天神山遺跡』
- 6.西条市教育委員会2022『道場遺跡 松ノ丁遺跡』
- 7.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『幸の木遺跡』
- 8.東予市教育委員会1999『新池遺跡・小池遺跡』
- 9.上島町教育委員会2016『宮ノ浦遺跡Ⅱ』
- 10.上島町教育委員会2018『宮ノ浦遺跡Ⅲ』
- 11.上島町教育委員会2019『宮ノ浦遺跡Ⅳ』
- 12.上島町教育委員会2022『宮ノ浦遺跡Ⅵ』
- 13.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『旦遺跡 宮之前遺跡 長沢石打遺跡 長沢1号墳 長沢6号 墳 二の谷2号墳 鉢又古墳群 郷桜井西塚古墳』
- 14.公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2016『今若遺跡2』
- 15.公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2014『経田遺跡』
- 16.公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2020『朝倉下下経田遺跡』
- 17.今治市教育委員会1999『伊予国分尼寺遺跡』
- 18.今治市教育委員会1994『郷桜井八反地遺跡』
- 19.財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2009『国分壺町地遺跡 国分向遺跡1次・2次』
- 20.今治市教育委員会『伊予国分寺跡確認調査』

- 21.今治市教育委員会1997『市内遺跡試掘確認調査報告書Ⅳ』
- 22.財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2012『国分才寄遺跡』
- 23.今治市教育委員会1997『四村額ヶ内遺跡』
- 24.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1998『四村日本遺跡』
- 25.今治市教育委員会1996『中寺馬之熊遺跡』
- 26.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1989『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 27.今治市教育委員会1995『八町1号遺跡—2次調査区—』
- 28.今治市教育委員会1998『八町1号遺跡—第3次調査—』
- 29.今治市教育委員会1998『八町1号遺跡—第4次調査—』
- 30.今治市教育委員会1999『高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ』
- 31.今治市教育委員会1998『市内遺跡試掘確認調査報告書Ⅵ』
- 32.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2007『別名端谷Ⅰ遺跡・別名端谷Ⅱ遺跡・別名成ルノ谷遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅱ遺跡』
- 33.今治市教育委員会2015『別名寺谷遺跡』
- 34.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2004『矢田八反坪遺跡3次』
- 35.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』
- 36.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡・矢田大出口遺跡・矢田平山近世墓・矢田平山古墳・矢田平山遺跡』
- 37.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2006『高地スゴ谷Ⅰ遺跡・高地栗谷4号墳・阿方牛ノ江Ⅰ遺跡・阿方牛ノ江Ⅱ遺跡・阿方牛ノ江Ⅲ遺跡・阿方牛ノ江Ⅳ遺跡』
- 38.今治市教育委員会1999『石井国友遺跡』
- 39.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1996『糸大谷遺跡』
- 40.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1998『火内遺跡・臥間遺跡』
- 41.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1984『赤岸鼻遺跡』
- 42.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2008『猿川西ノ森遺跡』
- 43.中島町教育委員会2002『愛媛県中島町宮浦遺跡発掘調査報告書』
- 44.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『道ヶ谷古墳 池の奥遺跡 平田七反地遺跡』
- 45.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2000『大淵遺跡—3次調査地—』
- 46.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2002『船ヶ谷遺跡—4次調査—』
- 47.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1993『和気・堀江の遺跡—座拝坂・金比羅山・船ヶ谷三ツ石古墳—』
- 48.公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター2014『松山市内遺跡詳細分布調査』
- 49.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『大畑遺跡』
- 50.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『土居窪遺跡2次 祝谷畑中遺跡 祝谷本村遺跡2次』
- 51.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2008『道後湯月町遺跡・道後湯ノ町遺跡』
- 52.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1994『道後城北遺跡群Ⅱ—道後今市9次・道後鷲谷・祝谷大地ヶ田—』
- 53.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『道後町遺跡-都市計画道路東一万道後(道後工区)線整備に伴う埋

蔵文化財調査報告書】

- 54.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『道後町遺跡Ⅱ』
- 55.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1998『岩崎遺跡』
- 56.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2012『石手村前遺跡2次・3次』
- 57.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2006『番町遺跡』
- 58.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2009『此花町遺跡』
- 59.松山市教育委員会・財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター2011『樽味立添遺跡4次調査・樽味高木遺跡15次調査』
- 60.財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1992『桑原地区の遺跡—樽味立添・樽味高木・樽味四反地・桑原西稲葉1・2次・桑原田中・経石山古墳・枝松3次—』
- 61.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2002『樽味四反地遺跡—5次調査—』
- 62.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2005『樽味四反地遺跡Ⅱ—6次調査—』
- 63.公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター2013『樽味高木遺跡10次調査・樽味四反地遺跡10次調査』
- 64.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2009『樽味四反地遺跡—12次・13次調査』
- 65.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2010『樽味四反地遺跡15次調査・樽味高木遺跡14次調査』
- 66.松山市教育委員会・財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター2011『樽味四反地遺跡—19次・20次調査』
- 67.公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター2016『桑原地区の遺跡Ⅴ—桑原6次・桑原東稲葉1次・桑原東稲葉2次・樽味高木16次・樽味高木17次・三町—』
- 68.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2009『蘇我小学校校内遺跡・拓南中学校校内遺跡・中村長正寺遺跡・小坂七ノ坪遺跡』
- 69.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2005『東本遺跡6次調査地・桑原遺跡2次調査地・桑原遺跡4次調査地』
- 70.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2006『大峰ヶ台遺跡Ⅲ—3次調査地・南江戸客谷—』
- 71.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1994『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—大峰ヶ台地区 南江戸桑田遺跡 辻遺跡 大峰ヶ台Ⅱ遺跡—』
- 72.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2004『南斎院土居北遺跡・南江戸蘭目遺跡(2次調査)』
- 73.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1993『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
- 74.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1996『古照遺跡—第8・9次調査—』
- 75.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2001『斎院の遺跡Ⅱ—鳥越・津田中学校校内・北斎院地内—』
- 76.財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター2022『東垣生八反地遺跡-6次調査』
- 77.公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2021『余戸弘川遺跡1・2次 余戸中の孝遺跡7次 余戸柳井田遺跡4・

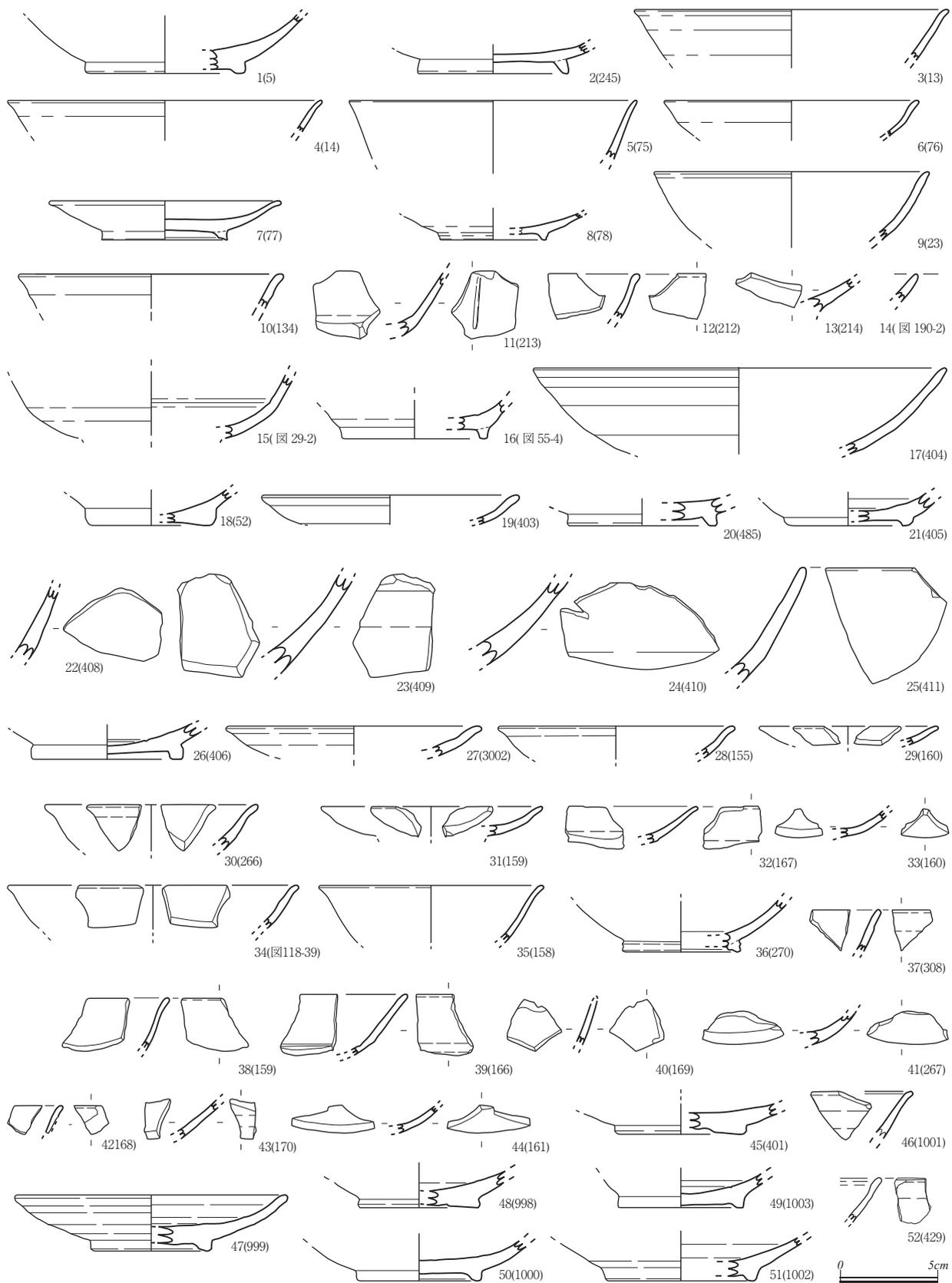
- 5次 余戸柳井田遺跡7次東垣生八反地遺跡2次 南吉田南代遺跡2次』
- 78.公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター2013『古川遺跡』
- 79.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2005『東石井遺跡・西石井遺跡』
- 80.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター栗田茂敏編1994『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡—第2次調査—』
- 81.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2013『北井門遺跡3次調査』
- 82.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1996『福音寺地区の遺跡—筋違C・D・E・F・I・川附—』
- 83.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1999『乃万の裏遺跡—2次調査地—』
- 84.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2005『来住・久米地区の遺跡VI—久米才歩行遺跡2次・久米才歩行遺跡4次・久米才歩行遺跡5次—』
- 85.愛媛県教育委員会文化課、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1981『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書I』
- 86.松山市教育委員会・公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター2013『来住町遺跡8次調査・来住町遺跡12次調査・久米窪田森元遺跡4次調査』
- 87.松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2000『古市遺跡・下苅屋遺跡2・3次』
- 88.財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1996『一般国道11号重信道路埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 89.公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2018『旗屋遺跡II 上三谷篠田・鶴吉遺跡』
- 90.西予市教育委員会2009『西ノ前遺跡・福吉窯跡発掘調査報告書』

図版出典

図1、4～9、11、14. 筆者作成 図2、3. 現在整理中の別名端谷I遺跡2次調査出土資料を筆者実測・撮影 図10. 高橋2015表1～3を一部改変 図12、13. 現在整理中の別名端谷I遺跡2次調査出土資料を筆者実測 図15. 愛知県陶磁美術館編2022p41、p95、p111を一部改変して使用・作成 図16. 1：宮城県教育委員会1996図50、2：佐久市教育委員会2002図132、3：佐久市教育委員会2001図42、4：長野県埋蔵文化財センター2009第14図、5・6：斎宮歴史博物館2010第Ⅲ-7図、7・8：財団法人大阪市文化財協会1993図164、9：神戸市教育委員会1999図33、10～12：神戸市教育委員会2000fig22、13：熊本県教育委員会2010第171図 図17. 愛知県陶磁美術館編2022p99を一部改変して使用、未報告資料は筆者実測 図18～24. 報告書から使用、一部を再トレース・改変、図18-11～16、27、図19-96、図21-201、205、208、211、212、215、図23-341、342、358～360、366～368、図24-383、416は筆者実測

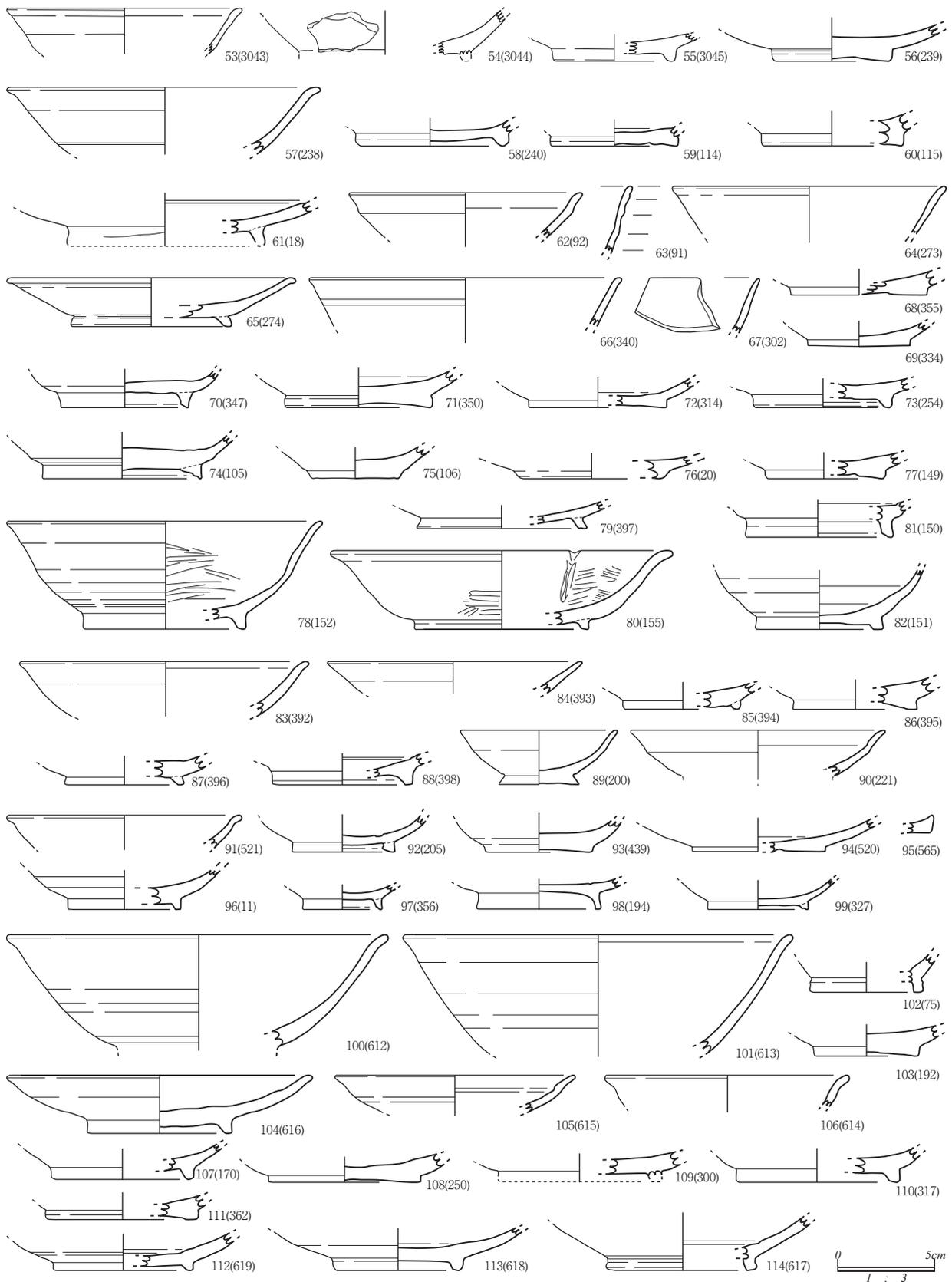
表1～7. 筆者作成

(2024年2月27日)



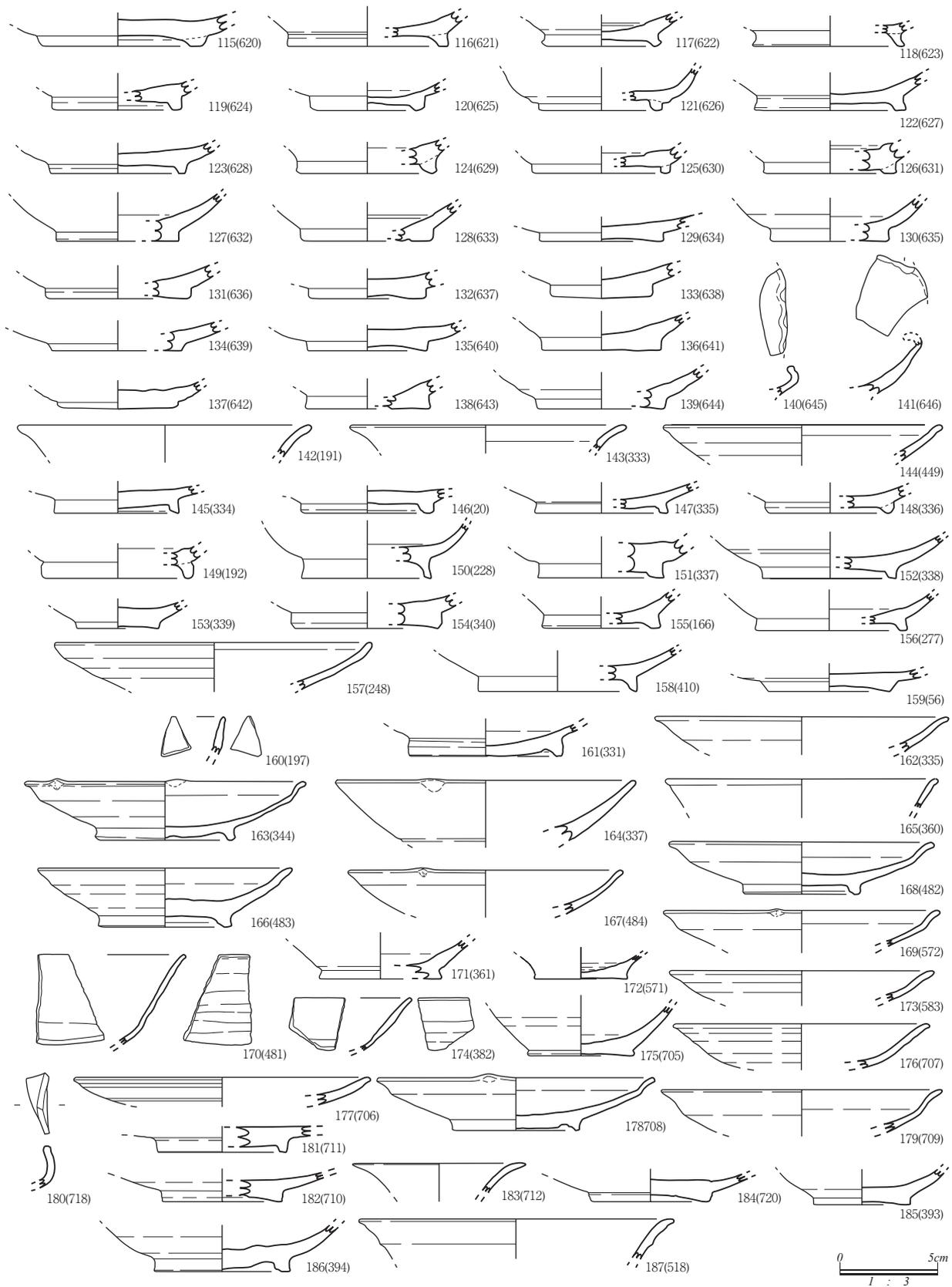
1 上分西遺跡 2 上分西遺跡乗安地区 3～8 本郷遺跡 9 本郷遺跡3次 10 池の内遺跡2次 11～13 天神山遺跡 14～16 道場遺跡 17～26 幸の木遺跡 27 新池遺跡 28～44 宮ノ浦遺跡 45 宮ノ浦遺跡 46～51 今若遺跡2 52 経田遺跡

図 18 愛媛県緑釉陶器一覽その 1



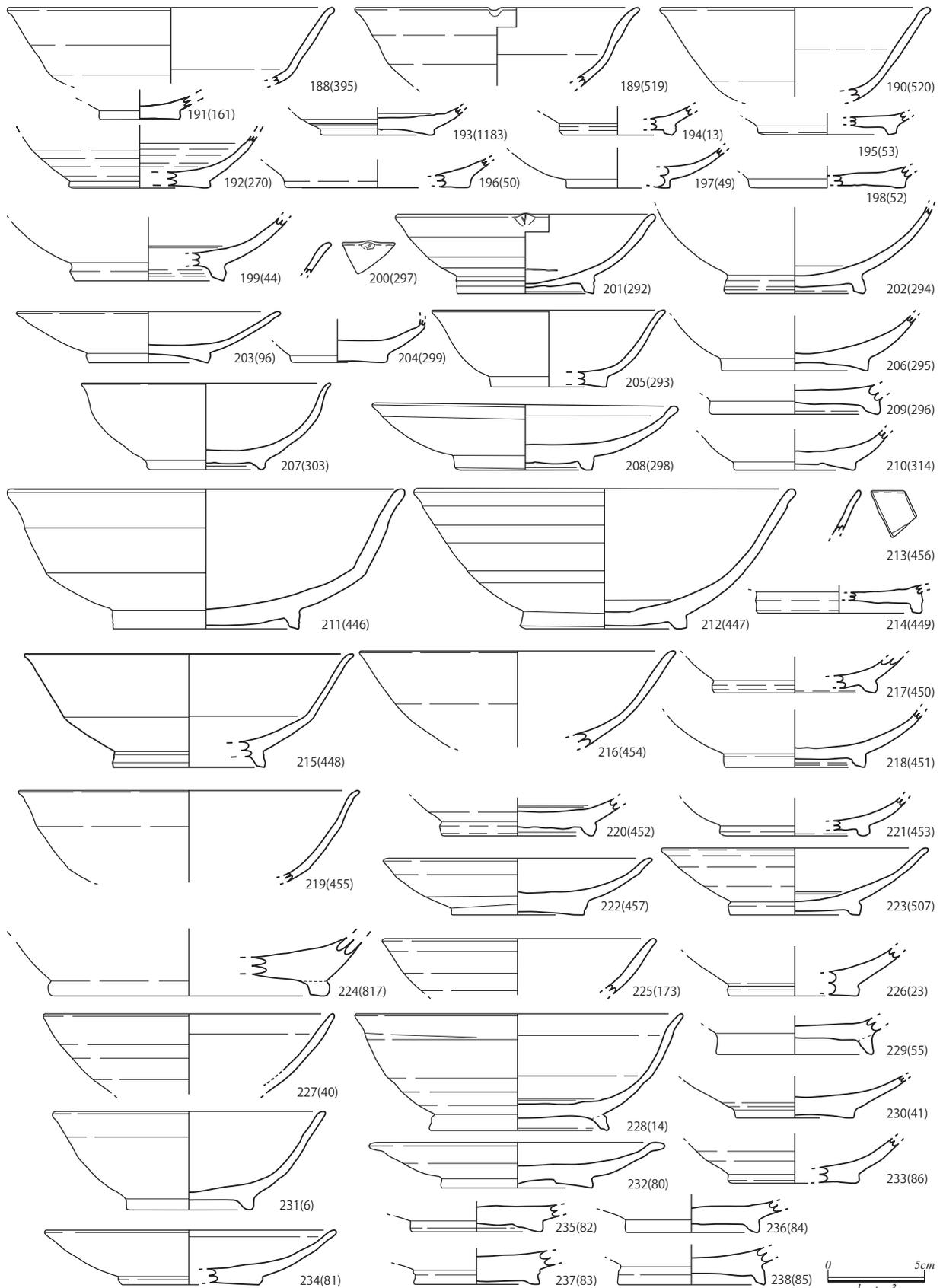
53～55 朝倉下下経田遺跡 56～61 伊予国分尼寺遺跡 62、63 郷桜井八反地遺跡 64、65 国分向遺跡 66～73 伊予国分寺跡4次 74、75 桜井11地点 76 国分才寄遺跡 77～88 四村額ヶ内遺跡 89、90 四村日本遺跡 91～95 中寺馬之照遺跡 96～99 八町遺跡 100～114 八町1号遺跡2次

図19 愛媛県緑釉陶器一覽その2



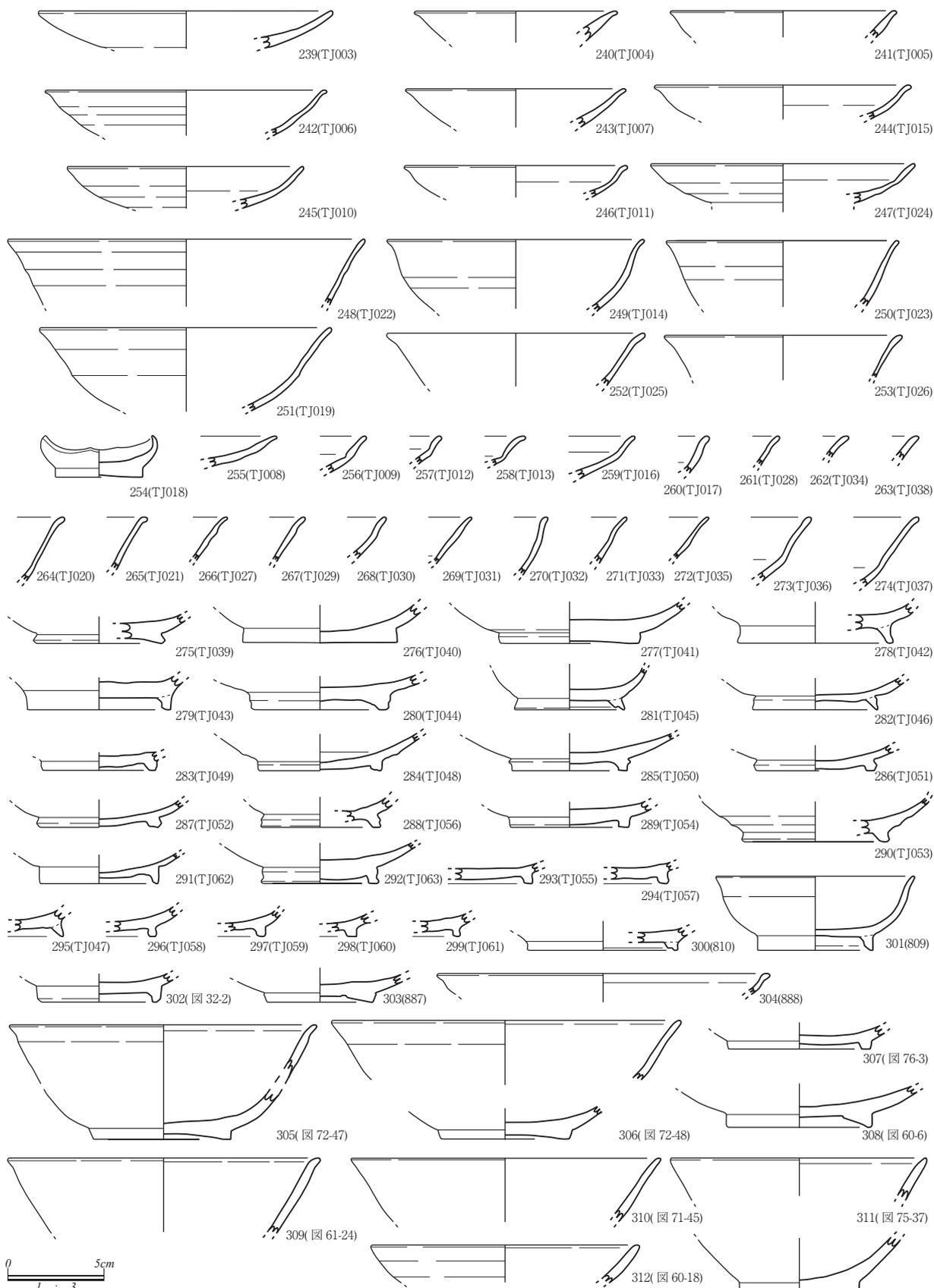
115 ~ 1451 八町 1 号遺跡 2 次 142 ~ 154 八町 1 号遺跡 3 次 155 ~ 157 八町 1 号遺跡 4 次 158 高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ 159 日高 19 地点 160 別名成ルノ谷遺跡 161 ~ 184 別名寺谷 I 遺跡 185 ~ 187 別名寺谷遺跡

図 20 愛媛県緑釉陶器一覧その 3



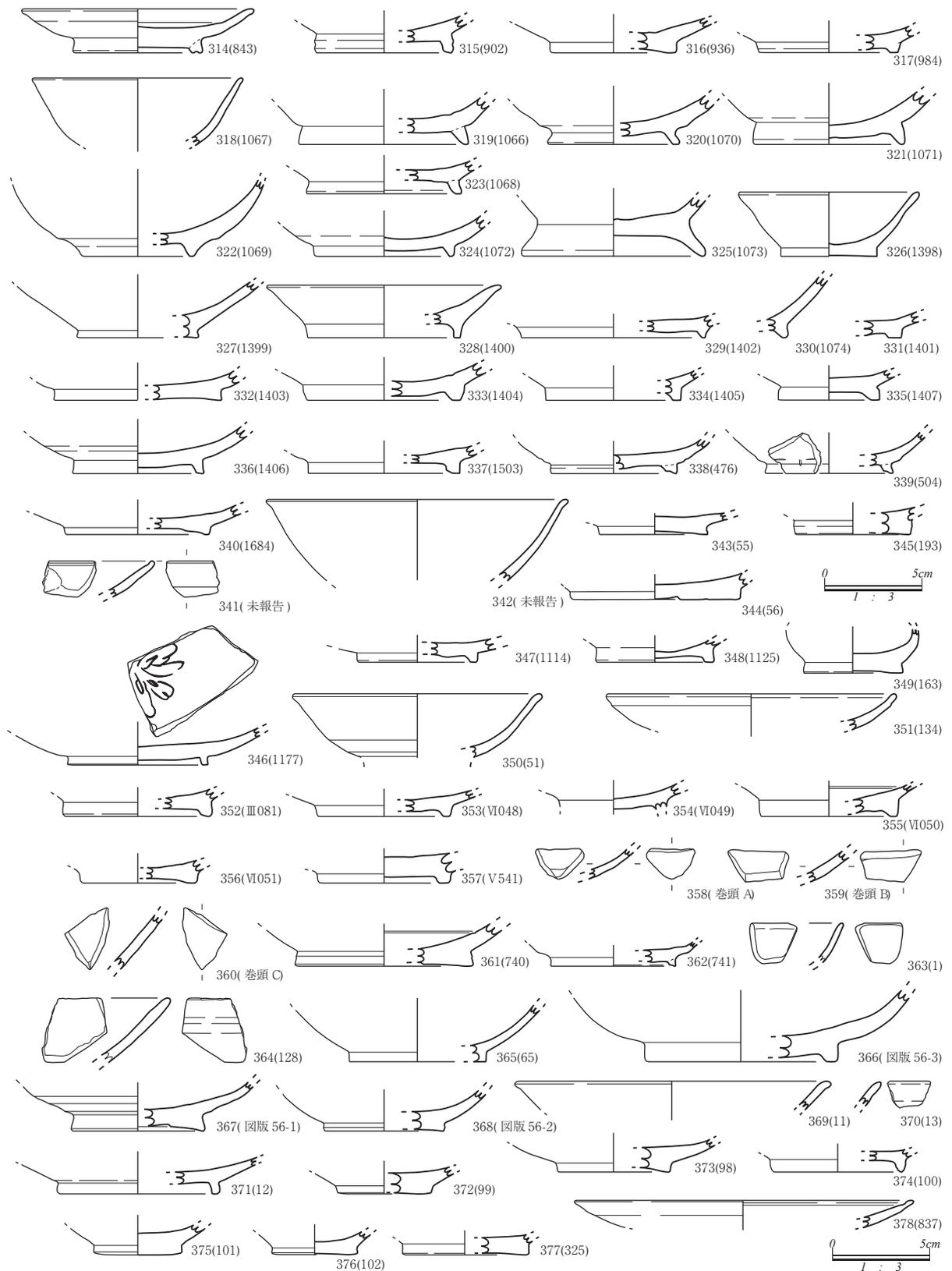
188～190 別名寺谷遺跡 191 別名端谷Ⅰ遺跡 192 矢田八反坪遺跡 3次 193 阿方遺跡 194～223 阿方春岡遺跡 224 阿方牛ノ江Ⅱ遺跡 225～238 石井国友遺跡

図 21 愛媛県緑釉陶器一覽その 4



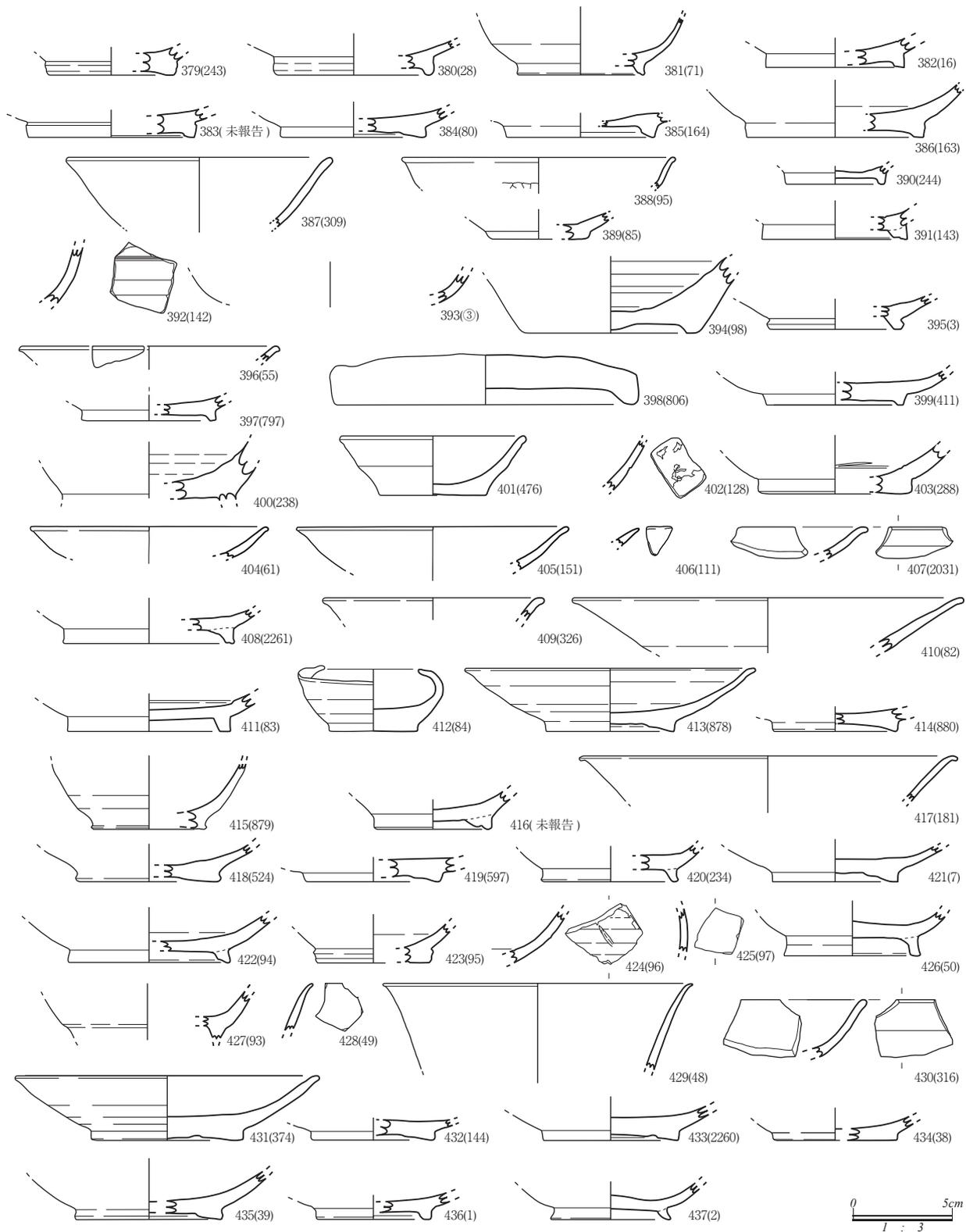
239~299 糸大谷遺跡 300、301 臥間遺跡 302 赤岸鼻遺跡 303、304 猿川西ノ森遺跡 305~313 宮浦遺跡 313(図 71-46)

図 22 愛媛県緑釉陶器一覧その 5



314~337 平田七反地遺跡 338、339 大淵遺跡 3次 340 船ヶ谷遺跡 4次 341、342 座拝坂遺跡 343、344 吉藤公園 345 大畑遺跡 346 祝谷本村遺跡 347、348 祝谷畑中遺跡 349 道後湯月町遺跡 350 道後今市遺跡 9次 351 道後町遺跡 352~360 岩崎遺跡 361、362 番町遺跡 363、364 此花町遺跡 365 樽味縦添遺跡 4次 366~368 樽味四反地遺跡 369~378 樽味四反地遺跡 5次

図 23 愛媛県緑釉陶器一覽その 6



379 樽味四反地遺跡 6 次 380 樽味四反地遺跡 10 次 381 樽味四反地遺跡 12 次 382~384 樽味四反地遺跡 15 次 385、386 樽味四反地遺跡 19 次 387 樽味四反地遺跡 20 次 388、389 桑原東稲葉遺跡 2 次 390 素鷺小学校校内遺跡 391、392 東本遺跡 6 次 393 大峰ヶ台遺跡 394、395 南江戸桑田遺跡 396 南江戸客谷遺跡 397 南江戸目遺跡 2 次 398 松環古照遺跡 399 古照遺跡 8 次 400 南斎院土居北遺跡 2 次 401 鳥越遺跡 402、403 東垣生八反地遺跡 6 次 404~406 古川遺跡 1 次 407、408 西石井遺跡 409 東石井遺跡 410~412 石井幼稚園遺跡 413~415 北井門遺跡 3 次 416、417 川附遺跡 418、419 乃万の裏遺跡 2 次 420 久米才歩行遺跡 4 次 421 前川 I 遺跡 422~425 久米窪田森元遺跡 3 次 426~429 久米窪田森元遺跡 4 次 430 古市遺跡 1 次 431、432 竹ノ鼻遺跡 433 上三谷篠田・鶴吉遺跡 434、435 旗屋遺跡 II 436、437 西ノ前遺跡

図 24 愛媛県緑釉陶器一覽その 7

表2 緑釉陶器出土一覧その1

遺跡番号	遺跡名	出土場所	図版掲載番号	報告書掲載番号	器種	高台	産地	時期	備考	報告書番号		
1	上分西遺跡	1区包含層	1	5	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		1		
2	上分西遺跡乗安地区	2a区SR01	2	245	碗	貼り付け輪高台	近江	10C後半		1		
3	本郷遺跡	SK1	3	13	碗		京都	9C後半		2		
	本郷遺跡	SK1	4	14	碗		京都	10C前半				
	本郷遺跡	包含層	5	75	碗		京都	9C後半～10C前半				
	本郷遺跡	包含層	6	76	碗		京都	10C前半				
	本郷遺跡	包含層	7	77	皿	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半				
	本郷遺跡	包含層	8	78	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半				
	本郷遺跡3次	II層	9	23	碗		京都	9C後半	1点			
4	池の内遺跡2次	SP532	10	134	碗		京都	9C後半～10C前半		4		
5	天神山遺跡	包含層	11	213	碗		近江	10C後半	輪花碗	5		
	天神山遺跡	包含層	12	212	碗		京都	10C前半				
6	道場遺跡	VII区カクラン	14	図190-2	碗		京都	9C後半～10C前半		6		
	道場遺跡	II区②層	15	図29-2	稜		京都	10C前半				
	道場遺跡	III区③層2	16	図55-4	碗	貼り付け輪高台	近江	10C後半				
7	幸の木遺跡	1区自然流路	17	404	碗		京都	9C後半～10C前半		7		
	幸の木遺跡	1区自然流路	18	52	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半				
	幸の木遺跡	1区自然流路	19	403	皿		京都	9C後半～10C前半				
	幸の木遺跡	包含層	20	485	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半				
	幸の木遺跡	1区自然流路	21	405	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半				
	幸の木遺跡	1区自然流路	22	408	碗		京都	9C後半～10C前半				
	幸の木遺跡	1区自然流路	23	409	碗		京都	9C後半～10C前半				
	幸の木遺跡	1区自然流路	24	410	碗		京都	10C前半				
8	幸の木遺跡	1区自然流路	25	411	碗		京都	9C後半～10C前半		8		
	幸の木遺跡	1区自然流路	26	406	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半				
	新池遺跡	III区2-3層	27	3002	皿		京都	10C前半				
	宮ノ浦遺跡	I区27トレンチ	28	155	皿		近江	10C後半				
	宮ノ浦遺跡	I区N15グリッド	29	160	皿		近江	10C後半				
	宮ノ浦遺跡	II区7トレンチ	30	266	碗		近江	10C後半				
	宮ノ浦遺跡	I区N15グリッド	31	159	皿		近江	10C後半				
	宮ノ浦遺跡	II区17トレンチ	32	167	皿		近江	10C後半				
	宮ノ浦遺跡	I区N15グリッド	33	160	皿		近江	10C後半				
	宮ノ浦遺跡	I区15トレンチ	34	図118-39	碗		京都	9C前半				
9	宮ノ浦遺跡	I区N15グリッド	35	158	小碗		防長	10C後半		9～12		
	宮ノ浦遺跡	I区31トレンチ	36	270	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半				
	宮ノ浦遺跡	II区18トレンチ	37	308	碗		京都	10C前半				
	宮ノ浦遺跡	I区N15グリッド	38	159	碗		京都	10C前半				
	宮ノ浦遺跡	II区17トレンチ	39	166	碗		京都	10C前半				
	宮ノ浦遺跡	II区17トレンチ	40	169	碗		京都	10C前半				
	宮ノ浦遺跡	II区7トレンチ	41	267	碗		近江	10C後半				
	宮ノ浦遺跡	II区17トレンチ	42	168	碗		京都	9C後半				
	宮ノ浦遺跡	II区17トレンチ	43	170	皿		京都	10C前半				
	宮ノ浦遺跡	I区N15グリッド	44	161	皿		近江	10C後半				
	10	宮ノ浦遺跡	包含層	45	401	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半			13
	11	今若遺跡2	包含層(IV層)	46	1001	碗		京都	9C後半～10C前半			14
今若遺跡2		包含層(IV層)	47	999	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半				
今若遺跡2		包含層(IV層)	48	998	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半				
今若遺跡2		包含層(IV層)	49	1003	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半	緑釉陶器素地か？			
今若遺跡2		包含層(IV層)	50	1000	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半				
今若遺跡2		包含層(IV層)	51	1002	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半				
今若遺跡2		包含層(IV層)		未報告					5点			
12	経田遺跡	ASK1 SE04	52	429	碗		京都	9C後半		15		
13	朝倉下下経田遺跡	ASSK2d区 包含層	53	3043	碗		京都	10C前半		16		
	朝倉下下経田遺跡	ASSK2d区 包含層	54	3044	碗		近江	10C後半				
	朝倉下下経田遺跡	ASSK2d区 包含層	55	3045	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半				
14	伊予国分尼寺遺跡	VI層	56	239	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		17		
	伊予国分尼寺遺跡	VI層	57	238	碗		京都	9C後半				
	伊予国分尼寺遺跡	VI層	58	240	碗か皿	削り出し輪高台？	京都	10C前半				
	伊予国分尼寺遺跡	V層	59	114	碗か皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半				
	伊予国分尼寺遺跡	V層	60	115	碗か皿	円盤高台	京都	9C後半				
15	伊予国分尼寺遺跡	IV層	61	18	皿	不明	不明	10C		18		
	郷桜井八反地遺跡	包含層	62	92	皿		不明	不明				
	郷桜井八反地遺跡	包含層	63	91	碗		京都	10C前半				
16	国分向遺跡	IV層	64	273	碗		京都	10C前半		19		
	国分向遺跡	IV層	65	274	皿	貼り付け輪高台	東海	9C後半				
	国分向遺跡	SR1		未報告					1点			
	国分向遺跡	IV層		未報告					1点			
17	国分向遺跡	SP5		未報告					1点	20		
	国分向遺跡	層位不明		未報告					2点			
	伊予国分寺跡4次	SK29	66	340	碗		京都	9C後半				
	伊予国分寺跡4次	12層	67	302	碗		京都	9C後半～10C前半				
	伊予国分寺跡4次	8層	68	355	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C前半				
	伊予国分寺跡4次	SK21	69	334	碗	削り出し円盤高台	京都	9C前半				
	伊予国分寺跡4次	6層	70	347	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半				
18	伊予国分寺跡4次	7層	71	350	皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半		21		
	伊予国分寺跡4次	13層	72	314	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半				
	伊予国分寺跡4次	11層	73	254	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半				
	板井11地点		74	105	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半				
19	板井11地点		75	106	耳皿	円盤高台	京都	9C後半～10C前半		22		
	国分才寄遺跡	包含層(II層)	76	20	碗	円盤高台	京都	9C前半				
20	四村額ヶ内遺跡	SD-01	77	149	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		23		
	四村額ヶ内遺跡	SD-01	78	152	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半				

表3 緑釉陶器出土一覧その2

遺跡番号	遺跡名	出土場所	図版掲載番号	報告書掲載番号	器種	高台	産地	時期	備考	報告書番号
20	四村額ヶ内遺跡	包含層	79	397	碗	貼り付け輪高台	近江	10C後半		23
	四村額ヶ内遺跡	SD-01	80	155	碗	不明	不明	不明	輪花皿か？	
	四村額ヶ内遺跡	SD-01	81	150	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	四村額ヶ内遺跡	SD-01	82	151	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	四村額ヶ内遺跡	包含層	83	392	碗		京都	9C前半		
	四村額ヶ内遺跡	包含層	84	393	皿		京都	9C後半		
	四村額ヶ内遺跡	包含層	85	394	碗	削り出し輪高台	京都	9C前半		
	四村額ヶ内遺跡	包含層	86	395	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	四村額ヶ内遺跡	包含層	87	396	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
四村額ヶ内遺跡	包含層	88	398	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
四村額ヶ内遺跡				未報告					4点	
21	四村日本遺跡	II-SP01	89	200	小碗	円盤高台	京都	9C後半～10C前半		24
	四村日本遺跡	II-SP16	90	221	皿		京都	10C前半		
	四村日本遺跡	II-SP08		未報告					1点	
22	中寺馬之原遺跡	包含層	91	521	皿		近江	10C後半		25
	中寺馬之原遺跡	SD-04	92	205	碗	貼り付け輪高台	東海	9C後半	内面にトチン痕あり	
	中寺馬之原遺跡	柱穴出土	93	439	皿	円盤高台	京都	9C後半		
	中寺馬之原遺跡	包含層	94	520	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C前半		
	中寺馬之原遺跡	トレンチ	95	565	壺		京都	9C		
23	八町遺跡	グリッド出土	96	44	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半		26
	八町遺跡	7調査区1号井戸	97	356	碗か皿	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
	八町遺跡	336号柱穴	98	194	皿	削り出し高台	京都	10C前半		
	八町遺跡	6調査区各グリッド	99	327	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
八町遺跡				未報告					48点	
24	八町1号遺跡2次	包含層	100	612	碗		京都	9C後半		27
	八町1号遺跡2次	包含層	101	613	碗		京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	SK1	102	75	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡2次	SK3	103	192	碗か皿	円盤高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	104	616	皿	削り出し輪高台	京都	9C前半		
	八町1号遺跡2次	包含層	105	615	皿		京都	10C前半		
	八町1号遺跡2次	包含層	106	614	碗		近江	10C後半		
	八町1号遺跡2次	SK2	107	170	碗か皿		近江	10C後半		
	八町1号遺跡2次	SK4	108	250	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C前半		
	八町1号遺跡2次	SK12	109	300	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半～10C前半		
	八町1号遺跡2次	SK21	110	317	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	SD2	111	362	碗か皿			9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	112	619	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	113	618	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡2次	包含層	114	617	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡2次	包含層	115	620	碗か皿		近江	10C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	116	621	碗か皿	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	117	622	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡2次	包含層	118	623	碗か皿	削り出し輪高台	東海	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	119	624	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	120	625	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	121	626	碗	貼り付け輪高台	近江	10C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	122	627	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	123	628	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡2次	包含層	124	629	碗か皿	削り出し輪高台	近江	10C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	125	630	碗か皿	削り出し輪高台	近江	10C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	126	631	碗か皿	削り出し輪高台	近江	10C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	127	632	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	128	633	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	129	634	皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	130	635	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡2次	包含層	131	636	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
八町1号遺跡2次	包含層	132	637	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半			
八町1号遺跡2次	包含層	133	638	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半			
八町1号遺跡2次	包含層	134	639	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C前半			
八町1号遺跡2次	包含層	135	640	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半			
八町1号遺跡2次	包含層	136	641	碗か皿	円盤高台	京都	9C後半			
八町1号遺跡2次	包含層	137	642	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C前半			
八町1号遺跡2次	包含層	138	643	碗か皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半			
八町1号遺跡2次	包含層	139	644	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C前半			
八町1号遺跡2次	包含層	140	645	耳皿		京都	9C後半～10C前半			
八町1号遺跡2次	包含層	141	646	耳皿		東海	9C後半～10C前半			
八町1号遺跡2次	包含層			未報告					62点	
28	八町1号遺跡3次	第6・7層	142	391	碗		京都	9C後半		28
	八町1号遺跡3次	第9層	143	333	皿		京都	9C後半		
	八町1号遺跡3次	その他の出土	144	449	皿		近江	10C後半		
	八町1号遺跡3次	第9層	145	334	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡3次	SK-03	146	20	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡3次	第9層	147	335	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡3次	第9層	148	336	皿	削り出し輪高台	近江	10C後半		
	八町1号遺跡3次	第6・7層	149	192	碗	削り出し輪高台	近江	10C後半		
	八町1号遺跡3次	第8層	150	228	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡3次	第9層	151	337	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	八町1号遺跡3次	第9層	152	338	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡3次	第9層	153	339	碗	円盤高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡3次	第9層	154	340	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	八町1号遺跡3次				未報告					
29	八町1号遺跡4次	第8層	155	166	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		29
	八町1号遺跡4次	その他の出土包含層	156	277	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半～10C前半		
	八町1号遺跡4次	第12層	157	248	皿		京都	9C後半		

表4 緑釉陶器出土一覧その3

遺跡番号	遺跡名	出土場所	図版掲載番号	報告書掲載番号	器種	高台	産地	時期	備考	報告書番号
24	八町1号遺跡4次			未報告					11点	29
25	高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ	5層	158	410	椀	削り出し輪高台	京都	9C後半		30
26	日高19地点		159	56	椀か皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半		31
27	別名成ルノ谷遺跡	包含層	160	197	椀		京都	9C後半～10C前半		32
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SI03	161	331	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SB01	162	335	皿		京都	10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	DAN01	163	344	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半	輪花皿	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SB01	164	337	皿		京都	9C後半	輪花皿	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	DAN002	165	360	椀		京都	9C後半～10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SD08	166	483	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SD08	167	484	皿		京都	10C前半	輪花皿	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SD08	168	482	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	2号土器溜まり	169	572	皿		京都	9C後半	輪花皿	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SD08	170	481	椀		京都	10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	DAN02	171	361	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	2号土器溜まり	172	571	耳皿		京都	9C後半～10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SP58	173	583	皿		京都	9C後半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SK02	174	382	椀		京都	9C後半～10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	175	705	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半	ヘラ記号「-」あり	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	176	707	皿		京都	9C後半～10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	177	706	皿		京都	9C後半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	178	708	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半	輪花皿	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	179	709	皿		京都	10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	180	718	耳皿		京都	9C後半～10C前半	緑釉陶器素地か?	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	181	711	皿	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	182	710	皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	183	712	瓶		京都	9C後半～10C前半		
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層	184	720	皿	削り出し蛇の目高台	京都	10C前半	緑釉陶器素地か?	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	DAN02		未報告					11点	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	DAN03		未報告					3点	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SK02		未報告					2点	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SD08		未報告					5点	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	SD10		未報告					1点	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	1号土器溜まり		未報告					1点	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	2号土器溜まり		未報告					1点	
	別名寺谷Ⅰ遺跡	包含層		未報告					46点	
29	別名寺谷遺跡	5層	185	393	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	別名寺谷遺跡	5層	186	394	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	別名寺谷遺跡	その他出土	187	518	椀		京都	9C後半～10C前半		
	別名寺谷遺跡	5層	188	395	椀		京都	10C前半		
	別名寺谷遺跡	その他出土	189	519	椀		京都	10C前半	輪花椀	
	別名寺谷遺跡	その他出土	190	520	椀		近江	10C後半		
30	別名端谷Ⅰ遺跡	包含層	191	161	耳皿	円盤高台	京都	9C後半～10C前半		32
32	矢田八反坪遺跡3次	層位不明	192	270	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半		34
33	阿方遺跡	SR1	193	1183	椀か皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半		35
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SB01	194	13	椀	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SB06	195	53	椀	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SB06	196	50	椀	削り出し円盤高台	京都	9C前半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SB05	197	49	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SB06	198	52	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SB02	199	44	椀	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01	200	297	椀		京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01	201	292	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半	輪花椀	
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01	202	294	椀		京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SX01	203	96	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01	204	299	耳皿		京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01	205	293	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01	206	295	椀		京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD06	207	303	椀	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01	208	298	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01	209	296	椀		京都	9C前半		
34	阿方春岡遺跡	上層遺構面	210	314	椀	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	211	446	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	212	447	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	213	456	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	214	449	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	215	448	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	216	454	椀	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	217	450	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	218	451	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	219	455	椀	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	20	452	椀	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	221	453	椀	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	上層包含層	222	457	皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	阿方春岡遺跡	表土・一括	223	507	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SP138		未報告					点数不明	
	阿方春岡遺跡	Ⅱ-SD01		未報告					2点	
	阿方春岡遺跡	包含層		未報告					24点	
35	阿方牛ノ江Ⅱ遺跡	包含層	224	817	壺	貼り付け輪高台	京都	9C後半		37
	阿方牛ノ江Ⅱ遺跡	包含層		未報告					5点	
36	石井国友遺跡	1次調査区その他の包含層	225	173	椀		京都	9C後半		
	石井国友遺跡	1次調査区第4層	226	23	椀	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	石井国友遺跡	1次調査区第5層	227	40	椀		京都	9C前半		
	石井国友遺跡	3次調査区SB-06	228	14	椀	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		

表5 緑釉陶器出土一覧その4

遺跡番号	遺跡名	出土場所	図版掲載番号	報告書掲載番号	器種	高台	産地	時期	備考	報告書番号
36	石井国友遺跡	1次調査区第9層	229	55	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		38
	石井国友遺跡	1次調査区第5層	230	41	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	石井国友遺跡	2次調査区SD5	231	6	碗	貼り付け輪高台	近江	10C前半		
	石井国友遺跡	2次調査区包含層	232	80	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	石井国友遺跡	2次調査区包含層	233	86	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	石井国友遺跡	2次調査区包含層	234	82	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	石井国友遺跡	2次調査区包含層	235	84	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	石井国友遺跡	2次調査区包含層	236	81	皿	削り出し円盤高台	京都	9C前半		
	石井国友遺跡	2次調査区包含層	237	83	碗か皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C		
石井国友遺跡	2次調査区包含層	238	85	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半			
37	糸大谷遺跡	包含層	239	TJ003	皿		京都	9C後半		39
	糸大谷遺跡	包含層	240	TJ004	皿		京都	不明		
	糸大谷遺跡	包含層	241	TJ005	皿		京都	9C後半		
	糸大谷遺跡	包含層	242	TJ006	皿		京都	9C後半		
	糸大谷遺跡	包含層	243	TJ007	皿		京都	9C後半		
	糸大谷遺跡	包含層	244	TJ015	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	SK13	245	TJ010	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	246	TJ011	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	247	TJ024	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	248	TJ022	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	249	TJ014	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	250	TJ023	碗		不明	9C後半～10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	251	TJ019	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	252	TJ025	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	253	TJ026	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	254	TJ018	耳皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	255	TJ008	皿		京都	9C後半		
	糸大谷遺跡	包含層	256	TJ009	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	257	TJ012	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	258	TJ013	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	259	TJ016	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	260	TJ017	皿		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	261	TJ028	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	262	TJ034	碗		京都	不明		
	糸大谷遺跡	包含層	263	TJ038	碗		京都	9C後半		
	糸大谷遺跡	包含層	264	TJ020	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	265	TJ021	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	266	TJ027	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	267	TJ029	碗		京都	不明		
	糸大谷遺跡	包含層	268	TJ030	碗		京都	不明		
	糸大谷遺跡	包含層	269	TJ031	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	270	TJ032	碗		京都	9C後半		
	糸大谷遺跡	包含層	271	TJ033	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	272	TJ035	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	273	TJ036	碗		京都	10C前半		
	糸大谷遺跡	包含層	274	TJ037	碗		京都	10C前半		
糸大谷遺跡	包含層	275	TJ039	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半			
糸大谷遺跡	包含層	276	TJ040	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半			
糸大谷遺跡	包含層	277	TJ041	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半			
糸大谷遺跡	包含層	278	TJ042	碗	貼り付け輪高台	近江	10C後半			
糸大谷遺跡	包含層	279	TJ043	碗か皿	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半			
糸大谷遺跡	包含層	280	TJ044	皿	削り出し輪高台	京都	9C後半～10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	281	TJ045	小碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半			
糸大谷遺跡	包含層	282	TJ046	碗か皿	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半			
糸大谷遺跡	包含層	283	TJ049	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	284	TJ048	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	285	TJ050	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	286	TJ051	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	298	TJ052	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	288	TJ056	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	289	TJ054	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	290	TJ053	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	291	TJ062	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	292	TJ063	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	293	TJ055	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	294	TJ057	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	295	TJ047	碗か皿	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半			
糸大谷遺跡	包含層	296	TJ058	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	297	TJ059	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	298	TJ060	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	包含層	299	TJ031	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
糸大谷遺跡	SP247			未報告				点数不明	糸大谷遺跡全体で 未報告資料約39点	
糸大谷遺跡	SP248			未報告				点数不明		
糸大谷遺跡	SP579			未報告				点数不明		
38	臥間遺跡	包含層	300	810	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		40
	臥間遺跡	包含層	301	809	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
	臥間遺跡	包含層			未報告				3点	
39	赤岸鼻遺跡	グリット出土	302	図32-2	碗	不明	京都	10C前半		41
40	猿川西ノ森遺跡	包含層	303	887	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		42
	猿川西ノ森遺跡	包含層	304	889	皿		京都	9C後半		
41	宮浦遺跡	B7区9層	305	図72-47	碗	削り出し円盤高台	京都	9C		43
	宮浦遺跡	B7区9層	306	図72-48	碗	削り出し円盤高台	京都	9C		
	宮浦遺跡	B9区	307	図76-3	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	宮浦遺跡	B4区2層～3層	308	図60-6	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C		

表6 緑釉陶器出土一覧その5

遺跡番号	遺跡名	出土場所	図版掲載番号	報告書掲載番号	器種	高台	産地	時期	備考	報告書番号
41	宮浦遺跡	B4区4層下部	309	図61-24	碗		不明	不明		43
	宮浦遺跡	B7区9層	310	図71-45	碗		不明	不明		
	宮浦遺跡	B8区	311	図75-37	碗		不明	不明		
	宮浦遺跡	B4区4層上部	312	図60-18	皿		不明	不明		
	宮浦遺跡	B7区9層	313	図71-46	碗	削り出し円盤高台	京都	9C		
42	平田七反地遺跡	c-1区 SD127	314	843	皿	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
	平田七反地遺跡	c-2区 SD4	315	92	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	c-2区 SD255	316	936	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	平田七反地遺跡	c-2区 SP795	317	984	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	318	1067	碗		近江	10C後半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	319	1066	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	320	1070	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	321	1071	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	322	1069	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	323	1068	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	324	1072	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	325	1073	碗	不明		不明		
	平田七反地遺跡	c区 包含層	326	1398	碗	円盤高台	京都	9C後半		
	平田七反地遺跡	c区 包含層	327	1399	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	平田七反地遺跡	c区 包含層	328	1400	皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	c区 包含層	329	1402	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	d-1区 SD1	330	1074	碗	削り出し輪高台?	京都	10C前半		
	平田七反地遺跡	c区 包含層	331	1401	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
平田七反地遺跡	c区 包含層	332	1403	碗か皿	削り出し円盤高台	京都	9C後半			
平田七反地遺跡	c区 包含層	333	1404	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
平田七反地遺跡	c区 包含層	334	1405	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
平田七反地遺跡	c区 包含層	335	1407	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半			
平田七反地遺跡	c区 包含層	336	1406	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
平田七反地遺跡	d区 包含層	337	1503	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
43	大湖遺跡3次	SX5	338	476	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
	大湖遺跡3次	第IV層	339	504	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
44	船ヶ谷遺跡4次	第VII層	340	1684	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
45	座拝坂遺跡	包含層	341	未報告	皿		京都	9C後半		
	座拝坂遺跡	包含層	342	未報告	碗		京都	9C前半		
46	吉藤公園	第8層	343	55	碗か皿		京都	9C後半		
	吉藤公園	第8層	344	56	碗か皿		京都	9C後半		
47	大畑遺跡	包含層	345	193	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
48	祝谷本村遺跡	SR04	346	1177	皿	削り出し輪高台	京都	9C後半	陰刻花文皿	
49	祝谷畑中遺跡	SR01	347	1114	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	祝谷畑中遺跡	V層	348	1125	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
50	道後湯月町遺跡	池址2	349	163	耳皿	円盤高台	京都	9C後半～10C前半		
51	道後今市遺跡9次	砂礫層	350	511	小碗		京都	9C後半～10C前半		
52	道後町遺跡	包含層	351	134	皿		京都	10C前半		
	道後町遺跡II								60/290の箱に出土の記載あり	54
53	岩崎遺跡	第III層	352	Ⅲ081	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	岩崎遺跡	第III層	353	Ⅳ048	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	岩崎遺跡	第III層	354	Ⅳ049	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	岩崎遺跡	第III層	355	Ⅳ050	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	岩崎遺跡	第III層	356	Ⅳ051	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	岩崎遺跡	第III層	357	V 541	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半		
	岩崎遺跡	第III層	358	巻頭図版A	皿		近江	10C後半		
	岩崎遺跡	第III層	359	巻頭図版B	碗か皿		近江	10C後半		
岩崎遺跡	第III層	360	巻頭図版C	碗		京都	10C前半			
54	石手村前遺跡	SK10		未報告	皿				1点	56
	石手村前遺跡	SR1		未報告					4点	
55	番町遺跡	包含層	361	740	碗	削りだし蛇の目高台	京都	9C後半		57
	番町遺跡	包含層	362	741	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
56	此花町遺跡	SII	363	1	碗		近江	10C後半	小碗の可能性あり	58
	此花町遺跡	SD21		5	碗		京都	10C前半	輪花碗	
	此花町遺跡	包含層(VII層)	364	128	碗		京都	9C後半～10C前半		
此花町遺跡	SR1			未報告					1点	
57	榊味立遺跡4次	SR1	365	65	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		59
58	榊味四反地遺跡	包含層	366	図版56-3	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		60
	榊味四反地遺跡	包含層	367	図版56-1	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	榊味四反地遺跡	包含層	368	図版56-2	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	榊味四反地遺跡5次	SR1①層	369	11	碗		京都	9C後半～10C前半		
	榊味四反地遺跡5次	SR1①層	370	13	碗		京都	9C		
	榊味四反地遺跡5次	SR1①層	371	12	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	榊味四反地遺跡5次	SR1②層	372	98	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	榊味四反地遺跡5次	SR2②層	373	99	皿	円盤高台	京都	9C後半		
	榊味四反地遺跡5次	SR3②層	374	100	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		
	榊味四反地遺跡5次	SR4②層	375	102	碗か皿	円盤高台	京都	9C前半		
	榊味四反地遺跡5次	SR5②層	376	101	碗か皿	円盤高台	京都	9C後半		
	榊味四反地遺跡5次	SR1③層	377	325	碗か皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	榊味四反地遺跡5次	V層	378	837	皿		京都	9C後半		
	榊味四反地遺跡6次	SB016ないしSB003	379	243	碗か皿	円盤高台	京都	9C後半		
	榊味四反地遺跡10次	SK8	380	28	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		
榊味四反地遺跡12次	第IV層	381	71	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			
榊味四反地遺跡15次	SD1	382	16	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
榊味四反地遺跡15次	SD1	383	未報告	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
榊味四反地遺跡15次	SD1		89					実測図なし。写真図版に掲載。		
榊味四反地遺跡15次	層位不明	384	80	碗か皿	削りだし蛇の目高台	京都	9C後半			
榊味四反地遺跡19次	第II層	385	164	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半			
榊味四反地遺跡19次	第II層	386	163	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半			

表7 緑釉陶器出土一覧その6

遺跡番号	遺跡名	出土場所	図版掲載番号	報告書掲載番号	器種	高台	産地	時期	備考	報告書番号
58	樽味四反地遺跡20次	グリッド出土	387	309	碗		京都	10C前半		66
59	桑原東稲葉遺跡1次調査	柱穴内		未報告					1点	67
	桑原東稲葉遺跡2次調査	第V層	388	95	碗		京都	9C後半～10C前半		67
	桑原東稲葉遺跡2次調査	SP118	389	85	碗	削り出し円盤高台	京都	9C前半		67
60	素鷺小学校校内遺跡	W4区出土	390	244	碗か皿	削り出し輪高台	京都	9C後半		68
61	東本遺跡6次	SR201埋土①	391	143	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		69
	東本遺跡6次	SR201埋土①	392	142	碗		近江	10C後半		69
62	大峰ヶ台丘陵客谷地区	試掘調査	393	③	碗		不明	不明		70
	南江戸桑田遺跡	1号溝状遺構	394	98	壺		不明	不明		71
63	南江戸桑田遺跡	調査区出土	395	3	碗か皿	削り出し輪高台	京都	10C前半		71
	南江戸客谷遺跡	SD1中層	396	55	皿		京都	9C後半		70
64	南江戸客谷遺跡	SD1中層	396	55	皿		京都	9C後半		70
65	南江戸圃日遺跡2次	東側上層遺構外	397	797	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半		72
66	松環古照遺跡	IV-4小区	398	806	不明		不明	不明	経筒容器の蓋か?	73
67	古照遺跡8次	黒色粘土の西側	399	411	碗		京都	10C前半		74
68	南齋院土居北遺跡	SD1	400	238	壺		京都	9C		72
69	鳥越遺跡	SB2	401	476	小杯	円盤高台	京都	9C		75
70	東垣生八反地遺跡6次	SK202	402	128	碗		近江	10C後半		76
	東垣生八反地遺跡6次	包含層	403	288	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		76
71	余戸弘川遺跡1・2次	包含層		未報告	碗				1点	77
72	古川遺跡1次	SD1	404	61	皿		京都	9C後半		78
	古川遺跡1次	地点不明出土	405	151	皿		京都	9C後半		
	古川遺跡1次	第Ⅲ層	406	111	皿		京都	9C後半		
73	西石井遺跡	SX201	407	2031	皿		近江	10C後半		79
	西石井遺跡	表探	408	2261	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
74	東石井遺跡	SK310	409	326	皿		京都	9C後半		79
75	石井幼稚園遺跡	SD1	410	82	皿		京都	9C後半		80
	石井幼稚園遺跡	SD1	411	83	碗	削り出し輪高台	京都	9C後半～10C前半		
	石井幼稚園遺跡	SD1	412	84	耳皿	円盤高台	京都	9C後半～10C前半		
76	北井門遺跡3次	SR1最上層	413	878	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		81
	北井門遺跡3次	SR1最上層	414	880	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
	北井門遺跡3次	SR1最上層	415	879	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
77	川附遺跡	包含層	416	未報告	小碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		82
	川附遺跡	包含層	417	181	碗		不明	不明		
	乃万の裏遺跡2次	IV下層	418	524	碗か皿		京都	9C後半		
78	乃万の裏遺跡2次	IV上層	419	597	碗か皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		83
79	久米才歩行遺跡4次	SR201埋土①	420	234	碗	貼り付け輪高台	近江	10C後半		84
80	前川I遺跡		421	7	皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		85
81	久米窪田森元遺跡3次	追加資料	422	94	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		86
	久米窪田森元遺跡3次	追加資料	423	95	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
	久米窪田森元遺跡3次	追加資料	424	96	碗		京都	9C後半～10C前半		
	久米窪田森元遺跡3次	追加資料	425	97	不明		京都	9C後半～10C前半		
	久米窪田森元遺跡4次	SR4	426	50	碗	貼り付け有段輪高台	近江	10C後半		
	久米窪田森元遺跡4次	IV②層出土	427	93	碗		不明	不明		
	久米窪田森元遺跡4次	SR4	428	49	碗		京都	10C前半		
82	古市遺跡1次	表探	430	316	碗		京都	10C前半		87
83	竹ノ鼻遺跡	その他の出土	431	374	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		88
	竹ノ鼻遺跡	SB02	432	144	碗か皿	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		
84	上三谷篠田・鶴吉遺跡	層位不明	433	2260	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		89
	旗屋遺跡II	SI1	434	38	碗	削り出し円盤高台	京都	9C後半		
85	旗屋遺跡II	SI1	435	39	碗	削り出し蛇の目高台	京都	9C後半		89
	旗屋遺跡II	SI1		未報告					16点	
	旗屋遺跡II	SK2		未報告					3点	
	旗屋遺跡II	SD1		未報告					2点	
86	西ノ前遺跡	第2調査区出土	436	1	碗	削り出し輪高台	京都	10C前半		90
	西ノ前遺跡	第2調査区出土	437	2	碗	貼り付け輪高台	近江	10C後半		

資料調査で実見することができず、報告書の図面や記載などを参考に筆者が産地および時期を判断
 2023年9月29日に大阪大学大学院の高橋照彦氏を招聘した際に産地および時期についてご指導いただいた
 筆者が資料調査で実見した資料であり、資料調査と報告書の記載などを参考に産地および時期を判断

湯築城跡出土の水晶製五輪塔形舍利容器について

柴田圭子

はじめに

国史跡湯築城跡(愛媛県松山市道後公園)は、二重の堀と土塁に囲まれた独特の形態を有する平山城で、伊予国の守護河野氏の居城である。発掘調査は平地部の南側において面的に行われ、その他の地区については全面で試掘調査が実施されたものの、各地区の性格など不明な点も多く、全貌が解明されたとは言い難い。

発掘調査による最大の成果として、外堀とそれに伴う土塁の築造が16世紀前半に行われ、その際に平地部が整備されたことが挙げられる。しかし、中央にある丘陵部では、それを遡る遺構がみつかり、初期の湯築城は丘陵部を利用していたと推定される。その丘陵部では、特殊な遺物が出土しており、それが本稿で取り上げる水晶製五輪塔形舍利容器である。これについては既に報告書に掲載しているが(愛媛県埋文2000)、舍利容器であることを明記しておらず、実測図に若干の誤りもあるため、再報告することとした。

1 水晶製五輪塔形舍利容器について

舍利容器が出土したのは、丘陵部北下郭(報告書ではD地区)(図1)で検出した「土堤状遺構」である(写真1)。土堤状遺構は、炭・焼土層に覆われ、火災により廃絶したと考えられる礎石建物(SB001)に近接し、若干土を盛り上げた土堤(長径0.96m、土堤の幅0.25m)を「C」字状に巡らせている。中央部のくぼみには炭化麦がまとまって確認され、水晶片はその炭化麦に混じって出土した。土堤状遺構は炭・焼土層を除去する過程での検出であり、火災前から存在していたと考えられるが、炭化麦を含む中央のくぼみは上位から掘り込んでおり、埋土には炭化物を多く含むこと、周辺にも炭化麦の散布が認められたことから、炭・焼土層を掘り込んで形成されている。炭・焼土層の上層は整地層であり、火災後に再整備が行われている。以上のことから、火災直後から整地を行うまでの時期に土堤状遺構の中央にくぼみ状の小穴を掘り、炭化麦と水晶片が入れたことがわかる。

礎石建物を覆う炭・焼土層からは、土師質土器皿・杯、備前焼甕・播鉢、貿易陶磁器の青磁碗、白磁皿、青花磁皿など多様な遺物が出土しており、これらの時期は15世紀後半を中心に16世紀初頭まで下る可能性がある(柴田2000)。このことにより、礎石建物の火災の時期は15世紀末～16世紀初頭の幅でとらえられ、外堀掘削前の遺構と判断される。また、陶磁器の中には、青磁瓶類が2点含まれており、器形と文様から長頸の花瓶または梅瓶の可能性はある(図2-190・191、番号は報告書と同一、以下同様)。湯築城内ではほかに青磁の長頸花瓶や梅瓶は出土しておらず、SB001は、小規模な礎石建物ではあるが、城内最高所に近く、希少な陶磁器を有する特殊な意味を持つ建物と考えられる。

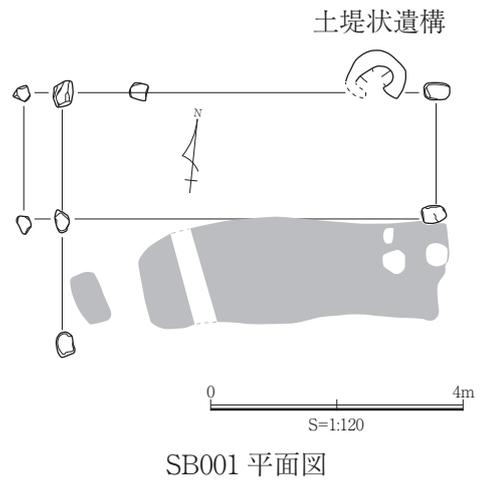
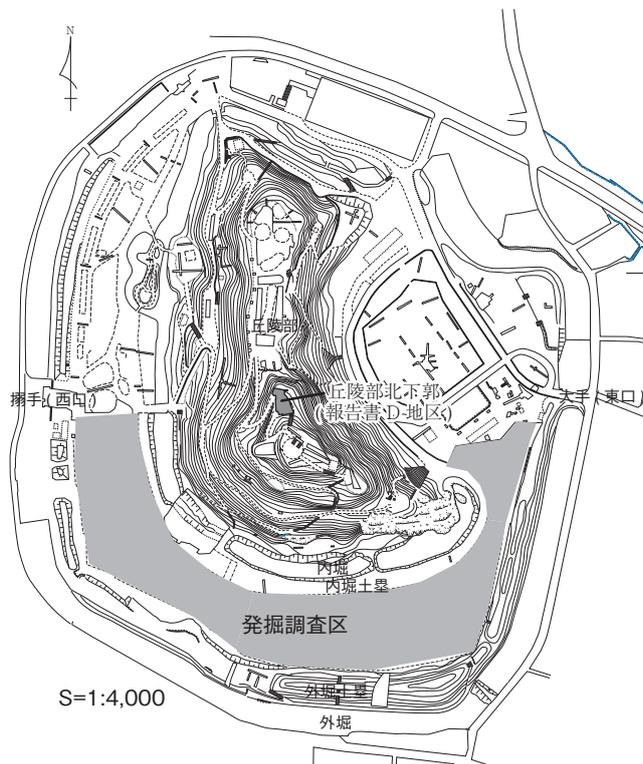


図1 湯築城跡平面図と調査区の位置・SB001 平面図

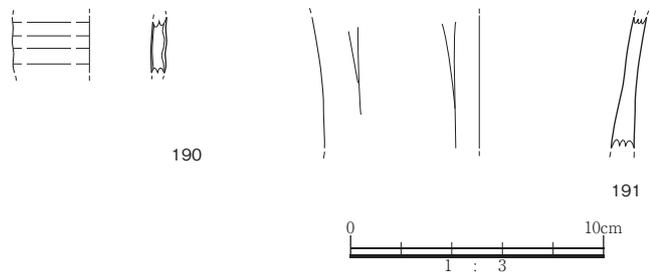


図2 炭・焼土層出土青磁瓶



写真1 土堤状遺構平・断面(西から)

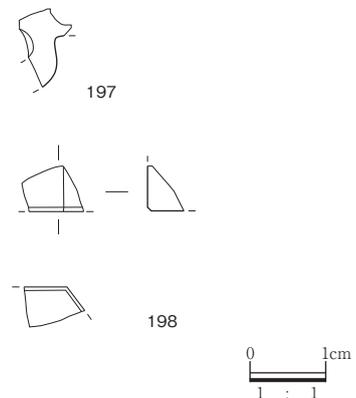


図3 水晶製五輪塔形舍利容器実測図

出土した水晶片は、五輪塔形舍利容器の火輪と水輪の一部と、地輪の一部の2片である(図3-197・198)。廃土も含めて篩にかけたため、ほかに破片はなく本来2片のみであったとみられる。

197は、火輪と水輪の一部で、それが一体となっていることがわかる。残存する高さは1cmである。報告段階では、火輪の外表面が残存していると考えたが、改めて観察したところ破損していることがわかった。そのため火輪の形状は水輪上部と接する下端部分の一部を除いて不明である。水輪は、やや下膨れの球状で、内面には舍利を納めるための穿孔がなされている。198は地輪の下部で、残存する高さは6mmである。平面形は六角形に復元できる。下端の角は丁寧に面取りされている。これらの形状により、本資料は六角形の五輪塔形舍利容器の一部と判断できる。

2 類例

鎌倉時代には、南都(奈良)を中心とした戒律復興の気運を受けて舍利信仰が高揚し、五輪塔形舍利容器は、東大寺復興を成し遂げた重源や、西大寺の中興の祖である叡尊などが主導的な役割を果たしながら普及し、そのうち水晶製のものは、12世紀初頭に新たな仏舎利荘厳具としての形式を完成させ、12世紀を通じて多用されるようになったとされる(河田2000)。水晶製五輪塔形舍利容器には紀年銘資料も多く、最も遡る例は、重源によって建久8(1197)年に阿弥陀寺(山口県防府市)鉄製宝塔に納入された三角五輪塔形舍利容器が挙げられる。銘文により「真舍利七顆」を入れた「五輪水精塔」が奉納されたことがわかり、阿弥陀寺に伝わる本例がこれに当たるとされている(奈良国立博物館2006)。六角形的水晶製五輪塔形舍利容器(以下、六角五輪塔形と呼称)は、瑞巖寺(宮城県松島市)に北条政子により納められたという例や、橘寺放生院(京都府宇治市)の浮島十三重層塔納置資料などが知られる。

五輪塔形舍利容器については、過去に何度か集成が行われており(奈良国立博物館1983、(財)元興寺文化財研究所1995ほか)、その中で水晶製品も取り扱われている。また、六角五輪塔形に関しては、瑞巖寺資料を評価するために集成されたほか(河田2000)、近年新たに集成され、全国で15例27基が確認された(大内2023)。これまでの集成では、湯築城跡出土資料は取り扱われていなかったため、それを評価するに当たり、過去の集成成果に新規発見資料などを加えて、水晶製五輪塔形舍利容器全体を改めて集成した(表1)*¹。その結果、水晶製五輪塔形舍利容器は、全国で47地点(遺跡)69基を確認することができた。

水晶製五輪塔形舍利容器の形態の特徴については、時期を追っての形態変遷は明らかではなく、全体の概要を述べる。大きさは、一部の仏像納置品等を除いて2~5cm代とかなり小型である。それらは、火輪と地輪がほぼ同幅のものが多く、火輪の裾は面取りをするものとしがないものがある。地輪の高さは高いものと低いものがあり、地輪の下辺は真っ直ぐに加工するが、上辺は各辺若干丸みを持ち、繊細な面取りがみられるものもある。蓋部と身部に分かれ、その境は、風・火輪の間か火・水輪の間に設けられている。舍利が水輪におさまるように身部には孔を穿つ。六角五輪塔形のうち、図や写真で確認できる少なくとも22例は空・風輪が蓋で、火・水・地

表 1-1 水晶製五輪塔形舍利容器一覧(1)

番号	所在地	埋納・収納・出土場所名ほか	時期	遺跡の性格	形状	高さ [現存値]	参考文献/HPなど	文献1	文献2	文献3	文献4	文献5	文献6
1	山形県鶴岡市	中山庵寺跡SK11	13世紀後半	塚・土坑	六角	[349]	鶴岡山古墳1号発掘調査会2014『鶴岡山古墳1号-第1次発掘調査報告書-』、藤島町教育委員会 1982『藤島町埋蔵文化財調査報告書3：中山庵寺跡発掘調査報告書』藤島町教育委員会		○				
2	宮城県松島市	瑞巖寺	正治2(1200)	寺院	六角	6.7	神奈川県立歴史博物館ほか2012『武家の古都・鎌倉』		○		○		○
3	宮城県涌谷町	鏡峯寺(こんぼうじ)		寺院	六角	4.2	https://www.city.tome.miyagi.jp/rekihaku/otamesitamuramaro.pdf				○		○
4-1		極楽寺石塔(五輪塔)	14世紀初頭	寺院・石塔	六角	4.0	土浦市博物館1997『中世の霞ヶ浦と律宗』、桃崎佑輔						
4-2	茨城県つくば市	極楽寺石塔(五輪塔)	14世紀初頭	寺院・石塔	六角		2007『高僧の墓所と石塔-律宗・時宗・禪宗の事例を中心にして-』、『墓と葬送の中世』高志書院、つくば市教						
4-3		極楽寺石塔(五輪塔)	14世紀初頭	寺院・石塔	-				○		○		○
5	千葉県館山市	自性院 阿彌陀如来像納入品	鎌倉時代	寺院・仏像	六角		市指定有形文化財、館山市1987『広報たてやま』10月 https://www.city.tateyama.chiba.jp/files/300124146.pdf						○
6	千葉県木更津市	笹子城跡出土	15世紀	城跡	六角	[33]	千葉県文化財センター2004『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書14-木更津市笹子城跡-』		○				○
7	埼玉県東松山市	光福寺 石造宝篋印塔納入	元亨3(1323)銘	寺院・石塔	六角		明治19年(1886年)の「武蔵国比企郡岡郷光福寺宝篋印塔之記」、 https://www.city.higashimatsuyama.lg.jp/soshiki/55/3705.html		○		○		
8	神奈川県鎌倉市	理智光寺谷やぐら		墓	-		田代都夫1998『中世石屋「やぐら」の盛期と質的転換』『考古論叢 神奈川』第7集						
9	神奈川県鎌倉市	鶴岡八幡宮境内遺跡	16世紀中～後半	神社		[29]	鶴岡八幡宮境内発掘調査団1987『鶴岡文庫建設に伴う鶴岡八幡宮二十五坊の調査』			○		○	○
10	神奈川県鎌倉市	円覚寺門前遺跡出土	13世紀末～14世紀	埋納	六角	[45]	宗慈秀明 2015『円覚寺門前遺跡(No287)山之内字松岡134番地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21』(第2分冊)						○
11	神奈川県鎌倉市	覚園寺 大燈塔納置	正慶1(1332)年	寺院・石塔		4.6	神奈川県立歴史博物館ほか2012『武家の古都・鎌倉』、 https://bunkaniac.jp/db/heritages/detail/206880	○	○			○	
12	神奈川県鎌倉市	浄光明寺阿彌陀如来像納入	正安元(1299)年	寺院・仏像		4.0		○	○	○		○	
13	神奈川県小田原市	寶金剛寺(ほうこんごうじ)不動明王像	13～14世紀	寺院・仏像	六角	3.8	神奈川県指定重要文化財、 https://www.hohkongohji.jp/b_jiho.html						○
14	静岡県沼津市	浅間神社出土	鎌倉時代	神社	八角	4.0		○	○				
15	山梨県見延町	本遠寺	鎌倉時代	寺院	-				○				
16	石川県七尾市	七尾城跡採集	鎌倉時代?	城跡(臺)	六角	総高3.9 径地輪部1.5	https://khirin-id.rekihaku.ac.jp/rdf/nmjh_rekimin_h/11747077		○				
17	福井県福井市	一乗谷朝倉氏遺跡 第44次 赤淵地区出土	15～16世紀	城下	六角		福井県一乗谷朝倉氏遺跡資料館2000『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書 第44次 第17次調査』 https://asakura-museum.pref.fukui.lg.jp/database_list/046_archaeologic_aldataldata/detail.php?id=2048			○			
18	滋賀県大津市	実蔵坊	鎌倉時代	寺院		総高14.8	日本の美術28、大津歴博だより81	○	○				
19-1	滋賀県大津市	延暦寺 護法童子立像	鎌倉時代	寺院・仏像	六角	4.5	2018年解体修理で不動明王像とともに発見(新聞報道など)、2020年秋季企画展で展示						
19-2		延暦寺	鎌倉時代	寺院		総高14.8	京都国立博物館ほか2005『最澄と天台の国宝』						
20	滋賀県大津市	石山寺 木造如意輪観音半跏像	寛元3年(1245)	寺院・仏像	-		https://www.shiyamadera.or.jp/about/treasure						
21	滋賀県守山市	懸所宝塔		寺院・石塔	六角	[215]	空風輪欠		○				
22	三重県津市	高田寺 十三重塔下出土	鎌倉時代	寺院・石塔	六角	総高4.1	三重県有形文化財、三重県教育委員会データベース https://www.bunkaprefmie.lg.jp/bunkazai/da/daltemDetail?mngnum=730812			○			○
23	三重県伊賀市	新大仏寺	12～13世紀	寺院	三角	高5.45	奈良国立博物館2006『大動進 重源』	○	○				
24	三重県伊賀市	仏土寺	鎌倉時代	墓地近辺	六角	高2.9	三重県指定文化財、 https://www.bunkaprefmie.lg.jp/bunkazai/da/daltemDetail?mngnum=730992&pageCur=6	○	○		○		○
25	京都市東山区	馬町十三重層塔納置舍利具	永仁3(1295)	石塔	六角	高3.4		○	○		○		○
26	京都市東山区	法観寺五重塔心礎納置	室町	寺院・塔心礎		7.3		○	○				
27	京都市左京区	峰定寺 釈迦如来像納入品	正治元(1199)	寺院・仏像		高4.0	倉田文作編1973『日本の美術7 像内納入品』	○	○	○	○		
28	京都市右京区	仁和寺		寺院	-	11.5			○				
29	京都市伏見区	醍醐寺 弥勒菩薩像納入品		寺院・仏像	-		奈良国立博物館2023『仏師快慶の研究』						

※本一覧は、水晶製五輪塔形舍利容器を集成したものである。一部(水輪)のみ水晶製のものは含まない。
 ※番号は同一箇所については同一番号とし、舍利容器が複数確認されている場合、枝番号を付した。
 ※所在地は参考文献に記載された情報を記載した。
 ※形状は地輪の平面形が三角、六角、八角のもののみ記載した。
 ※参考文献は参照した複数の文献を記載した。集成されている文献は文献1～6とし、表1-2末尾に示した。個別で紹介されたものは文献名を記載した。
 また、所有する地方公共団体や宗教法人のHPに詳細な情報が掲載されている場合、これも参考文献の欄に記載した。

表 1-2 水晶製五輪塔形舍利容器一覧 (2)

番号	所在地	埋納・収納・出土場所名ほか	時期	遺跡の性格	形状	高さ [現存値]	参考文献/HPなど	文献1	文献2	文献3	文献4	文献5	文献6
30-1	京都府宇治市	橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角	高3.0~4.6	重文	○	○		○		○
30-2		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-3		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-4		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-5		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-6		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-7		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-8		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-9		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-10		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-11		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
30-12		橘寺放生院 浮島十三重層塔	弘安9(1286)年造塔	寺院・石塔	六角		重文	○	○		○		○
31	京都府八幡市	正法寺	室町時代	寺院		5.8		○	○				
32	京都府八幡市	八角院 木造元大師像納入	鎌倉	寺院・仏像		4.5		○	○				
33	京都府加茂町	海住山寺 厨子納入	中世	寺院・厨子	-	5.6	空風輪欠		○				
34-1	奈良市	西大寺 釈迦如来像納入	建長元(1249)年	寺院・仏像		3.8	国宝、倉田文作編1973『日本の美術7 像内納入品』	○	○	○			
34-2		西大寺 騎獅文殊菩薩像内納入	正安4(1302)年	寺院・仏像		4.8	国宝、倉田文作編1973『日本の美術8 像内納入品』	○	○				
34-3		西大寺	鎌倉	寺院	八角	11.4			○				
34-4		西大寺 金銅宝塔(燼塔)内納入	文永7(1270)年	寺院・宝塔	-	6.4			○				
34-5		西大寺 金銅宝塔(燼塔)内納入	文永7(1270)年	寺院・宝塔	-	2.7			○				
35-1	奈良市	般若寺十三重石塔納置品	建長5(1253)頃	寺院・石塔	六角	高2.8	奈良国立博物館2016『忍性-救済に捧げた生涯-』		○		○		○
35-2		般若寺十三重石塔納置品	建長5(1253)頃	寺院・石塔	六角	高3.9			○		○		○
35-3		般若寺十三重石塔納置品	建長5(1253)頃	寺院・石塔	六角	高3.5			○		○		○
35-4		般若寺十三重石塔納置品	建長5(1253)頃	寺院・石塔	六角	高3.9			○		○		○
36-1	奈良県宇陀市	室生寺 五輪塔納入木製五輪塔	室町初期	寺院・石塔	-	3.4	重文、宇陀市国指定文化財		○				
36-2		室生寺 宝篋印塔形厨子納入	永正9(1512)年(厨子)	寺院・厨子	-	10	HP https://www.city.udanara.jp/bunkazai/kyouiku/bunka/bunkazai/kunishitei-bunkazai.html		○				
37	奈良県上北山村	笹の窟出土	鎌倉	修験道行場	六角	2	笹ノ窟発掘調査団1995『笹ノ窟発掘調査概要報告書』上北山村教育委員会						
38	奈良県斑鳩町	法隆寺	貞和4(1348)年	寺院			https://tsumugu.yomiuri.co.jp/feature/%E6%AD%A3%E6%9C%88%E8%A1%8C%E4%BA%8B%E3%80%8C%E8%88%8E%E5%88%A9%E8%AC%9B%E3%80%8D%E3%81%8C%E9%96%8B%E5%82%AC/	○					
39	奈良県王寺町	達磨寺 宝篋印塔	中世	寺院・石塔		高10.0 地輪幅4.3	奈良県指定、王寺町教育委員会他 2005『達磨寺発掘調査報告書』、 https://home.oji-kankokokosil.net/wp-content/uploads/2017/02/map-darumapdf						
40	奈良県葛城市	當麻寺奥院 西塔相輪	建保7(1219)年	寺院・塔	六角		http://www.nihonnotoba3sakurane.jp/2015to/taimatera_ama.jpg 、 https://www.pref.nara.jp/secure/204966/taima.pdf						○
41	大阪府和泉市	施福寺 舍利厨子	南北朝14世紀	寺院・厨子	六角		奈良国立博物館だより93号、 https://www.narahaku.go.jp/wodpr_nh9/wp-content/uploads/2021/01/dayori_93.pdf						○
42	兵庫県西脇市	黒田大門 十三重塔		石塔	六角	高2.5 重2.5g	https://www.city.nishiwaki.jp/material/files/group/6/201301-24.pdf						○
43	広島県福山市	安国寺 法燈国師像納入	鎌倉	寺院・仏像		6.75	倉田文作編1973『日本の美術7 像内納入品』、S12年発見、 https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/soshiki/bunka/64318.html	○		○			
44	山口県山口市	龍藏寺 十一面観音納入	鎌倉	寺院・仏像	六角				○				
45	山口県防府市	阿弥陀寺鉄宝塔	建久8(1197)	寺院・宝塔	三角	高13.9	国宝、山口県の文化財HP、奈良国立博物館2006『大動進 重源』	○	○		○		
46	愛媛県松山市	湯築城跡出土	15世紀後半~16世紀初頭	城跡	六角	-	(財)愛媛県埋蔵文化財センター2000『湯築城跡』第4分冊						
47	大分県豊後高田市	圓福寺 大応国師像納入	建武4(1337)	寺院・仏像	六角	3.5	大分県指定、櫻井 成昭2014『木造大応国師坐像と像内納入品』『大分県立歴史博物館研究紀要』15、 https://www.city.bungotakada.oita.jp/site/bunkazai/1724.html		○				

参考文献

- 1 奈良国立博物館1983『仏舎利の荘厳』
- 2 (財)元興寺文化財研究所1995『五輪塔の研究-平成六年度調査概要報告-』
- 3 中央公論美術出版2003~2019『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇 第一期・第二期 総目録』
- 4 河田貞2000『瑞巖寺蔵水晶六角五輪塔仏舎利容器について』『東北歴史博物館 研究紀要』1
- 5 古田土俊一2012『中世前期鎌倉における五輪塔の様相』『考古論叢 神奈川』第20集
- 6 大内直輝2023『鏡峯寺蔵水晶六角五輪塔について』『仙台市博物館調査研究報告』第43号

輪が身の構造をとる。

舍利容器の時期は、鎌倉時代が圧倒的に多く、それを下るものは僅かであり、六角五輪塔形は5例に過ぎない。

集成した69基のうち、六角五輪塔形は25箇所(遺跡)38基が確認でき、半数以上を占める。六角五輪塔形については、納入例として代表的な般若寺と放生院の十三重石塔が叡尊と関わることから、叡尊との関係が指摘されている(河田2000)。ただし、瑞巖寺所蔵のものが正治2(1200)年寄進とされるほか、當麻寺西塔相輪で発見された古代の舍利容器に建保7(1219)年修理の際に納入された例があり(當麻寺ほか2018)、13世紀初頭には成立していたとみられる。

発見された場所や遺跡の性格ごとに水晶製五輪塔形舍利容器を分類すると(表2)、六角五輪塔形は、先に述べた般若寺と放生院の十三重石塔発見例が14基を占めるため、石塔から発見されたものが21基あり最も多い。しかし、それ以外の形態のものでは、仏像納置品が8基と多く、石塔、塔、厨子、金銅宝塔などを含め寺院に伝わるものが31基中28基ありほとんどを占める。それらと比較すると、六角五輪塔形は、仏像納置品を含め寺院への集中比率は低く、様々な遺跡から出土する傾向が認められる。

次に分布を確認すると(図4)、鎌倉より東と北陸で形態が確認できるものは全て六角五輪塔形で、瀬戸内海沿岸地域でも同形が多数を占める。一方、舍利容器分布の中心である畿内では、般若寺と放生院の十三重石塔を除けば六角五輪塔形は周辺に多く、中心部では少数である。また、鎌倉でも六角五輪塔形は少ない。この傾向は、前述の発見場所や遺跡の性格、あるいは水晶製品を加工した工房とも関連すると思われるが、1点ずつの来歴を分析する必要があり、本稿では傾向を指摘するに留める。

以上のように水晶製五輪塔形舍利容器、特に六角五輪塔形に関しては、①形態は、火・水・地

表2 水晶製五輪塔形舍利容器 形態・性格別集計

性格		六角	三角	八角	その他	合計	六角(%)	全体(%)
寺院	仏像	5	0	0	8	13	7.2	18.8
	石塔	21	0	0	6	27	30.4	39.1
	塔	1	0	0	1	2	1.4	2.9
	厨子	1	0	0	2	3	1.4	4.3
	金銅宝塔	0	0	0	2	2	0.0	2.9
	鉄宝塔	0	1	0	0	1	0.0	1.4
	その他	3	1	1	6	11	4.3	15.9
神社		0	0	1	1	2	0.0	2.9
遺跡出土	墓・やぐら	1	0	0	1	2	1.4	2.9
	塚・土坑	1	0	0	0	1	1.4	1.4
	門前町・埋納	1	0	0	0	1	1.4	1.4
	修験道行場	1	0	0	0	1	1.4	1.4
	城跡	2	0	0	0	2	2.9	2.9
	城下	1	0	0	0	1	1.4	1.4
合計		38	2	2	27	69	-	100.0

輪が身部となるものと水・地輪が身部となる物があり、双方が認められるが前者が多数を占める、②時期は鎌倉時代が中心であり、それより下るものは少数しか確認できない、③中心的な布域である畿内や鎌倉では主流ではなく、東国と北陸、瀬戸内海沿岸には多く存在するという3つの特徴が指摘できる。

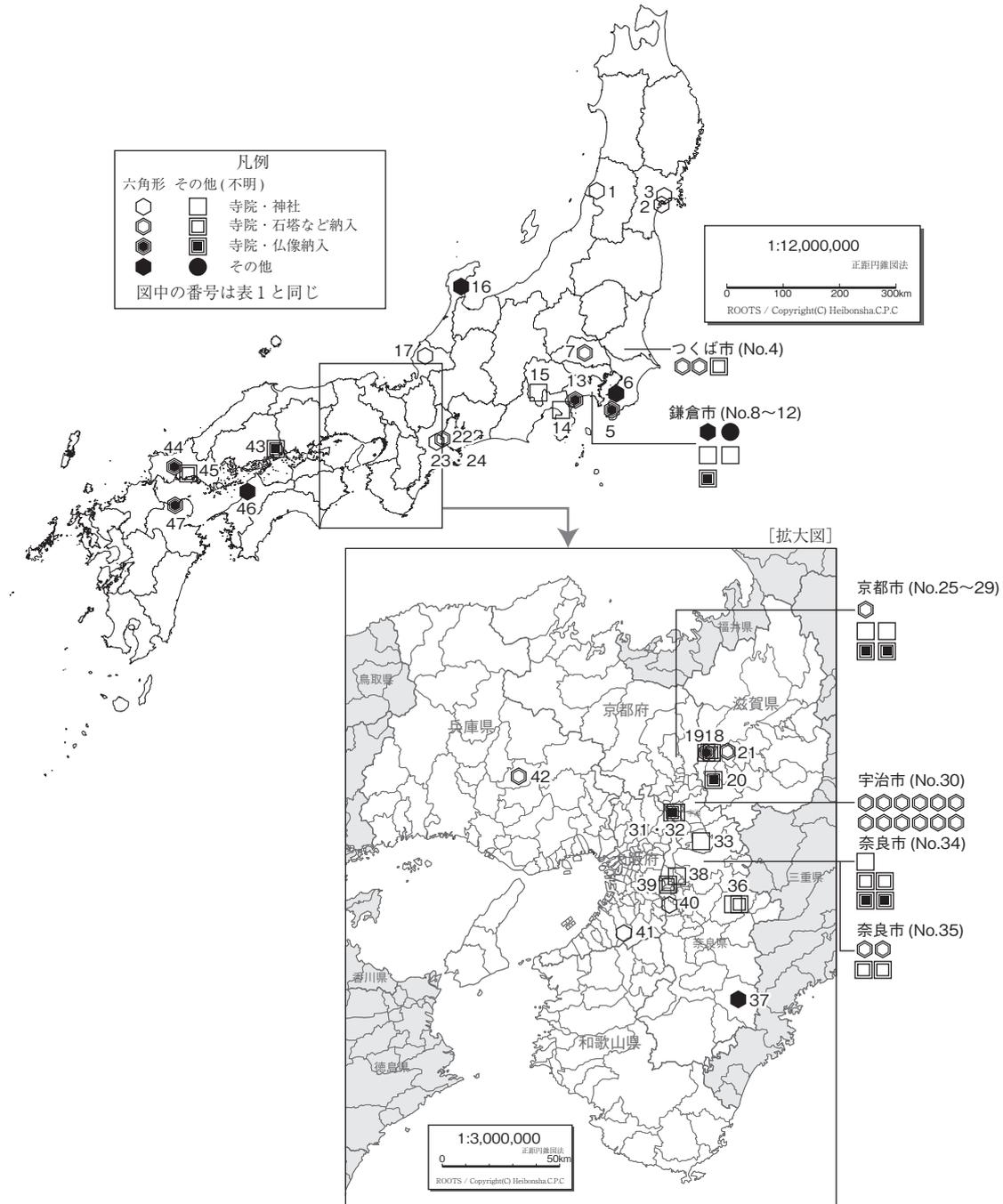


図4 水晶製五輪塔形舍利容器の分布

3 湯築城跡出土資料の評価

湯築城跡出土の水晶製五輪塔形舍利容器は六角五輪塔形であり、全国に分布する六角五輪塔形に追加できるものである。時期は15世紀末から16世紀初頭の火災直後とみられる。

前項の①～③の特徴から湯築城跡出土の水晶製五輪塔形舍利容器を評価すると、①に関しては、火・水輪の連続が確認できるため、火・水・地輪が身部となるものであることがわかる。②については、出土の時期は15世紀末から16世紀初頭であるが、製品の時期は不明である。湯築城跡出土の水晶製五輪塔形舍利容器は地輪の角の加工が大変丁寧で、細かい面取りもなされており、最も類例の多い鎌倉時代のものが伝えられた可能性も十分に考えられる。これについては、時期を追っての製品の特徴が明らかとなって以降検討すべき課題と考える。③に関しては、瀬戸内海沿岸地域における六角五輪塔形の卓越を反映したものと言え、全国の分布傾向と一致していることが指摘できる。

これまで述べてきたように、水晶製五輪塔形舍利容器は寺院関係の発見例や出土例が多い。寺院の塔や石塔以外で、発掘調査によって出土したものとしては、鎌倉時代とみられる例が、塚・土坑、門前町での埋納、修験道行場があるのに対して、中世後半期では、城館や城下からの出土例が確認できる。具体的には、笹子城跡(千葉県)(図5-1)(千葉県文化財センター2004)、一乗谷朝倉氏遺跡(福井県)(図5-2)(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2001)が挙げられる。これらは六角五輪塔形であり、湯築城跡出土例もそれらに追加できる。出土状況が明らかなものは、笹子城跡が整地層出土とされる。出土例が少数であるため、これらから共通性や相違点を見出すことは難しい

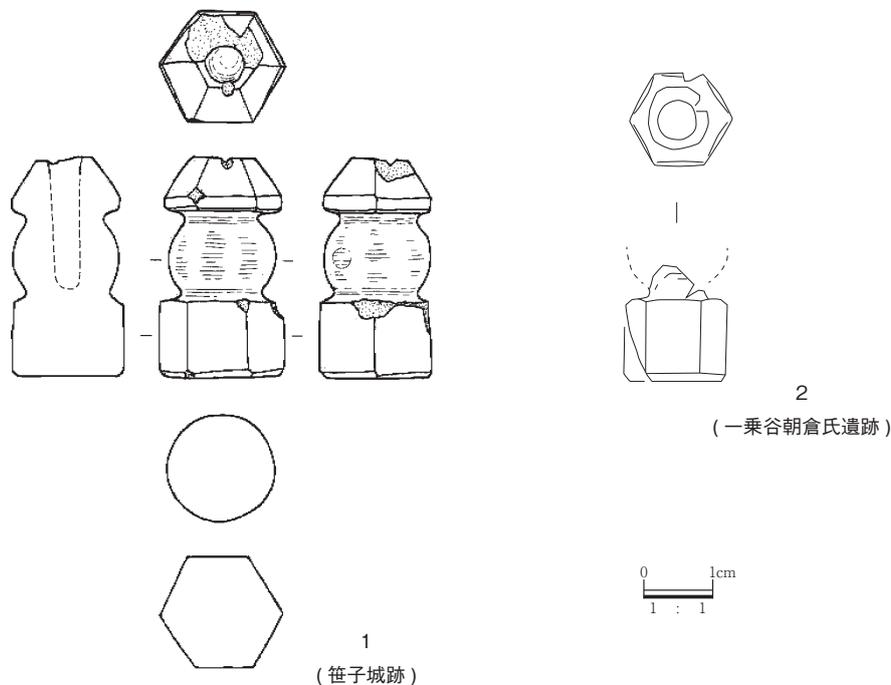


図5 中世後期水晶製五輪塔形舍利容器

が、戦国時代には、寺院ではなく城館から出土する例が確実に存在し、それらは六角五輪塔形であることが指摘できる。

城館から出土する要因としては、城館内に存在した持仏堂や厨子など宗教の場において信仰の対象とされていた、あるいは破損したため舍利容器としては機能せず、地鎮など宗教性を帯びた場で使用されたなどの想定ができる。湯築城跡の出土地点は、礎石建物に近接し、その建物は小規模ながら青磁花瓶類を所有する特殊な建物である。また、火災後にほどなく麦類とともに廃棄または埋納されており、前者と後者双方の可能性が考えられる。

おわりに

湯築城跡出土の水晶製品について、あらためて水晶製五輪塔形舍利容器であることを確認し、全国集成と傾向分析を行った上で評価した。水晶製五輪塔形舍利容器は大変希少で特殊な遺物であり、湯築城の特徴を考える上で新たな情報を加えることができたと考えている。

しかし、五輪塔形舍利容器自体について、その形態変化や変遷、発見場所を追っての詳細な分析、生産地の問題などは未だ論じる事ができておらず、それらは今後の課題としたい。

謝辞

本稿を記すにあたり、古田土俊一氏、高桑登氏、水澤幸一氏、山口博之氏、松葉竜司氏、沖野実氏にご教示、ご協力を賜りました。末尾となりましたが記して感謝いたします。

注

*1 本集成は過去に行われた集成、新規発見されたものの報道、自治体や寺社のHPなども参照して行った。個人蔵などで本来の出土地・所蔵の不明なものは含めていない。筆者が実見できていないものも多く、形状は過去に公表された成果や図・写真を参考にしている。その情報が得られなかったものもあり現時点でわかるもののみ形状を記載した。

参考文献

- 大内直輝2023「籠峯寺蔵水晶六角五輪塔について」『仙台市博物館調査研究報告』第43号
河田貞2000「瑞巖寺蔵水晶六角五輪塔仏舎利容器について」『東北歴史博物館 研究紀要』1
古田土俊一2012「中世前期鎌倉における五輪塔の様相」『考古論叢 神奈河』第20集
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『湯築城跡』第4分冊
(財)元興寺文化財研究所1995『五輪塔の研究—平成六年度調査概要報告—』
(財)千葉県文化財センター 日本道路公団2004『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書14—木更津市笹子城跡—』
柴田圭子2000「出土遺物からみた湯築城跡」『湯築城跡』第4分冊 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
當麻寺 奈良県教育委員会 奈良国立博物館2018『国宝 当麻寺西塔納置舍利容器について【報道発表資料】』
中央公論美術出版2003～2019『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇 第一期・第二期 総目録』
奈良国立博物館1983『仏舎利の荘嚴』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2001『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅷ 第44次 第17次調査』

図引用

- 図1 SB001平面図は(財)愛媛県埋文2000図68を再トレース
- 図2 (財)愛媛県埋文2000図69-190・191に加筆、再トレース
- 図3 (財)愛媛県埋文2000図71-197・198に加筆、再トレース
- 図4 筆者作成
- 図5-1 (財)千葉県文化財センター2004第133図123
- 図5-2 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2001第16図659を再トレース

(2024年2月28日)

令和5年度 調査員の研究動向

氏名	職名	項目	内容
柴田圭子	調査課長	①	「元明代龍泉窯青瓷と明代青花瓷の編年」 ミニシンポジウム「沖縄出土中国陶磁の分類・編年の再検討」
		②	「首里城跡初期の火災と出土陶磁器」 『考古学ジャーナル』No.793 北隆館ニューサイエンス社
乗松真也	副課長	①	「瀬戸内地方における弥生時代後期から古墳時代前期の土錘の展開」 海洋考古学会第13回研究会
		②	「瀬戸内海の島嶼部 ―備讃瀬戸―」 『季刊考古学・別冊41 四国考古学の最前線』雄山閣
松葉竜司	担当係長	①	「古代若狭国の塩の生産と消費 ―調塩と在地を行き交う塩―」 愛媛大学法文学部考古学研究室第19回シンポジウム「古代の塩の生産と消費―中央と地方―」
		②	「福井県・船岡遺跡の再検討 ―船岡遺跡の再評価と土器製塩における遺跡内分業の観点から―」 科学研究費基盤研究B「古代都城から出土する製塩土器の生産地推定」(代表 神野 恵) 古代の製塩土器検討会
沖野 実	主任調査員	①	「高見I遺跡出土の安山岩製石器の蛍光X線分析」 2023年度日本旧石器学会 第21回研究発表(共同ポスター発表)
		②	「趣旨説明」 『中・四国地方における後期旧石器時代前半期の地域課題』中・四国旧石器文化 談話会40周年記念大会
首藤久士	主任調査員	①	「四国地方」 『中・四国地方における後期旧石器時代前半期の地域課題』中・四国旧石器文化 談話会40周年記念大会
		②	「愛媛県における先史石製民具の研究1 ―旧石器時代・年代観―」 『九州旧石器』第27号 橋昌信先生追悼論文集 九州旧石器文化研究会
青木聡志	調査員	①	「愛媛県における先史石製民具の研究2 ―縄文時代・推定石製狩猟具・形態計測分析―」 『愛媛考古学』第27号 犬飼徹夫先生卒寿記念号 愛媛考古学協会
		②	「今治市五十嵐鼻遺跡の調査から考える」 ソーシャル・リサーチ12月例会
青木聡志	調査員	①	「中国・四国地方の動向」『東洋陶磁学会 会報』第101号 東洋陶磁学会
		②	「愛媛県内における井戸遺構の再検討 ―井戸遺構の分類と時期別変化を中心に―」 『愛媛考古学』第27号 犬飼徹夫先生卒寿記念号 愛媛考古学協会

項目の①は研究会や講座での発表、②は考古学関係書への執筆(論文・研究ノート・報告など)である。

愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要
紀要愛媛

第 20 号

2024年5月

編集・発行 公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター
〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68-1
TEL 089-911-0502
印刷 株式会社ハラプレックス